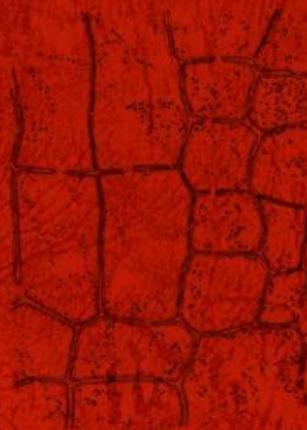


那珂君休遺跡 VII

—那珂君休遺跡第7，8次発掘調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第587集

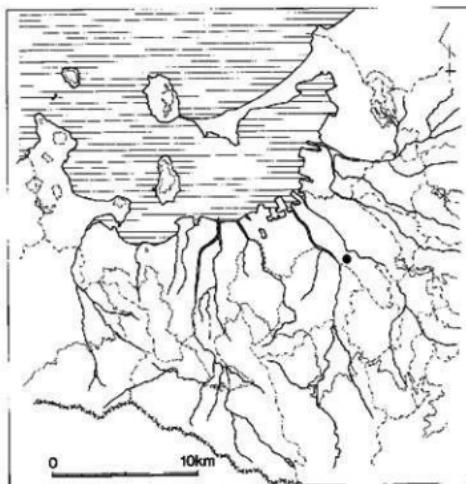


1998

福岡市教育委員会

な か くんりゅう
那珂君休遺跡VII

—那珂君休遺跡第7・8次発掘調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第587集



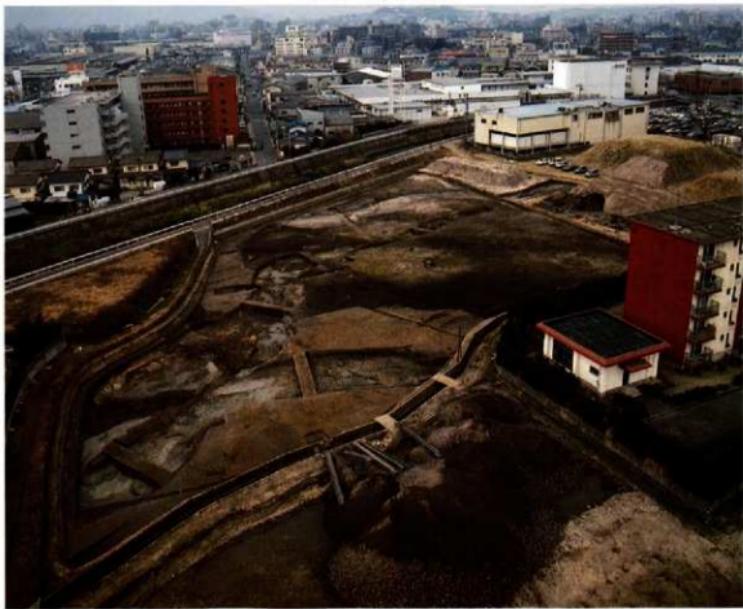
遺跡略号 NKR-7・8
遺跡調査番号 9612-9713

1998

福岡市教育委員会



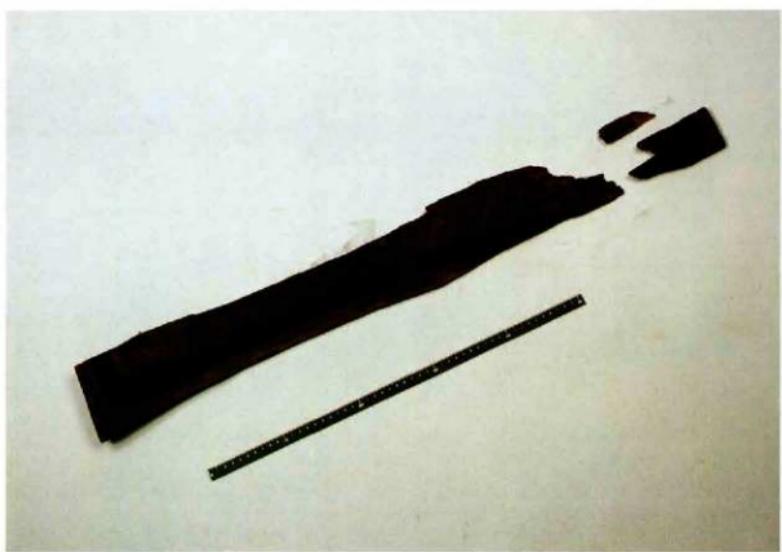
1. I区下層水田址



2. II区下層全景



1. SX31出土履



2. SX33出土盾

序

福岡市の陸の玄関口である博多駅の南側には古くから大陸文化の先進地として栄えた「奴国」の拠点地域とされる遺跡群が広がっています。今回報告する那珂君休遺跡はその中の代表的な生産遺跡であり、これまで開発に伴い6次の発掘調査が行われ、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は土地区画整理事業、および共同住宅建設とともに実施された第7・8次調査を報告するものです。調査の結果、古墳時代の水田址、水路、井堀などが検出され、それに伴って多様な木製品が出土するなど、多人な成果をあげることができました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

最後に、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた第7次調査における福岡市那珂土地区画整理準備組合の方々、第8次調査地権者の山浦泰蔵氏に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成10年9月1日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

1. 本章は福岡市博多区那珂4丁目における土地整理に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成8(1996)年から翌平成9(1997)年にかけて発掘調査を実施した那珂君体(なかくんりゅう)遺跡第7次調査の報告である。
2. 本章に掲載した遺構の実測は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の井上蘭子、田上勇一郎、佐藤一郎他があたり、航空測量はアジア航測株式会社による。撮影は田上、佐藤の他、担当の力武卓治があたったが、空中写真は有限会社空中写真企画による。
3. 本章に掲載した遺物の実測・撮影は上層遺構出土遺物を田上、下層遺構出土遺物は井上があたり、一部、比佐陽一郎(福岡市埋蔵文化財センター)、久住猛雄(埋蔵文化財課)によった。
4. 製図は遺構を藤村佳公恵、遺物は田上、井上が行った。
5. 本章の執筆はI~III、IVの下層検出遺構を佐藤が、IVの上層検出遺構を田上、Vの下層遺構出土遺物は井上が行い、編集は井上、佐藤が行った。
6. 本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

遺跡調査番号	9612	遺跡略号	NKR-7
調査地地番	博多区那珂四丁目	分布地図番号	024-0086
開発面積	15,000m ²	調査面積	9,834m ²
調査期間	1996年5月7日~1997年5月20日		

本文 目 次

I.はじめに	
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	1
II.遺跡の位置と環境	3
III.調査の記録	7
1 発掘調査の概要	7
2 土層	7
IV.検出遺構	10
1 上層検出遺構	10
水田遺構	10
出土遺物	17
2 下層検出遺構	20
(1)下層水田址	20
(2)河川・水路	23
(3)井戸・槽状遺構	26
(4)小結	30
V.出土遺物	36
(1)S D20出土土器	36
(2)S D22出土土器	43
(3)S D20出土石器	43
(4)下層水田出土土製品	43
(5)S D20出土木器	50
(6)S D22・S K21出土木器	62
(7)小結	62

挿図目次

第1図 那珂君体遺跡と周辺の遺跡(1/25000)	3
第2図 那珂深タサ・君体遺跡調査区域図(1/8000)	4
第3図 調査区壁面土層断面図(1)(1/80)	8
第4図 調査区壁面土層断面図(2)(1/80)	9
第5図 上層水田遺構図(1/500)	折図
第6図 水田⑥周辺実測図(1/200)	15
第7図 上層水田出土遺物実測図1(1/3)	17
第8図 上層水田出土遺物実測図2(1/3)	19

第9図	上層水田出土鉄拓影(1/1)	19
第10図	I区下層水田遺構平面実測図(1/400)・断面模式図(水平方向1/400・垂直1/40)	21
第11図	II区下層水田遺構平面実測図(1/400)	22
第12図	S D20・22河川全体図実測図(1/400)	24
第13図	河川土層断面図(1/80)	25
第14図	河川・土壤土層断面図(1/80)	26
第15図	井堰・槽状遺構配置図(1/200)	27
第16図	S X31井堰実測図(1/80)	29
第17図	S X31井堰土層断面図(1/40)	30
第18図	S X32井堰実測図(1/80)	31
第19図	S X32井堰土層断面図(1/40)	31
第20図	S X33井堰実測図(1/80)	32
第21図	S X33井堰土層断面図(1/40)	32
第22図	S X35槽状遺構実測図(1/40)	33
第23図	S X34井堰実測図(1/40)	34
第24図	那珂君体遺跡全体図(1/4000)	35
第25図	S D20出土土器実測図(1)(1/4)	37
第26図	S D20出土土器実測図(2)(1/4)	38
第27図	S D20出土土器実測図(3)(1/4)	39
第28図	S D20出土土器実測図(4)(1/4)	40
第29図	S X31～S X34出土土器実測図(1/4)	42
第30図	S D22出土土器、S D20出土石器、下層水田出土土製品実測図(1/4, 1/2, 2/3, 1/1)	44
第31図	S D20出土木器実測図(1)(1/4)	51
第32図	S D20出土木器実測図(2)(1/4)	52
第33図	S D20, S X31出土木器実測図(1/4, 1/2)	53
第34図	S X31出土木器実測図(1)(1/4)	54
第35図	S X31出土木器実測図(2)(1/4)	55
第36図	S X32, S D22, S K21出土木器実測図(1/4, 1/2)	56
第37図	S X33出土盾実測図(1/4)	57
第38図	S D20出土木器実測図(3)(1/4)	58
第39図	S D20出土木器実測図(4)(1/4)	59
第40図	S X31～33出土杭及び建築材実測図(1/8, 1/4)	60
第41図	S X35出土杭実測図(1/4)	61
第42図	二叉鍬復元図	63
第43図	柄復元図	63
第44図	木器計測部位	65

表 目 次

表1 那珂深ヲサ・那珂君体遺跡発掘調査一覧.....5

表2	I区下層水田面積・周囲長さ一覧	20
表3	出土土器・石器観察表	45
表4	出土木器計測表	66

付 図 目 次

- 付図1 上層水田址全体図（航空測量1/200）
 付図2 I区下層水田址全体図（航空測量1/200）

図 版 目 次

卷頭図版 1	1. I区下層水田址	2. II区下層全景
卷頭図版 2	1. S X31出土層	2. S X33出土層
図版 1	1. I区下層全景（南から）	2. II区下層全景（東から）
図版 2	1. I区下層水田址（南東から）	2. I区南西壁面柱上層（北東から）
図版 3	1. I区南東壁面土層（西から） 3. 近世溝土層（北西から）	2. 近世溝土層（北西から） 4. I区南西壁面土層（北東から）
図版 4	1. I区下層水田（航空写真） 3. S D20・22（南東から）	2. S D20（新）（空中写真） 4. S D20・22（空中写真）
図版 5	1. S D20土層（東から） 3. S D20（新）土層（南東から）	2. S D20（新）十層（南東から） 4. S D20（新）土層（南東から）
図版 6	1. S D22土層（東から） 3. S D22七層（南から）	2. S K21土層（南東から） 4. S D（南から）
図版 7	1. S D22・S X31～33・35（南東から） 3. S X31～33・35（北西から）	2. S X31～33・35（南東から） 4. S X31・32井堰（北東から）
図版 8	1. S X31・32井堰（南から） 3. S X33井堰（北西から）	2. S X32間イネ科植物
図版 9	1. S X33井堰（南から） 3. S X33南東部分（北東から）	2. S X33井堰（南西から） 4. S D20（新）土層（南東から）
図版10	1. S X35棚状造構（南から） 3. S X33南東部分（南西から）	2. S X35棚状造構（南東から） 4. S X35棚状造構（南東から）
図版11	1. S X31土層（南西から） 3. S X33上層（北から）	2. S X32土層（北東から） 4. S X34井堰（東から）
図版12	1. S D20棒泥出土状況 3. S D20三又鍬出土状況 5. S D20二又鍬出土状況	2. S D20大足出土状況 4. S D20二又鍬出土状況 6. S D20二又鍬出土状況
図版13	1. S X31二又鍬出土状況 3. S D20二又鍬出土状況 5. S X33盾出土状況	2. S X31鍬出土状況 4. S D22櫛出土状況 6. S D20容器出土状況
図版14	1. S X31鍬柄出土状況	2. S D20二又鍬出土状況

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 3. S D20機織機部材出土状況 | 4. S D20機織機部材出土状況 |
| 5. S X31履出土状況 | 6. S X31三叉鍼出土状況 |
| 図版15 1. S D20容器出土状況 | 2. S X33梯子出土状況 |
| 3. S D20土師器出土状況 | 4. S X33下層土師器出土状況 |
| 図版16~30 出土遺物 | |

写 真 日 次

写真1 那珂深フサ遺跡第1次調査.....	6
写真2 那珂君休遺跡第2次調査.....	6
写真3・4 那珂君休遺跡第3次調査.....	6
写真5・6 那珂君休遺跡第4次調査.....	6
写真7 上層水田作業風景.....	10
写真8 上層水田航空写真.....	11
写真9 上層水田I区全景(南から) 写真10 上層水田II区全景(南東から)	12
写真11 畦畔 写真12 畦畔 写真13 水口A 写真14 水口B.....	13
写真15 上層水田の足跡(東から) 写真16 水田⑥の足跡(北西から) 写真17 足跡.....	14
写真18 S X01(南東から) 写真19 S X02(南東から)	15
写真20 S X03上層(北西から) 写真21 S X03(北西から)	15
写真22 S D04(南東から) 写真23 S D05(北東から) 写真24 S D06(南東から)	16
写真25 S D07(南東から) 写真26 S D08(南から) 写真27 調査風景(北から)	16
写真28 上層水田出土遺物(1).....	18
写真29 上層水田出土遺物(2).....	19
写真30 上層水田出土錢.....	19

I はじめに

1 調査にいたる経過

1995（平成7）年6月22日、福岡市那珂土地区画整理準備組合から本市に対して博多区那珂4丁目地内約1.5haにおける土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の事前審査の申請がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂君体（なかくんりゅう）遺跡群の南西に位置し、市営住宅建設に伴う第1次調査区の南、同第2・4次調査区の北西、学校建設に伴う第3次調査区の南西に接する平地である。これを受けて福岡市教育委員会埋蔵文化財課は、周辺の数次にわたる発掘調査結果から、当該地が弥生時代から中世にかけての水田遺構の検出が予測され、1995（平成7）年10月日に試掘調査を実施した。調査の結果、申請地の中、11,000m²の範囲で2層にわたる水田面、杭列等の存在を確認した。その後、準備組合と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積15,000m²の内遺構が確認された11,000m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。国庫補助の下、福岡市那珂土地区画整理準備組合と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は同年5月7日から翌1997年5月20日まで行われた。

2 調査の組織

調査委託 福岡市那珂土地区画整理準備組合

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（前任） 柳田純孝

第2係長 山口誠治

庶務担当 内野保基（前任） 谷口真由美

調査担当 発掘調査 山崎龍雄 池山祐司

発掘調査 田上勇一郎（～1996年9月）、佐藤一郎（1996年9月～1997年2月、1997年4月～5月）、井上莉子（1996年10月～1997年4月）、力武卓治（1997年3月）

発掘調査・資料整理協力者 秋山温、宇美孝泰、梅木繁良、小川博、尾花憲吾、楠本純次、高着一夫、小路丸嘉人、真田弘二、志堂寺堂、柴田博、高田勘四郎、中村米重、吹春憲治、前山政義、三浦力、村本義夫、森本良樹、伊藤美伸、奥田弘子、尾崎真佐子、兼田ミヤ子、河津信子、木村文子、桑原美津子、古賀美恵子、後藤タミ子、指山歌子、指山浩子、瀬戸口周子、高手与志子、高橋茂子、為房紋子、延板春美、十時亜矢子、野口リュウ子、橋口真由美、林厚子、播磨博子、福田友子、藤野洋子、藤原直子、水野由美子、山口慶子、山崎久美子、青住シヅエ、相川和子、田中やす子、藤信子、藤野邦子、藤村佳公恵

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について福岡市那珂土地区画整理準備組合長廣田良己氏、準備組合事務局福岡市農業共同組合吉安公明氏をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。



- | | | | |
|------------|-------------------|-------------|-------------|
| 1. 厚多遺跡群 | 7. 那珂造跡群 | 13. 丸尾遺跡 | 19. 赤井手遺跡 |
| 2. 福岡城 | 8. 須河瀬タサ遺跡、那珂君休遺跡 | 14. 日佐遺跡群 | 20. 三宅魔寺 |
| 3. 幸拍遺跡 | 9. 板付遺跡 | 15. 須久古祭遺跡群 | 21. 野多日遺跡 |
| 4. 吉添本町造跡群 | 10. 諸岡遺跡 | 16. 須久水田遺跡 | 22. 野多日佔領遺跡 |
| 5. 古城遺跡群 | 11. 家原遺跡 | 17. 須久園木遺跡 | |
| 6. 比志遺跡群 | 12. 五十川遺跡 | 18. 須久四丁目遺跡 | |

第1図 那珂君休遺跡と周辺の遺跡(1/25000)

II 遺跡の位置と環境

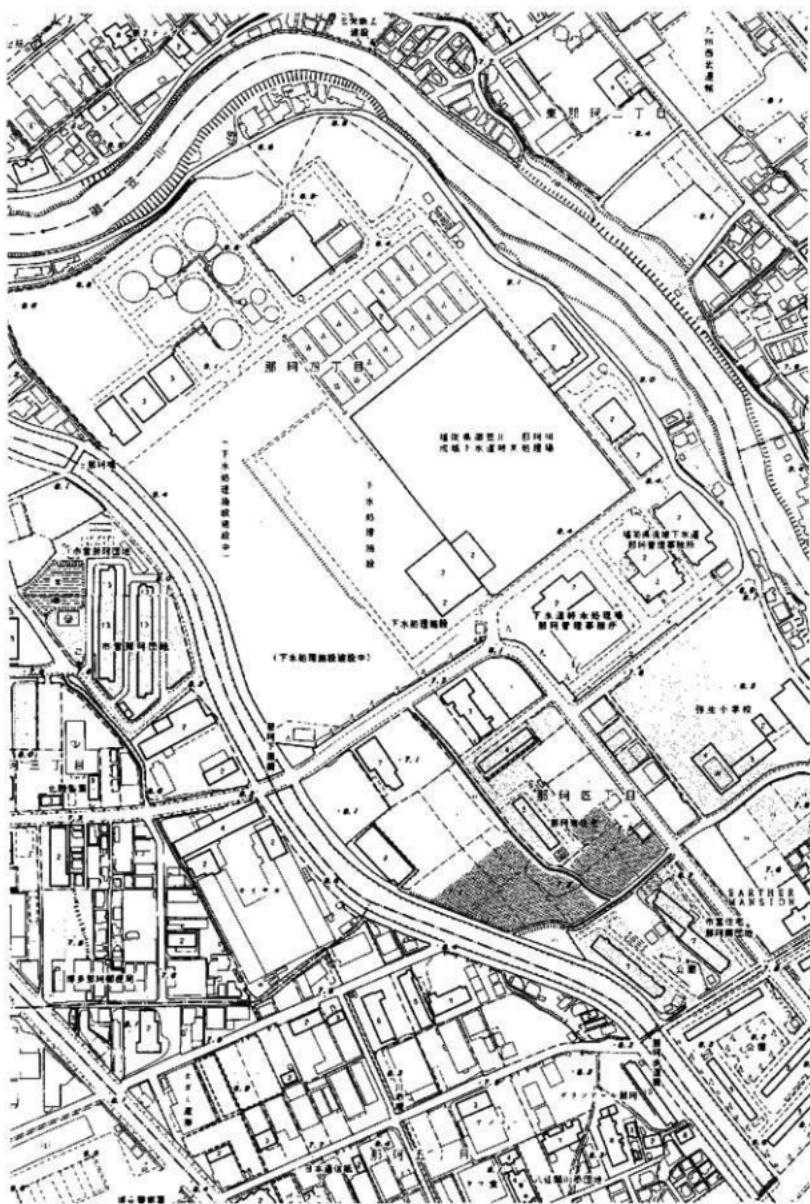
那珂君体遺跡は諸岡川と御笠川にはさまれた沖積平野に位置し、標高m前後をはかる。周辺には南東の春日丘陵から標高を北に下げながらベルト状に丘陵が延び、丘陵の中位段丘上の台地には板付遺跡、諸岡遺跡群、那珂遺跡群、比志遺跡群など「奴国」の拠点とされる遺跡群が分布している。弥生時代には大規模な集落遺跡が営まれ、古墳時代以降も引き続いだ丘陵上では集落が展開し、那珂川流域には首長墓とされる前方後円墳が築造され始める。那珂君体遺跡の北西約1kmには福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が位置する。以下、周辺遺跡のうち沖積平野に立地する遺跡について概要を述べる。

那珂深ヲサ遺跡

那珂君体遺跡の北西、諸岡川をはさんで約500mのところに位置し、丘陵の裾部に立地する。3次にわたって発掘調査が実施されている。検出された造構は古墳時代前期の溝2条、棚状造構（井堰）3、12世紀後半の溝1条などで、水田面も確認されたが区画の検出までには至っていない。奈良時代の土壙から「中寺」と記された墨書き器が出土している。

那珂君体遺跡

現在まで8次にわたる調査が実施されている。1次調査では溝状造構2条、柱穴群が検出されている。うち溝1条の時期は8世紀後半以降で、条里関係の造構とみられる。1次調査では中世の水田址2面、5世紀代の水田44枚、水田内で排水施設、水溜状造構、旧河川、さらに下層からは4世紀後半とみられる旧河川と水利造構が検出されている。5世紀代の水田の区画は多角形ないし四角形、1枚当たりの面積も16m²～100m²と規格性がみられない。第3次調査では中世の水田址、古代の条里関連の溝、古墳時代前期の水田址、弥生時代後期の井堰などが検出されている。中世水田址では水田に先行する畑地とみられる畝状造構が検出されている。条里関連の溝は2条検出され、西偏42°の方位をとる。古墳時代前期の水田は43枚検出され、2次調査検出例と同じく区画は多様で、1枚当たりの面積も25m²～170m²とまちまちである。2次調査の水田と一連のものとされている。旧河川部左岸では護岸用の杭列、溜まり状造構、棚状造構（井堰）が検出されている。第4次調査では中世の水田址、吐畔補強の杭列3、水路1、畑状造構、6世紀末～7世紀初頭の旧河川、井堰3、杭列2が検出されている。5・6次調査では第3次調査検出の古墳時代前期水田址と一連の水田区画が検出されている。



第2図 那珂深タサ・君休遺跡調査区域図(1/8000)

遺跡名(次数)		調査期間	調査面積	所 在 地	調査報告書
那珂深ヲサ(1)	7803	19781211	3,130m ²	博多区那珂字深ヲサ	福岡市教育委員会 1981 「那珂深ヲサ I」 埋蔵文化財調査報告書第72集
		19790503			
那珂深ヲサ(2)	8020	19800603	5,000m ²	博多区那珂字深ヲサ	福岡市教育委員会 1982 「那珂深ヲサ II」 埋蔵文化財調査報告書第82集
		19810121			
那珂深ヲサ(3)	8020	19810407	2,000m ²	博多区那珂字深ヲサ	同 上
		19810630			
		19800825			
那珂君体(1)	8047	~	710m ²	博多区那珂字君体	同 上
		19800910			
那珂君体(2)	8226	19820913	2,900m ²	博多区那珂4丁目	福岡市教育委員会 1984 「那珂君体遺跡II」 埋蔵文化財調査報告書第106集
		~			
		19830117			
那珂君体(3) (久平)	8336	19830527	9,000m ²	博多区那珂4丁目	福岡市教育委員会 1986・1987 「那珂久平遺跡I・II」 埋蔵文化財調査報告書第133・163集
		19840126			
那珂君体(4)	8604	19860522	2,900m ²	博多区那珂4丁目	福岡市教育委員会 1989 「那珂君体遺跡IV」 埋蔵文化財調査報告書第208集
		19861122			
那珂君体(5)	9557	19950227	680m ²	博多区那珂4丁目	福岡市教育委員会 1997 「那珂君体遺跡VI」 埋蔵文化財調査報告書第517集
		~			
		19950327			
那珂君体(6)	9605	19960408	415m ²	博多区那珂4丁目	福岡市教育委員会 1997 「那珂君体遺跡V」 埋蔵文化財調査報告書第502集
		19960420			
那珂君体(7)	9612	19960507	11,000m ²	博多区那珂4丁目	福岡市教育委員会 1998 「那珂君体遺跡VII」 埋蔵文化財調査報告書第587集
		19970520			
那珂君体(8)	9713	19970506	1,009m ²	博多区那珂4丁目	福岡市教育委員会 1998 「那珂君体遺跡VIII」 埋蔵文化財調査報告書第587集
		19970618			
表1 那珂深ヲサ・那珂君体遺跡発掘調査一覽					



写真1 那珂深ヲサ遺跡第1次調査



写真2 那珂君休遺跡第2次調査



写真3 那珂君休遺跡第3次調査



写真4 那珂君休遺跡第3次調査



写真5 那珂君休遺跡第4次調査



写真6 那珂君休遺跡第4次調査

III 調査の記録

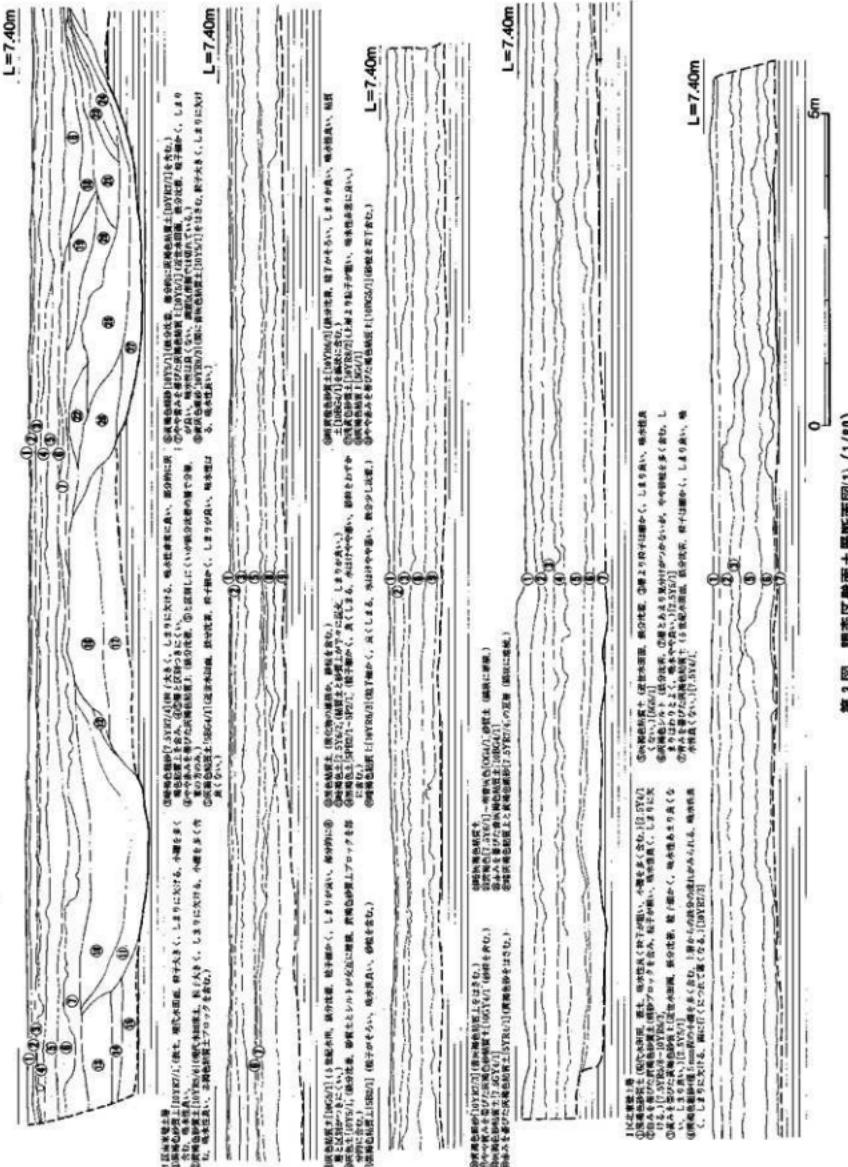
1 発掘調査の概要

那珂君休遺跡群第7次調査区は那珂君休遺跡群の南西部に位置し、現況の水田面の標高7m前後を測る。その周囲には第1~4次調査区が隣接する。調査は5月7日にバックホーによる表土剥ぎから開始し、洪水砂の除去を人力で行い、水田面の検出にあたった。調査区の中央を南東から北西に流れる農業用水路を境に、その東側をI区、西側をII区とし、9月12日に航空測量、写真撮影を行い9月19日に上層水田址の調査は終了した。

9月24日からは、下層水田址の検出に掛かった。下層の水田耕作土上面に堆積した粗砂層の上までバックホーで鉱取り、断片的に畦畔が確認された時点で人力に切り替え粗砂の除去、検出作業を行った。粗砂が厚く堆積し、水田区画が良好に残存するI区から先に着手し、耕土は水路を跨いでII区南側に置き場を確保した。事前の協議により下層水田址の空測はI区を対象とし、遺構の検出と並行して1/100の平板測量を行った。12月2日には写真、測量を終え、II区下層の遺構検出に入った。II区の覆かれた耕土をI区に送り埋め戻し、II区の耕土はI区西側および測量対象外のII区北側に置き場を確保した。I区で検出した水田址の広がりが確認されたが、水田面はI区でみられたように粗砂や細砂で厚く覆われてはおらず、水田9枚の検出にとどまった。試掘調査で確認された旧河川、水路の上端は容易には確認できず、試掘トレントを浚い一部括張、土層断面から立ち上がりを確認し、II区の東南隅から遺構の検出に掛かった。遺構の実測は1/100の平板測量と1/20の遺構実測を併用して行った。空測の対象外の水田址に関しては足跡部分、旧河川内の非壠、杭列は1/20で行った。河川中の土器の出土位置は平板測量で記録した。II区の全景は気球による空中写真による。5月1日には実測、取り上げを終えた部分から埋め戻しを開始したが、旧河川部を中心に湧水が著しくその部分に関しては施工業者によっている。

2 土層（第3・4図、図版3）

調査区域の現況は水田で、調査の前年まで耕作が行われていた。①層はその水田耕作土にあたる黒褐色砂質土（粒子は大きくしまりに欠ける。小礫を多く含み、吸水性は良い。）、その下の②層は黄褐色砂質土（粒子は大きくしまりに欠け、吸水性は良い。小礫を多く含み、灰褐色粘質土ブロックを含む。）、水田底土である。③層は暗褐色粗砂（粒子は大きくしまりに欠け、吸水性は非常に良い。）で、洪水砂にあたる。部分的に灰褐色粘質土を含み、④⑤層と区別しにくい。④層はやや赤みをおびた灰褐色粘質土で、東側で鉄分沈着の層がみられ、それによって⑤層と分層した。⑤層は灰褐色粘質土（粒子は小さくしまりが良い。）で、鉄分が沈着している。近世水田面に相当する。⑥層は黄褐色砂質土（鉄分が沈着し、部分的に灰褐色粘質土を含む。）で、近世水田底土である。⑦層はやや青みを帯びた灰褐色粘質土（粒子は小さくしまりが良い。吸水性はあまり良くない。）で、鉄分が沈着している。近世水田面に相当する。調査区南側では切れている。⑧層は黄灰色粗砂（粒子は大きくしまりに欠け、吸水性は良い。）で、青灰色粘質土の間層をはさむ。洪水による堆積である。⑨層は灰色粘質土（粒子は小さくしまりが良い。）で、鉄分が沈着している。洪水上砂で覆われた水田面である。第2次調査で検出されたV層水田面と同一の面であり、第2次調査の所見から時期は5世紀前半とみられる。⑩層の粗砂に覆われていない部分では、⑪層と区別しにくい。



第3図 地盤区割面土壌断面図(1) (1/10)

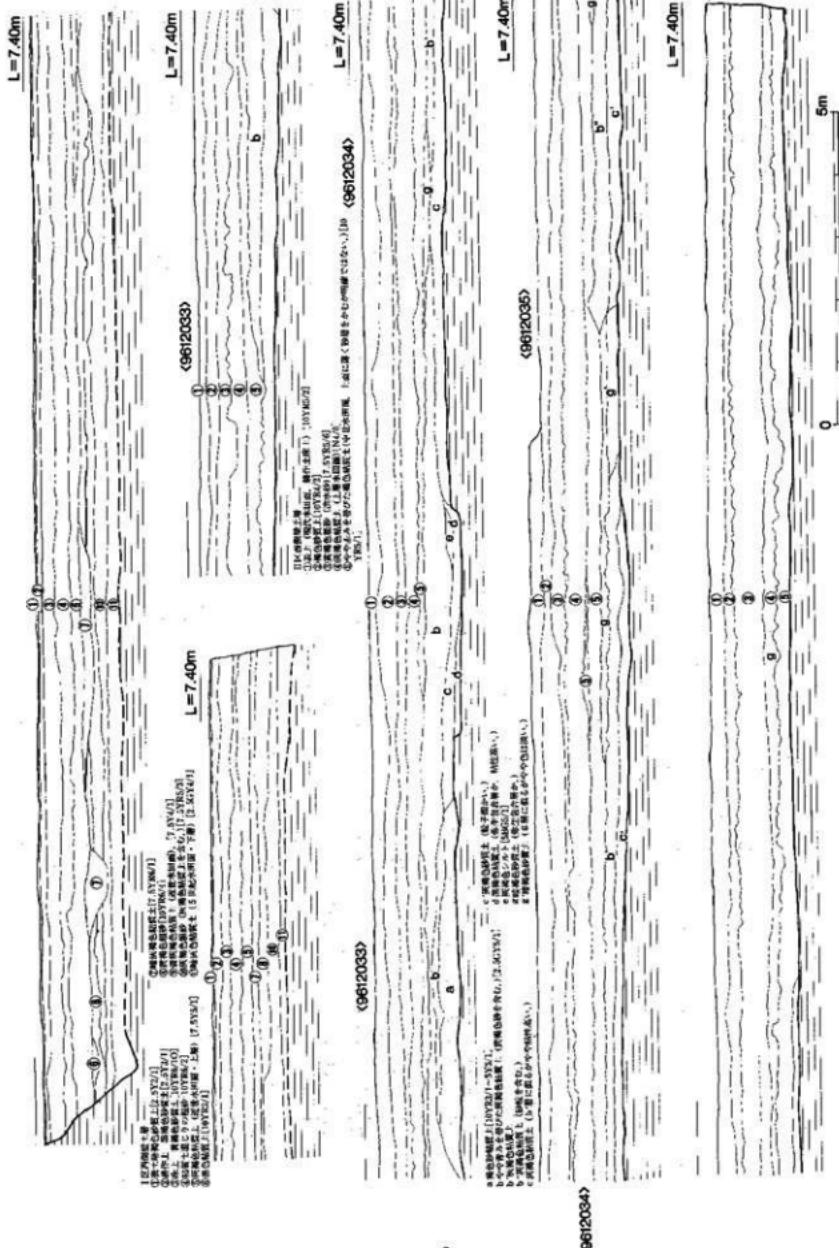


图4 地方区带面土层断面图(2)(1/80)

IV 検出遺構

1 上層検出遺構

水田遺構

現代水田の床土を取り除くと厚い粗砂層が現れる。御笠川の洪水によると思われるこの砂の層を取り除くと灰色の粘質土になる。この面を上層の水田面として調査を開始した。土層や標高から、中世の水田と報告された2次調査のIII層水田址、3次調査の上層水田址と同じ面と考えられた。

I区の東側より調査を開始した。畦畔の高まりを削らないように、少しづつ重機で粗砂層を除去していった。水田面には粗砂の詰まった無数の小さな塗みがあり、そのなかに足跡もみられた。調査中、I区の北西部からII区の南東部にかけて、検出している面のさらに上の層で水田面を確認したが、残りが悪く、平面的に広げることができず、調査を行わなかった。

調査区の南側は粗砂層と水田面の境が明瞭で、畦畔、足跡が良好に検出できた。しかし、北側では水田を覆う砂は土混じりであり、また、水田面も砂混じりの粘質土で、はっきりと水田面と確信が持てない。この部分は畦畔も明瞭でなく、小さなくぼみは多いがその中に足跡らしきもののが少ない。

水田面の標高は6.5~7.1mであり、北東が高く、南東に下がっている。

水田を覆う粗砂層から出土した遺物の中に18世紀前半頃の肥前系の陶磁器が含まれており、この頃以降の洪水により水田が埋没したようである。

上層の調査面積は9,834m²であった。

水田の形は長方形を基本とする。四方を畦畔で囲まれた水田は検出できなかった。しかし、ほぼ一筆の水田規模が判明するものが4つある。水田②は419m²、水田⑤は438m²、水田⑥は253m²、水田⑦



写真7 上層水田作業風景



写真8 上層水田航空写真（上が北東）



写真9 上層水田Ⅰ区全景（南から）



写真10 上層水田Ⅱ区全景（南東から）



第5図 上層水田造構図(1/500)

288m²となる。また、一辺のみが発掘区外に伸びる水田の調査区内での面積は、水田③が123m²、水田⑩が233m²、水田①が185m²となっている。

水田面は水田⑤から②、水田⑩から⑯、水田⑬から⑭、⑮が段落ちになっている。全体的には北東から南西に傾斜している。

畦畔は残りの良いところで幅25~50cm、高さ10~15cmである。断面はかまばこ形から台形であり、削りだしによって作られている。直交する畦畔とは十字に交わらずに丁字に接続する。残りの良いI区でみると、北西→南東方向の畦畔をまっすぐ設け、北東→南西方向の畦畔を一筆ごとにずらしている。

水口は3ヶ所確認された。水口Aは水田③から④へ、水口Bは水田⑦から⑯へ、水口Cは水田⑩から⑫へ水を流す。いずれも畦畔の接合部のそばに設けられている。その他は畦畔の残りが悪かったために確認できなかった。水田面の比高差から考えると北東から南西へ水を流していたようである。

足跡は、水田面が良好に検出されたところにみられ、水田⑤⑥⑦では歩行が追える。特に規則性は見いだせなかった。足跡以外にも小さな窟みが多数検出された。稻株痕かとも考えられるがはっきりとしなかった。



写真11 畦畔

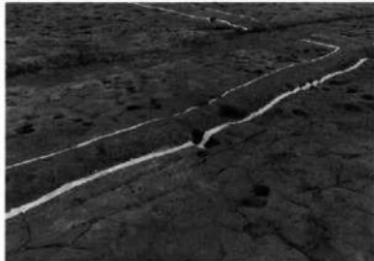


写真12 畦畔



写真13 水口A

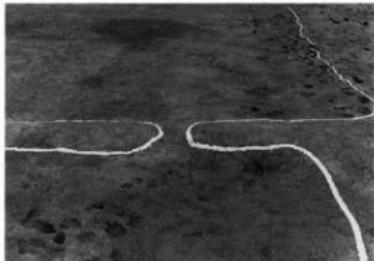


写真14 水口B

水田面はほぼ水平であるが3ヶ所大きく窪む部分があった。SX01は水田⑤⑧⑨の間にある。窪みの底部は水田面と同じ灰色の粘質土で、足跡も明瞭に残っていた。この部分の下層には河川跡があり、そのために水田面が沈下したものと考えられる。SX02は水田⑦にある。水田面が検出されず、浅い窪みとなった。祥符元寶が出土した。SX03は水田⑩⑪⑫にかけて南東から北西に伸びる窪みである。南東側が深くなっている。断面をみると灰色の粘質土層と粗砂層が交互に堆積している状況があり、地盤の沈下で水田面が下がったものと思われる。

水田⑨⑩⑪には北東から南西に向かって浅い窪みが伸びる。底部は足跡が検出されず、北東から南西方向に凹凸が筋状に伸びる。洪水の水の流れで水田面が抉られたものであろう。水田⑨と⑩の間の畦畔のこの部分は削られて高まりがなくなっている。



写真15 上層水田の足跡（東から）



写真16 水田⑤の足跡（北西から）



写真17 足跡



第6図 水田⑥周辺実測図 (1/200)



写真18 SX01 (南東から)



写真19 SX02 (南東から)



写真20 SX03土層(北西から)

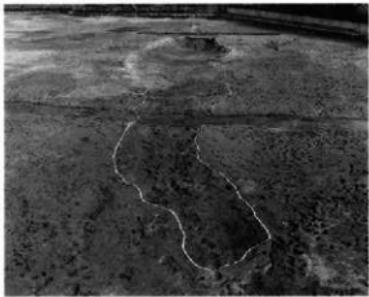


写真21 SX03 (北西から)



写真22 SD04 (南東から)



写真23 SD05 (北東から)



写真24 SD06 (南東から)



写真25 SD07 (南東から)



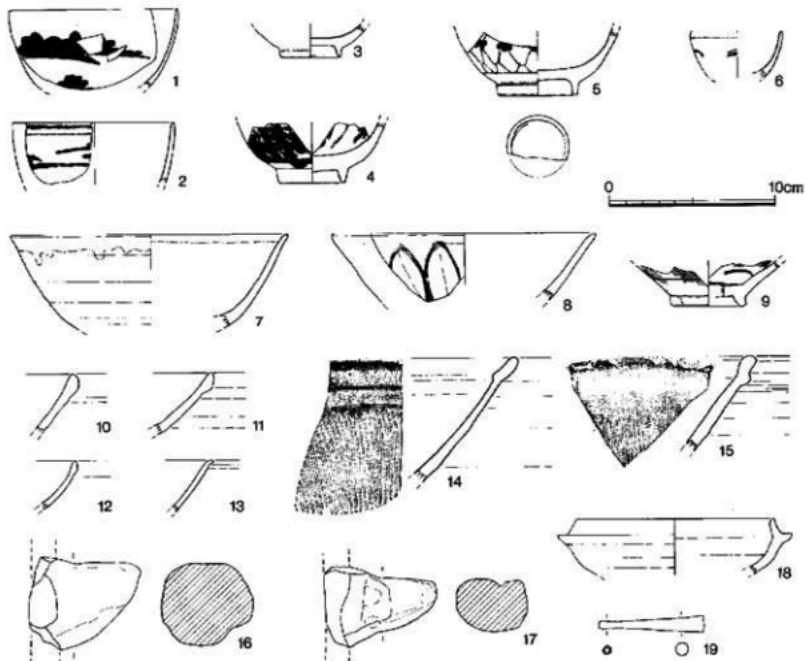
写真26 SD08 (南から)



写真27 調査風景 (北から)

溝状造構は5条検出された。SD04は水田⑩にあり、南東から北西へ4m確認された。北西方向へは段落ちが続いており、溝の延長とも考えられる。SD05も水田⑪にあり、北東から南西へ3m確認された。SD06は水田⑫にあり、南東から北西へ18m確認された。以上3本の溝はどれも粗砂に覆われておらず、水田と同時に埋没したと考えられる。畦畔にはほぼ並行しており、水田の用水路であろう。

SD07は水田⑬にある。長さ9.5m、幅1.5~2.5mで、若干湾曲する。SD08は水田⑭にあり、発掘区外に伸びる。20m確認した。幅は1.5m前後。湾曲する。



第7図 上層水田出土遺物実測図1 (1/3)

出土遺物

水田の調査ということで出土遺物は非常に少なくコンテナケース4箱分であった。また、水田を覆った粗砂層の大部分を重機で除去したので、取り上げた遺物はほとんどが水田直上からの遺物である。いずれも洪水時に上流から流されてきたものと考えられ、ほとんどが糊片である。

なお、青磁・白磁の分類は「博多出土貿易陶磁分類表」(福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV-博多-福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 福岡市教育委員会 1984)によるものである。

1~6は肥前の磁器である。1は染付碗で外面に山水文を描く。復元口径10.0cm。II区出土。2は染付碗で復元口径9.6cm。I区出土。3は染付碗、高台疊付露胎。高台径3.6cm。II区出土。4の碗は外面に褐釉、内面は褐釉が流れた上に青白釉がかかる。高台径4.0cm。I区出土。5は染付碗で外面に一重網目文を描く。高台疊付露胎。高台径4.8cm。II区出土。6は染付の盃で復元口径5.6cm。I区出土。

7~9は青磁である。7は龍泉窯系青磁碗I~9類である。復元口径16.4cm。釉の発色が悪く、灰オリーブ色を呈する。ピンホール有り。S X03出土。8は龍泉窯系青磁碗II-1類である。復元口径15.8cm。I区出土。9は同安窯系青磁碗I類である。底部4分の1残存。高台径4.6cm。II区出土。

10～13は白磁である。10は白磁碗IV類である。黄色味がかった灰白色の釉がかかる。I区出土。11は白磁碗IV類である。ツヤのある灰白色の釉がかかる。II区出土。12は白磁碗II-1類。黄白色の胎土に黄白色の釉がかかる。細かい氷裂がはいる。II区出土。13は白磁碗VI類。灰白色のツヤのない釉がかかる。外面にピンホールが多数みられる。II区出土。

14、15は陶器の擂鉢である。14は灰ベージュ色で良くしまった胎土。調整は内外面ともヨコナデ。口縁部の内外面に鉄釉を施す。I区出土。15は淡橙白色で軟質の胎土。外面体部回転ヘラケズリ。内面はヨコナデ。全面に鉄釉を施す。I区出土。

16、17は土師器の把手である。16は黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。I区出土。17は赤橙色から淡褐色を呈し、砂粒を含む。II区出土。

18は須恵器の坏身である。上半6分の1残存。内面灰色で、外面は少し白っぽい。焼成は良好で胎土に砂粒を含む。調整は外面が回転ヘラケズリとヨコナデ、内面がヨコナデである。復元口径11.7cm、受け部径14.0cm。I区出土。

19は煙管の吸口である。銅製。管内に木質が残る。長さ6.3cm。II区出土。

石器は4点出土した。20は黒曜石製のナイフ形石器である。基部を欠損する。表面の摩耗が激しい。現存で長さ2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm、重さ2.2gである。I区出土。21～23は石鏃である。21は黒

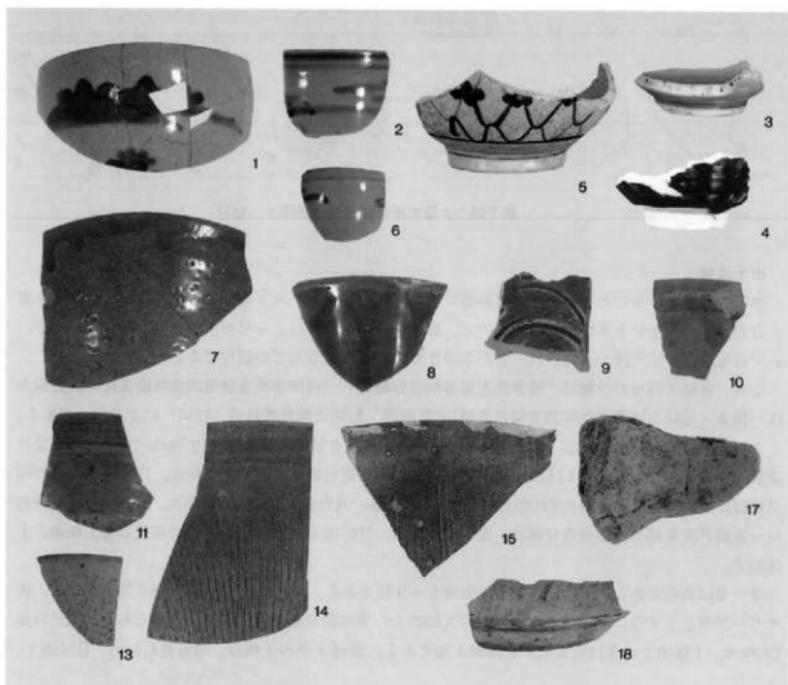
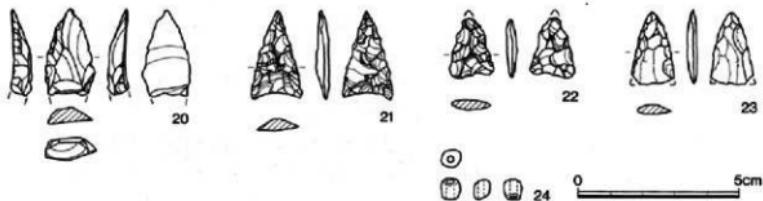


写真28 上層水田出土遺物(1)



第8図 上層水田出土遺物実測図2 (1/3)

曜石製。浅い抉りをもつ。完形で長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.1gである。排水より採集。22は黒曜石製。浅い抉りをもつ。表面が摩耗している。先端を欠損しており、残存で長さ1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gである。SD05出土。23は古銅輝石安山岩製。平基式で両端部を欠く。残存で長さ2.3cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.9gである。SX03出土。

24はガラス玉である。コバルトブルーを呈する。重さ0.2g。歪んでいる。II区の試掘トレンチの埋め戻し土から出土。

銅銭は6枚出土した。25は祥符元寶。中国北宋錢で初鑄年は1009年。SX02出土。26、27は寛永通寶。どちらも新寛永で、1697年以降の铸造である。II区北東にあるコの字の現代の水路の下部から出土。その他中国北宋錢の祥符通寶(初鑄年1009年)1枚がI区から、錢名不明2枚がI区とII区から1枚ずつ出土した。

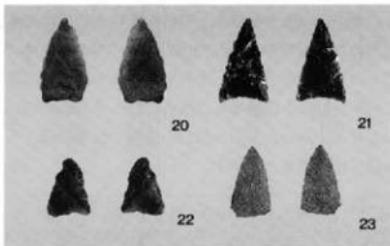
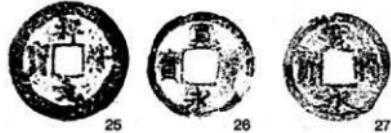


写真29 上層水田出土遺物(2)



第9図 上層水田出土錢拓影 (1/1)

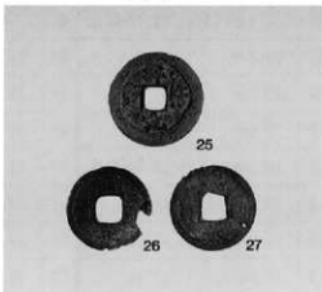


写真30 上層水田出土錢

2 下層検出造構

(1) 下層水田址 (第10図、図版1・2・4、付図2)

下層水田址は洪水砂で被覆された面を追うことにより、標高6.1m~6.5mで検出した。調査区の東南部から北西部へ低くなっている。主として厚く洪水砂で覆われていたI区(農業用水路をはさんで北東側の調査区)で検出され、II区においてもI区南西の水田区画の延長部分を検出した。砂の堆積がほとんどみられなかったI区北西部、II区のほとんどの部分では水田区画は検出できなかった。I区では都合水田53面を検出した。I区東端は近世以降の河川によって水田面が失われている。畦畔は地山削り出して、断面カマボコ状を呈し、幅50~80cm、高さ10~20cmを測る。所々、欠損部位を砂混じりの地山土(灰色粘質土)で補修している。水口は南北2カ所に設けられたものが多い。水田区画は1枚当たりの面積70~110m²を測る方形の大区画のものと、20~40mを測る方形もしくは多角形の小区画のものとに大別される。方形大区画の水田は北西部の標高6.2mと低い平坦面が広がる所に位置している。不定形の小区画水田は標高6.3m~6.5mの等高線に沿って作られている。足跡の深みは大区画の水田より多くみられる。水田⑤の南側には水田④の水口に続く浅い溝がある。表2に個々の水田区画の面積、周囲の長さを示す。

①	3.7m ² 以上	10.8m以上	⑩	99.5m ²	39.2m	㉗	39.0m ²	26.1m
②	8.2m ² 以上	10.2m以上	㉙	71.7m ²	34.0m	㉚	108.1m ²	39.5m
③	54.9m ² 以上	28.3m以上	㉛	71.8m ²	35.8m	㉚	23.1m ²	18.6m
④	3.9m ² 以上	10.8m以上	㉙	26.7m ²	19.1m	㉚	6.8m ² 以上	13.0m以上
⑤	28.0m ²	21.7m	㉙	26.4m ²	19.6m	㉛	43.6m ²	25.2m
⑥	67.8m ² 以上	33.6m以上	㉙	47.2m ²	30.8m	㉚	30.4m ²	21.2m
⑦	83.1m ² 以上	35.7m以上	㉙	46.0m ²	33.2m	㉚	44.0m ²	27.5m
⑧	37.3m ² 以上	48.1m以上	㉙	不明	不明	㉛	36.9m ² 以上	24.9m以上
⑨	98.4m ²	45.7m	㉗	24.4m ²	18.7m	㉙	21.1m ²	18.3m
⑩	113.9m ²	47.7m	㉙	15.5m ²	17.0m	㉚	44.4m ²	27.8m
⑪	72.0m ²	32.8m	㉙	36.6m ²	22.7m	㉗	44.3m ²	27.4m
⑫	10.0m ² 以上	15.0m以上	㉙	11.3m ²	13.7m	㉚	33.7m ² 以上	23.0m以上
⑬	25.4m ²	19.9m	㉙	50.9m ²	31.2m	㉚	27.6m ² 以上	21.8m以上
⑭	21.9m ²	17.9m	㉙	19.4m ²	17.0m	㉗	89.7m ² 以上	38.5m以上
⑮	19.6m ²	17.1m	㉙	42.8m ² 以上	25.1m以上	㉙	53.9m ² 以上	29.1m以上
⑯	17.1m ² 以上	19.3m以上	㉙	16.7m ² 以上	15.5m以上	㉚	13.0m ² 以上	20.1m以上
⑰	1.5m ² 以上	6.8m以上	㉙	29.5m ²	20.9m	㉚	10.3m ² 以上	14.9m以上
⑲	111.0m ² 以上	44.7m以上	㉙	31.3m ²	21.4m			

表2 I区下層水田面積・周囲長さ一覧



第10図 I区下層水田造構平面実測図(1/400)・断面模式図(水平方向1/400・垂直1/40)

3



4



5



D

20m

第11図 II区下層水田造構平面実測図 (1/200)

— 22 —

0

(2) 河川・水路

S D 22 (第12・14図、図版4・6)

II区東南端で検出した溝で、幅6.0~10.0m、深さ0.8~1.2mを測り、延長40m分を検出した。調査区南端から西に延び、途中北西方向へ湾曲し、調査区外第1次調査区に延びる。第1次調査検出の溝の延長部に相当か。底面の標高は南端が5.2m、北端で5.5mを測る。S D 20を切る。西岸に護岸とみられる木杭列が並ぶ。

S D 20 (第12・13図、図版4・5)

II区を南東から北西方向に流れる水路である。当初、一連の造構として検出に当たっていたが、試掘トレンチ2を境とした北半部と南半部分の幅員や断面形に違いがみられ、出土する土器にも時期差がみられた。北半部の掘削時期を5世紀前半、南半部分では一部北半部の溝と重複、切り会い関係にあるが、掘削時期は4世紀前半とみている。以下、水路の内、北半部をS D 20新とし、南半部はS D 20とする。

S D 20新は幅2.5~7.0m、深さ0.9~1.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長60m分を検出した。ほぼ直線状に延び、方位は西偏50°を取る。中央部が瓶首状に窄まっている。底面の標高は南端が5.3m、北端で5.0mを測る。中央部よりやや北西には柵状造構S X 34が伴い、南東岸には水溜状造構S K 21 (第13図、図版6)が接しているが、溝に伴うものか不明である。

南半部、S D 20は調査区南端から北西方向に延び、途中西へ湾曲し、調査区外へ延びる。北側の岸はおさえられたが、その対岸は調査区域内では検出できなかった。調査区内では対岸で護岸用の柵状造構が検出されており、幅は15m前後とみられる。井堰S X 31・32、護岸用の柵状造構S X 33・35が伴っている。湾曲部の北に接して、浅い溝状の造構が検出された。幅2.0~4.0m、深さ20cmを測り、中央には島状の高まりがみられる。北東延長部はS D 20に切られている。井堰S X 31に伴う取水溝とみている。

(3) 井堰・柵状造構

S D 20にS X 31・32・33、S D 20新にはS X 34・35が設置されている。

S X 31井堰 (第16・17図、図版7・11)

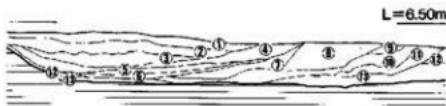
S D 20内、C・D-4区で検出した直立型の井堰である。平面形はアーチ状を呈し、その南側は調査区外に延びるが、その中心は北西方向に面している。検出した長さ20m、幅約2.0m前後を測る。立杭770本、横木50本以上で構築されている。横木の多くは建蔽材から転用されたものであり、材のはぞ穴を貫いて杭を打ち込んだものもみられる。上面は標高5.8~6.0mの範囲に分布し、下面(杭の先端)は中心部から岸へ行くにつれて浅くなる。杭は垂直に近い角度で打ち込まれているが、左岸の下流側では30°前後の角度で杭打ち込まれており、井堰端部の護岸施設と考えられる。下流側には崩壊した構築材の一部が散乱していた。杭の中から木履や木製農耕具が出土している。

S X 32井堰 (第18・19図、図版8・11)

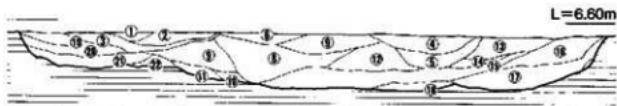
S D 20内、C・D-4区、S X 31より5m上流側で検出した合掌型の井堰である。平面形はアーチ状を呈し、南側は調査区外に延びる。約80cmほど堆積した粗砂の上面に構築されている。検出した長さ14m、幅約3.0m前後を測る。立杭440本、横木50本以上で構築されている。中心は北西方向に面し、S X 31と杭を一にする。下流側の杭が垂直に近い角度であるのに対し、その反対側は約30~60°の角度で



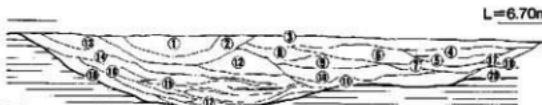
第12図 SD20・22 河川全体図 (1/400)



SD22+塔斯科



S. D. ZHANG



卷之三



第14図 河川・土壤土層断面図 (1/80)



第15図 井堀・格状造構配図 (1/200)

打ち込まれている。上面は標高6.0~6.4m、下面（杭の先端）は4.6~5.0mの範囲に分布しており、下流のS X31より上位に位置する。中心部から岸へ行くにつれて高くなる。下流側に崩壊した構築材の一部が散乱している中に、補修部位とみられる杭と横木からなる単位が3カ所みられる。

S X33井堰（第20・21図、図版9・11）

S D20南西端、D-5区で検出された。上面は標高5.7~6.1m、下面（杭の先端）は4.8~5.2mの範囲に分布し、右岸側が高くなっている。検出されたのは井堰の右岸側の端部とみられ、井堰本体の大半は調査区外に包蔵されていると考えられる。S X31左岸端部でみられたように、護岸施設で、上流側は30°未満の角度で、下流側は約30~60°の角度で打ち込まれ、1m置きに径7~15cmの太めの杭が配されている。河川堆積の粗砂の上面に構築されており、杭列下面の粗砂から完形の土師器、木製盾片などが出土している。南端部に補修部位がみられ、壁面の土層観察からも窺える。

S X34井堰（第23図、図版11）

S D20（新）内、B-2区で検出した合掌型の井堰である。平面形は直線状を呈し、全長ほぼS D20の溝幅4.0m、深さ1.0mを測る。立杭17本、横木1本で構築されている。杭の間には植物繊維が充填されている。前面の杭は1本のみの残存で、背面に杭14本が約30cmの間隔で60°の角度に打ち込まれている。下流側には崩壊した杭2本が散乱していたが、前面の杭が流れたものか。杭上端の標高6.0m、杭の先端は地山の青灰色粘土から約40cm上位にあり、溝が約80cmほど埋った段階で構築されたとみられる。井堰上流のS D20（新）底面から土師器等・高坏が出土している。

S X35棚状造構（第22図、図版10）

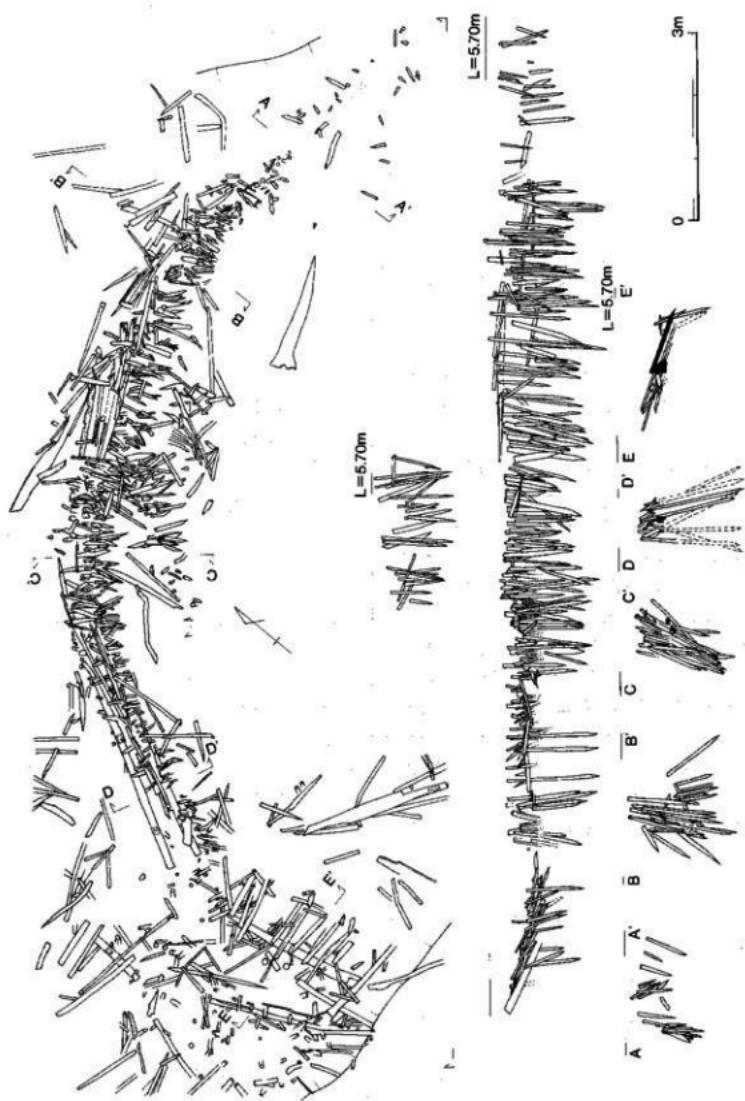
S D22内、C-D-5区、S D20北岸から12m南で、右岸と平行するかたちで検出された。護岸施設である。平面形は矩形を呈し、南西側は調査区外に延びる。S X33に堆積した粗砂の上面に構築されている。検出した長さ9.4m、幅約1.0m前後を測る。立杭は24本以上でそのほとんどは板杭からなり、約30cmの間隔で約45~60°の角度で打ち込まれている。横木は16本以上でそのほとんどは幅10~15cm、厚さ2cm前後の板材からなり、すきまを少しあけた簾の子状におかれている。他の井堰が埋没した後に構築された棚状造構で、立杭の方向が流れとは直角であることから、S D20埋没後に掘削されたS D20（新）に設置された護岸施設と考えている。

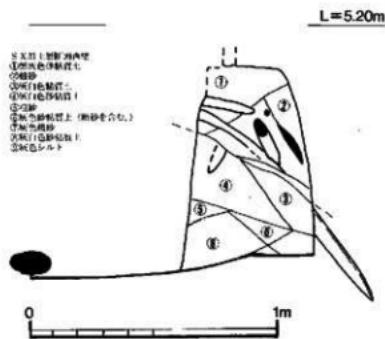
（4）小結

下層水田は第2・3次調査で検出された面と同一で、5世紀代とされる。S D20、それに設置された井堰S X31、それに伴う取水溝とみられる浅い溝状の造構、S X32・33の一連の水利造構が検出された面とは、堆積層が薄く比高差もほとんどないが、掘削、構築の時期は4世紀前半とみている。S D20を切るS D20（新）、S X34・35を下層水田に伴う水利造構と考えている。水田にどのように給水されたか、水田と接する部分が新期の造構S D20に切られ、水田面を覆う洪砂層が途切れ水田区画を明確に押さえられず、明らかにすることはできなかった。

南側に近接する第4次調査ではS D20、S X31~33と同時期の2~4号井堰が検出されている。北西台地北端で検出された第2号井堰はほとんど水平に近い角度で打ち込まれていることなど、構造、規模の上で第7次調査南端で検出された井堰S X33の左岸部分と考えられる。その場合、推定長は約20mを測る。

第16圖 SXJ1 井壁測圖 (1/10)

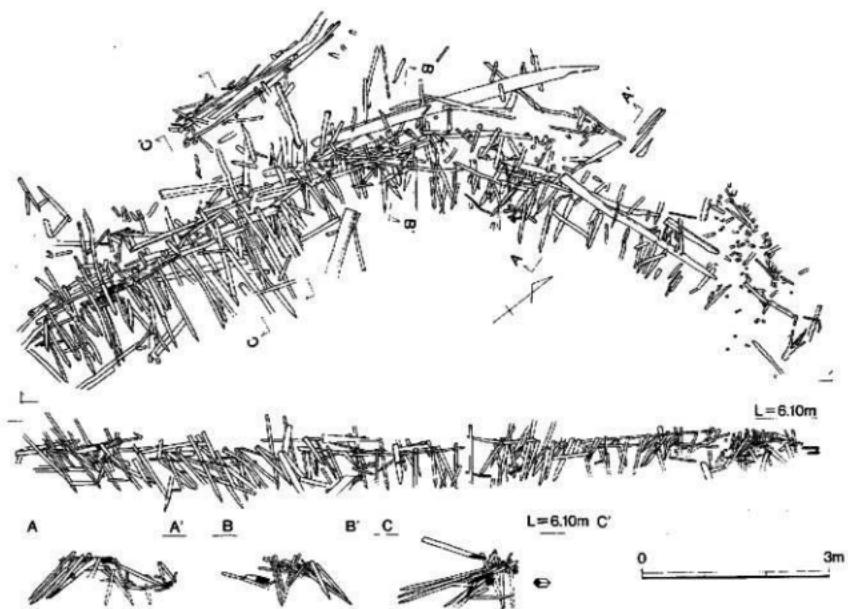




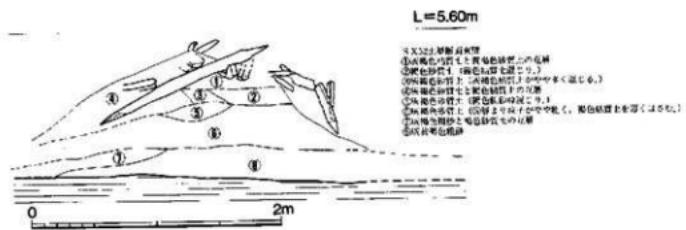
第17図 S×31 井堀断面図 (1/40)

下層水田面、SD20を切るSD22は下層水田の時期5世紀以降にその上段の年代を求めることができるが、その年代の土器が単純で出土するのは最下層で、埋没の時期は6世紀後半まで下る。第4次調査検出の直立形、アーチ状の第1号井堰、それが設置された第1号河川の延長に当たるものであろうか。調査の当初、第1次調査で検出された8世紀後半邊構の溝の延長と考えたが、溝の埋上の上層では6世紀後半を下る時期の遺物は全く出土をみなかった。第1次調査検出の1m前後の溝幅の掘り込みを3ヵ所の土層断面で確認を試みたが、幅1.8m、深さ0.4~0.6mの掘り込み（第14図ベルト2④⑤層、ベルト3①②層）が観察された。溝と直交して上層断面が切られたとは限らず、第1次調査検出の溝の延長と重複する可能性は考えられる。

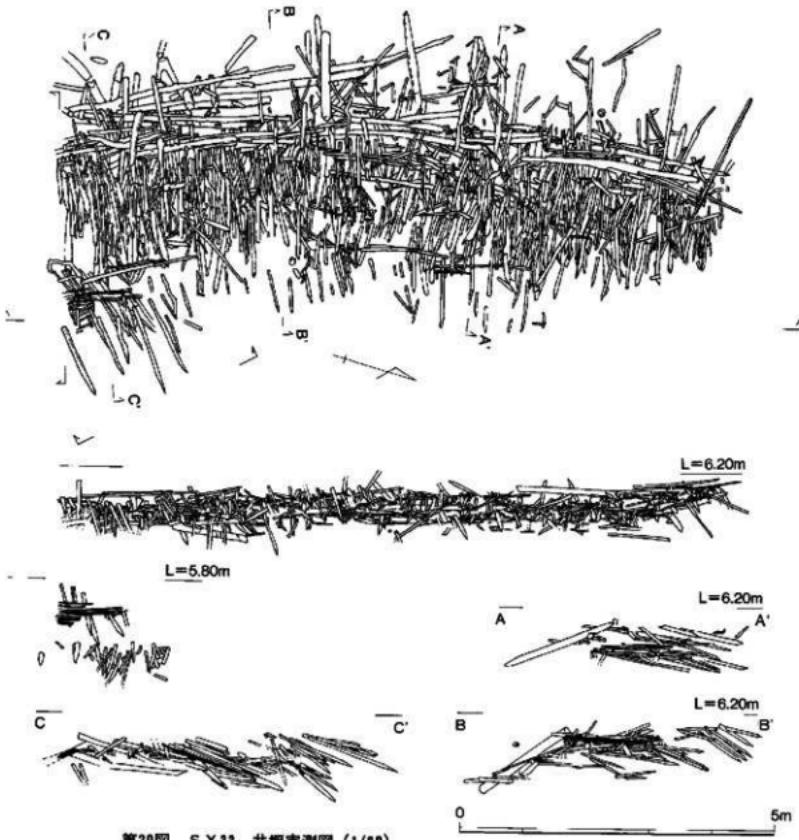
下層水田の上面で幅60~90cm、深さ15cmの幅狭の直線溝をI区西端、II区東端で検出した。II区ではS D22埋没後に、掘り込まれており(図版3)、I区で延長6m、II区で延長18m検出した。調査区間の現況水路部分を含めると、45m以上を測る。方位は第1次調査検出溝と同じくし、西偏30°を測り、福岡平野の条里方位西偏37°に近い。溝埋土から年代を示す遺物の出土はなかったが、I区南西壁面の土層(第4図)によると、上層水田の下面から掘り込まれていることから、洪水砂の被覆がみられず的には検出できなかった中世水田の区画に伴う用水路であろうか。那珂君体跡道第2~4次調査では条里の区画に沿った中世水田面が検出されており、それらに伴うものであろう。日野尚志氏による七図一里の千鳥式坪並26ノ坪と27ノ坪の坪界のやや南東を平行して走る。



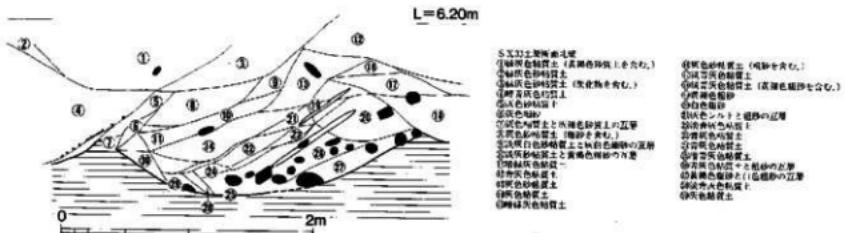
第18図 S X32 井堀実測図 (1/80)



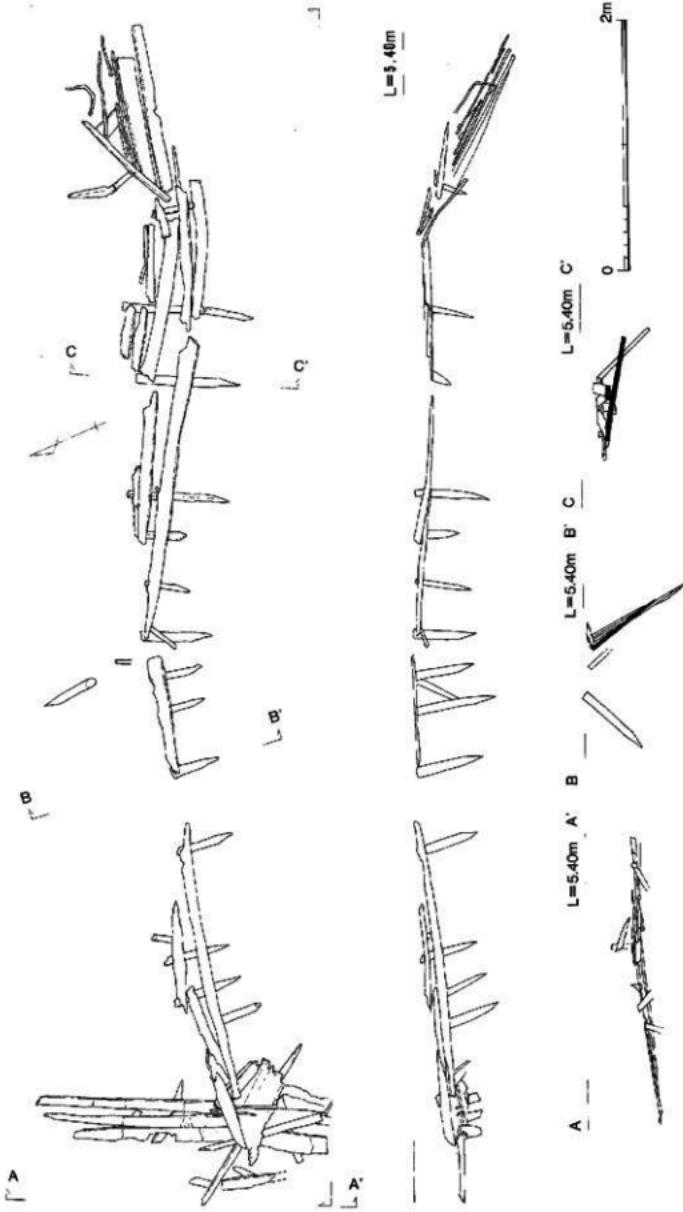
第19図 S X32 井堀土層断面図 (1/40)



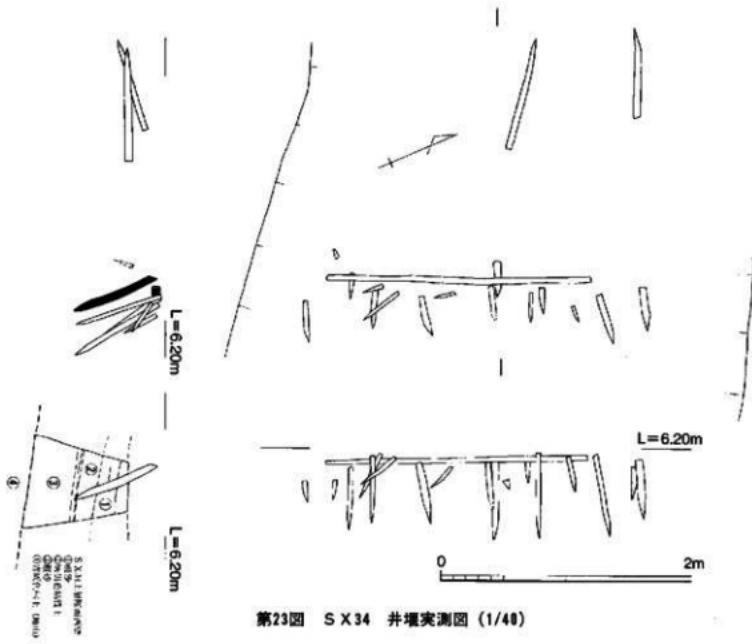
第20図 SX33 井壁実測図 (1/80)



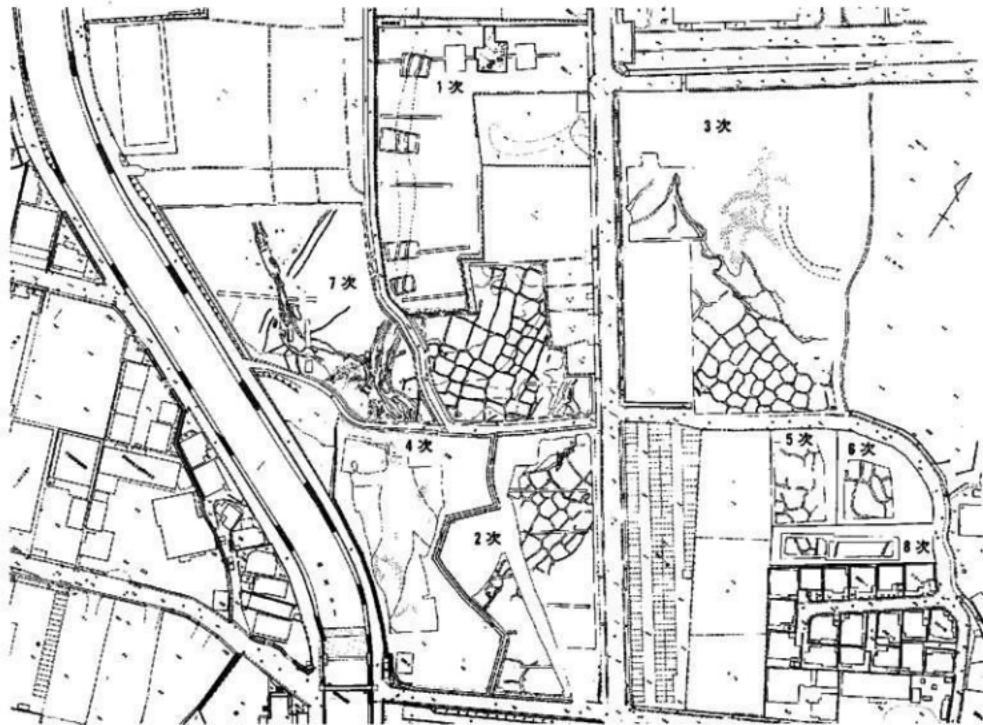
第21図 SX33 井壁断面図 (1/40)



第22図 S X 35 構造測定図 (1/40)



第23図 S X34 井堀実測図 (1/40)



第24図 那珂君休遺跡全体図 (1/2000)

V 出 土 遺 物

(1) S D 20出土土器 (第25図～第29図、図版16～21)

S D 20出土遺物は河川埋土、河川底、井堰から検出されたが、特に井堰が構築されている河川の南端付近に集中していた。出土した器種は、甕、壺、鉢、小型丸底壺、高壺、器台、長頸壺、須恵器蓋等である。遺物を出土地点ごとに見てみる。

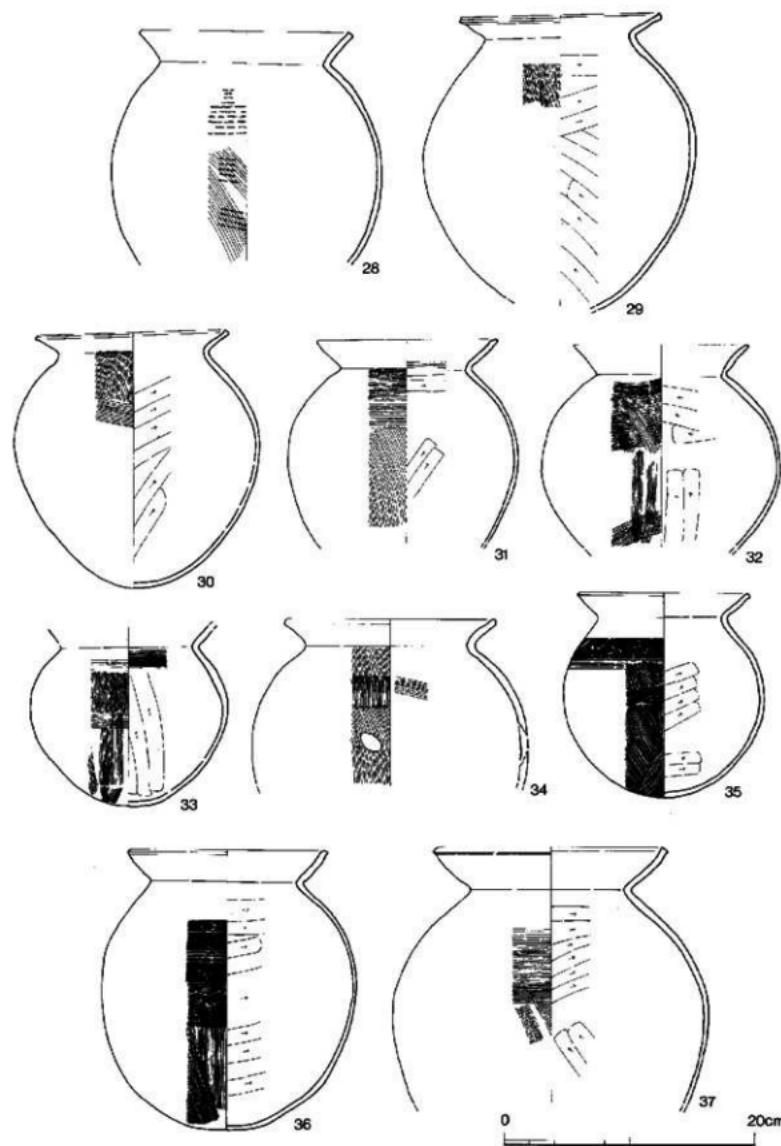
S D 20埋土及び河川底出土土器 (28～82)

28～41は變形土器である。このうち28～37はいわゆる畿内系の甕である。28は外面に一部タタキ痕を残し、ハケメを施す。口縁部は直線的に開き、口縁端部を内側につまみ出して整形している。胴部は丸くふくらむ。29、30は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。口縁部は直線的に開き、口縁端部をつまみ出す。胴部は胴部最大径がやや上部に位置する。31は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整するが、29、30に比べて口縁部が若干立ち上がり、また、口縁端部はつまみ出さない。32は外面に細かいタタキを施しその後ハケメで調整する。胴部がやや開き気味である。33は、調整、器形ともに32に近い。34は外面全面、内面に一部ハケメが見られる。焼成後穿孔が胴部に見られる。胴部はやや開き気味で口縁端部はやや厚みを帯びたつくりである。35～37はいずれも口縁端部をつまみ出し口縁部がやや外側にふくらみながら開き、胴部最大径が上方につく器形となる。外面にハケメ、内面をヘラケズリによって整形する。以上28～37の甕は器壁が薄く精緻なつくりである。このうち28は在地系と畿内系の折衷型、32は庄内式に比定されるか。38～41は外面、内面ともにハケメを施し、器壁が厚くややはってりしたつくりの甕である。在地系の上器である。38は外面にタタキ痕を残し、底部が打ち欠かれている。口縁部はやや外反して立ち上がる。39は外面にタタキを施した後ナデ浦されており、底部付近をヘラケズリで調整している。口縁部は外反し、ややとがり気味の底部がつく。40は口縁部がやや外反気味に立ち上がる。41はやや長胴型の胴部を持つ。

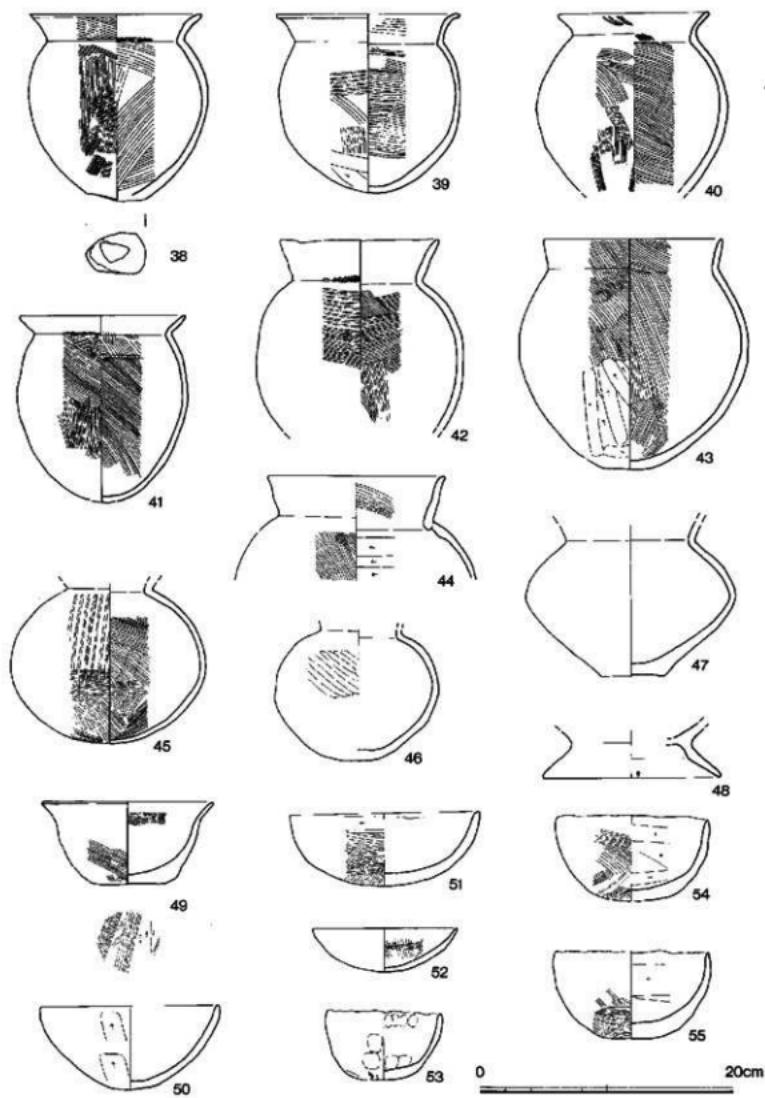
42から46は壺形土器である。42は口縁部がやや直立気味に立ち上がり、丸い胴部がつき、外面にタタキ、内面にハケメを施す。43は42に比べて口縁部が短く直立し、外面、内面ともにハケメを施し、外面の胴部下半はヘラケズリで整形する。44は頸部までの残存であるが、直立した口縁部がつき、外面と口縁部内面にハケメ、胴部内面にヘラケズリの調整が見られる。45、46は長頸壺である。いずれも胴部のみである。45は、外面の胴部上半を縱方向のミガキ、下半をハケメで調整している。内面は全面ハケメである。46は外面をミガキ、内面をナデで整形している。両者とも精製土器である。47はくの字型に屈曲する胴部に平底底部がつく。ナデ調整のみである。これは弥生時代中期～後期の壺である。混入と思われるがここで紹介しておく。

48～56は鉢形土器である。48は小片で全体がつかみにくいが脚付鉢の脚部の一部であろう。全面ナデで調整し内面に刺突を施している。49は口縁部が外反し、平底の底部がつく。外面、内面、底部にハケメが施され、内面底部は指押さえの後ナデで整形されている。50～52は丸底の鉢である。50は外面をヘラケズリで、内面をナデ、51は外面をハケメ、内面をナデ、52は、外面をナデ、内面をハケメで調整している。いずれも丁寧な整形である。53～55は手づくねによる整形である。53は小型の鉢で、指押さえの後ナデで整形している。54、55は指押さえで整形した後、外面にハケメ、内面にヘラケズリによる調整を行っている。56は中型の鉢である。外面はハケメとヘラケズリ、内面はハケメによる調整を行い、丁寧なつくりである。

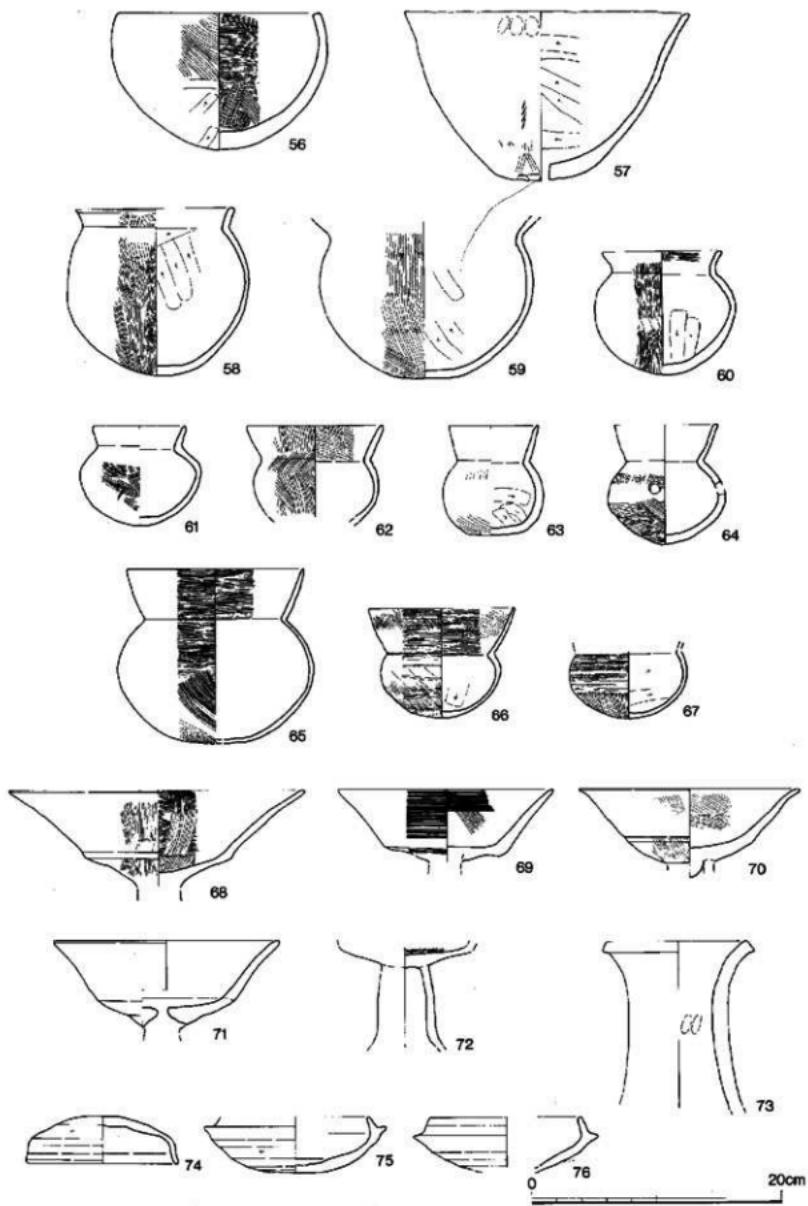
57は瓶である。指押さえによる整形で、外面をヘラケズリの後ナデ調整し、内面をヘラケズリで仕



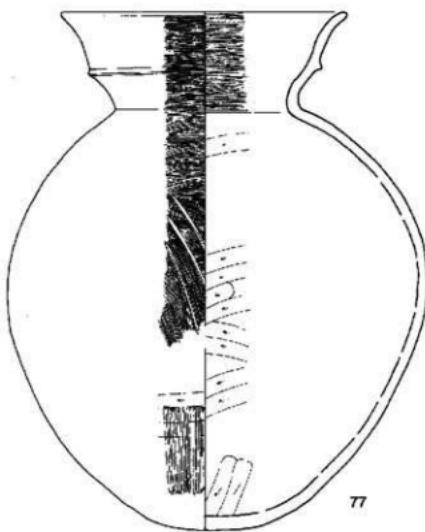
第25図 SD28出土土器実測図(1)



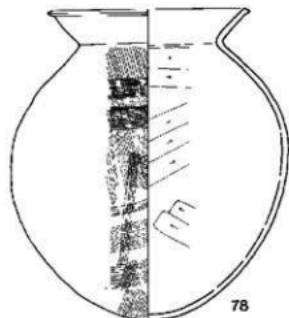
第26図 SD 20出土土器実測図(2)



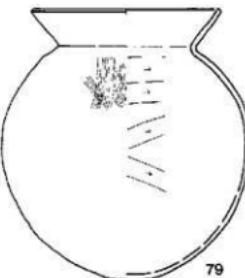
第27図 SD20出土土器実測図(1)



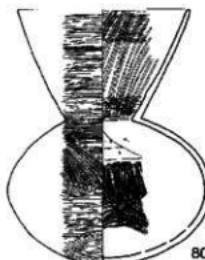
77



78



79



80

0 20cm



81



82

第28図 S D20出土土器実測図(4)

上げている。底部に穿孔を行っている。

58、59は広口壺である。58は胴部が丸く張り、短い口縁部が立ち上がる。口縁端部は平坦に仕上げている。外面はハケメ、内面はヘラケズリによる調整を行う。59は口縁部が開いて立ち上がり、胴部が丸く張る。外面はハケメ、内面はヘラケズリを行う。

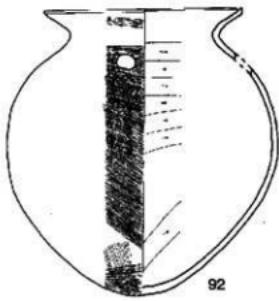
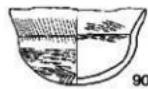
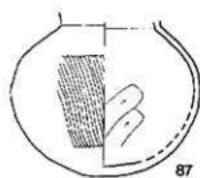
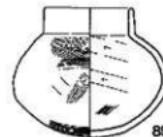
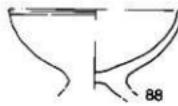
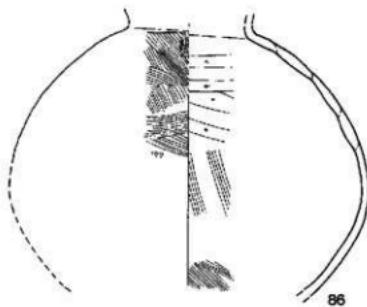
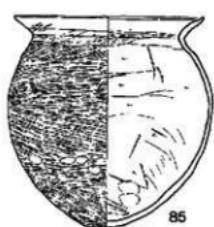
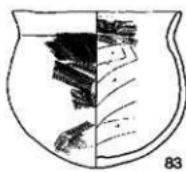
60～64、66、67は小型丸底壺である。60、61は短めの口縁部が立ち上がる。60は外面にハケメ、内面にヘラケズリ、61は外面にハケメ、内面にナデによる調整を行う。62～64はやや長めの口縁部が開いて立ち上がる。62は外面、内面ともにハケメ、63は外面はハケメ、内面はヘラケズリ、64は外面はハケメ、内面はナデによる調整を行っている。64は胴部に一つ穿孔を施す。これは5世紀まで下るであろう。66、67は精製の小型丸底壺である。66は器壁が薄く、長い口縁部が開いて立ち上がる。口縁部の内外面ともにハケメの後横にヘラミガキを施し、胴部外面はヘラケズリとハケメを施した後ヘラミガキで整形する。胴部内面はヘラケズリの後ナデによる調整を行い、非常に丁寧なつくりである。67は胴部のみであるが、外面を細かなハケメと縱方向のヘラミガキによる調整を行い、内面をヘラケズリで仕上げている。65は精製の広口壺である。器壁は薄く、長めの口縁部が開いてつく。外面は全面ヘラミガキを施し、口縁部内面は横方向のハケメ、胴部内面はナデによる調整を行い、精緻なつくりである。これら的小型丸底壺は時期幅を持ち、63、64は5世紀まで下ると思われる。SD20の北側から検出されている。

68～72は高环である。68は彼を持った肩曲部から口縁部にかけて大きく外反して立ち上がり、外面に縱方向のハケメ、内面にはハケメの後ヘラミガキによる調整を施す。69は屈曲が強く口縁部は直線的に開く。外面、内面ともに横方向に細かなハケメを施す。70は屈曲部から口縁部にかけて緩く広がり外面、内面ともにハケメを施す。71は屈曲は緩く、口縁部もなだらかに外反する。ナデ調整のみである。なお、脚部を欠いた後穿孔している。72は环部の底部と脚部のみである。脚部は环部直下よりやや内湾気味に開き脚端で大きく外反すると思われる。环部内面に細かなハケメを施す。70は5世紀まで下るであろう。

73は器台である。器壁は厚く、肩曲部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁端部は平坦に仕上げる。指押さえによる整形後、ナデ調整を行う。弥生時代後期～終末か。

須恵器には、蓋（74）、环身（75、76）がある。いずれも外面を回転ヘラケズリ、内面を回転ナデによって仕上げる。蓋は口縁部の屈曲がやや強めである。6世紀後半である。

77～82は、SX31とSX32の間で調査区西端の方に河川底より若干浮いて固まつた状態で検出された。77は大型の一重口縁壺である。口縁部は中央に突帯をめぐらし外反して立ち上がる。胴部はやや肩が張るもののがくふくらみ丸底の底部がつく。口縁部の外面、内面及び胴部上半には横方向のヘラミガキが施され、胴部下半の外面にはハケメ、ヘラケズリの後縱方向にヘラミガキによる整形を行っている。胴部内面はヘラケズリが施されている。外面に黒斑があるものの非常に精緻なつくりで山陰系の上器と思われる。78、79は畿内系布留式の甕である。いずれも口縁端部をつまみ出し口縁部は若干外湾しながら開く。器壁は薄く、胴部は丸く張り、丸底の底部がつく。外面をハケメ、内面をナデによる調整を行う。80は精製の長颈壺である。楕円形の胴部に長めの口縁部が外反してつく。外面と口縁部内面には全面ヘラミガキが施され、胴部外面には一部細かなハケメがつく。胴部内面はヘラケズリの後細かなハケメによる調整を行う。81、82は鉢形土器である。81は丸底の底部から口縁部にかけて緩く外湾しながら開く器形で、外面をヘラケズリ、内面をナデで調整している。82は胴部の肩曲部から口縁部が外反してつく器形で、外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリ後ヘラミガキによる調整を行ない口縁部内面はハケメを施す。精製土器である。これらの七器が井戸の間から折り重なるように出土



0 20cm

第29図 S X31~34出土土器実測図

している。精製土器が多いことから何らかの祭祀が行われた可能性もある。

S X 31～S X 34出土土器 (83～93)

83はS X 31内より出土した広口壺である。外面と口縁部内面にハケメを施し胴部内面はヘラケズリによる調整を行う。84はS X 32より出土した。胴部から長めの口縁部が緩やかに立ち上がる壺で外面、内面ともにハケメを施す。S X 31とS X 32からの出土土器は少なかった。

S X 33からはS X 31、S X 32に比較して多くの遺物が出土した。85～91がその土器である。85は壺である。胴部外面にタタキ痕を残し、内面はヘラケズリによる調整を行う。器壁はやや厚くはってりとした感じで口縁端は若干つまみ出している。胴部最大径が上部につく器形でやや尖り気味の丸底がつく。底部にもタタキ痕が残る。86は大型の壺で外面ハケメ、内面ヘラケズリとハケメによる調整を行う。87は長頸壺で外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整している。88は高壺である。楕円形の環部にハの字型に聞く脚部がつく。89は中型の傘型土器である。外面ハケメ、内面ヘラケズリによる調整を行う。90、91は鉢形土器である。90は胴部から口縁部にかけて緩く外反し、外面はタタキとハケメによる調整を行う。91はハの字型に屈曲した短い口縁部が楕円形の胴部につき内面をヘラケズリによって整形している。山陰系の跡であろう。

92、93はS D 20の北側に構築されていたS X 34から出土した。92は口縁端部をつまみ出し胴部最大径が上部につく器形にとがり気味の丸底を持つ庄内壺である。外面を全面タタキ調整し、内面をヘラケズリによって整形する。肩部に一つ穿孔を施している。93は小型丸底壺である。外面と口縁部内面にハケメを施し、内面にヘラケズリを行っている。5世紀まで下るか。

(2) S D 22出土土器 (第30図94～103、図版22)

S D 22からは土師器及び須恵器の壺が検出されているがS D 20に比べてさほど量は多くない。須恵器の出土が比較的目立つが、S D 22に新旧二つの流れがあると推定される。

94～97は土師器である。94は口縁端部をつまみ出し胴部が丸く張る壺である。外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。95は広口壺である。口縁部から胴部は緩やかに屈曲し、ヘラケズリとナデで調整している。96は小型丸底壺である。楕円形の胴部から口縁部が外反して開き、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。97は高壺の脚部である。壺部から直線的に開き、脚端で大きく外反する。内面を横方向のヘラケズリで整形する。これらの土師器は4世紀後半から5世紀初頭まで下ると思われる。

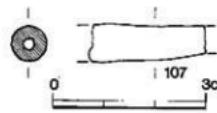
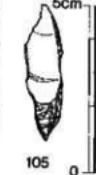
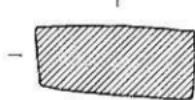
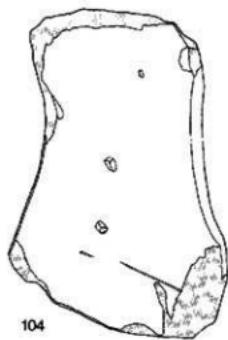
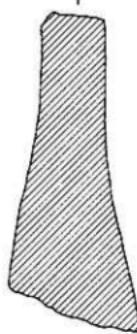
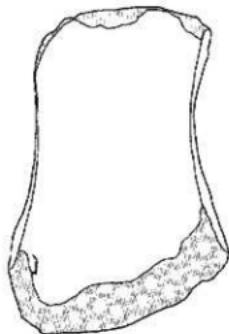
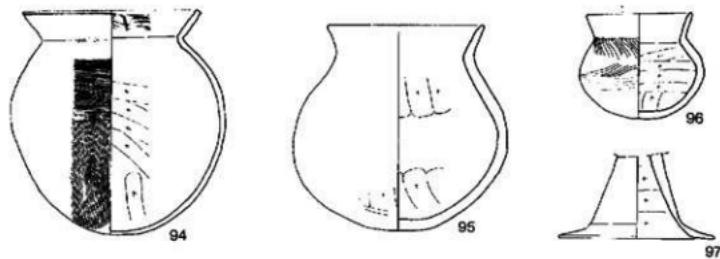
98～103は須恵器である。壺(98、99)と壺身(100～103)がある。いずれも回転ヘラケズリと回転ナデによって整形している。98は器壁が厚くどっしりとしたつくりである。99は黄～赤褐色を呈し小型のもの、101は底部外面にヘラ記号が刻まれている。いずれも6世紀後半である。

(3) S D 20出土石器 (第30図104～106、図版22)

S D 20埴土中及び井垣出土の石器を説明する。104は砥石である。S X 31出土である。砂岩製で研磨面は四面で済曲している。残長13cm、幅8.5cm、厚さ5cmを測る。105はナイフ形石器である。S X 33より出土した。黒曜石製で縱長削片を素材とする。全長4cm、幅1cm、厚さ0.5cmを測る。106は安山岩製の石匙である。埋土中出土である。平面は三角形で刃部は丁寧に整形してあるがつまみ部は片側のみえぐられている。刃部長6.1cm、幅4.4cm、厚さ0.8cmである。

(4) 下層水田出土土製品 (第30図107、図版22)

下層水田からは遺物はほとんど検出されていない。107は土鍤である。管状に整形してある。全長2.3cm、径0.7cmである。



第30図 SD22出土土器、SD20出土石器、下層水田出土土製品実測図

表3 出土器・石器觀察表

物語者種類区分	通緒	土器の種類	目録	口径(cm) × 高さ(cm)	断面(左) × 断面(右)	色・調	地紋	残存状況	備考		
									外	内	
第25回	28 SD20	土鍋器	深	17	18.6+ a	21.6	青一火照色 あり。金等、カタチ の付着	外：火照色 内：ナゲテ 口縁部ナゲテ	良好	断面下半欠損	
第25回	29 SD20	土鍋器	浅	15.5	24.6	21.8	青0.5mm以上の砂粒多 く含む	外：内へテ 内：ナゲテ	良好	断面一部欠損	
第25回	30 SD20	土鍋器	深	15	20.4	19.2	青0.5mm以上の砂粒多 く含む	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ゲ	良好	断面一部欠損	
第25回	31 SD20 4区	土鍋器	深	14.4	16.6+ a	18.3	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。金等含む	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ゲ	良好	11枚半分及び 倒壊した3枚 有	
第25回	32 SD20	土鍋器	深	14	16.2+	19.3	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ゲ	良好	口縁部から削断 有	
第25回	33 SD20	土鍋器	深	15	15.7	16.0mm以下の砂粒多 く含む。	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ゲ	良い成色	良	口縁部欠損 有無?	
第25回	34 SD20 由	土鍋器	深	16.8	13.6+	22	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。	外：ナゲテ 内：部分的にナ ケスリ。口縁部ナ ケ	外：火照色 内：ナ ゲ色	1/5残存 外縁部 穴孔	
第25回	35 SD20 RP6	土鍋器	深	13.7	16.4	16.2	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。金等含む	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ケ	青褐色な い黒褐色	良	開底部部分に欠 損
第25回	36 SD20 由	土鍋器	浅	16	22.3	20.4	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。金等含む	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ケ	外：火照色 内：青褐色	青褐色な い黒褐色	青褐色な い黒褐色
第25回	37 SD20 RP6	土鍋器	深	17.7	20.4+	25.1	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。金等含む	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ケ	青色がかった灰褐色	良好	口縁部部分に欠 損
第26回	38 SD20 RP6	土鍋器	浅	13.6	15	14.4	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。金等含む	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ケ	青褐色な い黒褐色	良	口縁部部分に欠 損
第26回	39 SD20	土鍋器	深	14.5	14.2	14.4	青0.5mm以上の砂粒多 く含む。金等含む	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ケ	外：青褐色 内：青褐色	青褐色な い黒褐色	青褐色な い黒褐色
第26回	40 SD20 5区	土鍋器	深	12	14.2+	15.2	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ。口縁部ナ ケ	外：青褐色 内：青褐色	よつう	口縁部一部欠損 有無?
第26回	41 SD20	土鍋器	深	13	13.4	14.8	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。	外：ナゲテ 内：ナゲテナ ケスリ	外：青褐色 内：青褐色	よつう	口縁部一部欠損 有無?
第26回	42 SD20	土鍋器	深	13	13+ a	16	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。	外：ナ ゲテナ ケスリ。口縁部ナ ケ	外：青褐色 内：青褐色	青褐色な い黒褐色	青褐色な い黒褐色
第26回	43 SD20	土鍋器	深	14	18.3	18.2	青0.5mm以下の砂粒多 く含む。	外：ナ ゲテナ ケスリ。口縁部ナ ケ	外：青褐色 内：青褐色	1/3欠損	青褐色な い黒褐色

報告書調査番号	通称	上部の地層	基層	1段(m)基高(cm)	間隔(段)(cm)	砂 土	河 畑	也 畑	地城	保存状況	備考
第26回 44 SD20	土耕器	土耕器	土	14 α	8.6 + α	外:砂質多 内:ヘラケズリ	黄褐色	良	山麓部のみ残存 虫食あり		
第26回 45 SD20 北側壁 基盤	土耕器	瓦製	瓦	13+ α α	15.3	径3.0mm以下の砂粒多 量に含む	外:砂質多 下半:ヘラケズリ	黄褐色	良	山麓部のみ残存 虫食あり	
第26回 46 SD20 RP05	土耕器	土耕器	瓦製	10.8+ α	13	径3.0mm以下の砂粒多 量に含む	外:砂質多 内:ナデ 後	黄褐色	良	口神原ないし瓶 留木大根	
第26回 47 SD20	先生土器	瓦	瓦	12.2+ α	16.5	径0.3mm以下の砂粒少 量に含む	外:ナデ	黄褐色	良	口神原ないし瓶 留木大根	
第26回 48 SD20	土耕器	割付付	瓦	14	径2.0mm以下の砂粒多 量に含む	ナデ	黄褐色	良	脚踏一部のみ残 丹池り?		
第26回 49 SD20 下層	土耕器	鉢	瓦	13.6 α	6.6	径0.5mm以下の砂粒多 量に含む	外:ナデ、ヘラケズリ 内:ナデ	外:淡黃褐色 内:黄褐色	良	1/3残存 黒斑あり	
第26回 50 SD20 RP31 上耕器	土耕器	鉢	瓦	14.3 α	6.8	径2.0mm以下 Fの砂粒やや 多く含む	外:ナデ 内:ナデ	外:灰褐色 内:黄褐色	良好	完剥	
第26回 51 SD20	土耕器	鉢	瓦	15 α	5.9	径0.5mm以下の砂粒をや や多く含む。	外:ヘラケズリ、ヘラケズリ 内:ナデ	黄褐色	良好	1/2欠損 黒斑あり	
第26回 52 SD20	土耕器	鉢	瓦	10.4 α	3.6	径3.0mm以下の砂粒多 量に含む	外:ナデ 内:ナデ	外:淡褐色 内:淡黃褐色	良好	はげて完剥	
第26回 53 SD20	土耕器	鉢(手づくね)	瓦	9 α	5.5	径1.0mm以下の砂粒多 量に含む	外:砂質土 内:ナデ	外:淡褐色 内:赤褐色	良好	1/2欠損 黒斑あり	
第26回 54 SD20	土耕器	鉢	瓦	12.3 α	7	径3.0mm以下の砂粒多 量に含む	外:ナデ 内:ヘラケズリ	青褐色	良	4/5残存	
第26回 55 SD20 下層	土耕器	鉢	瓦	12.5 α	7	径3.0mm以下の砂粒多 量に含む	外:ナデ、ヘラケズリ 内:ヘラケズリ	青褐色	良	はげて完剥	
第27回 56 SD20 RP08	土耕器	鉢	瓦	16 α	11	径1.0mm以下の砂粒多 量に含む	外:ナデ、ヘラケズリ 内:ヘラケズリ	青褐色	良	はげて完剥	
第27回 57 SD20 F34	土耕器	瓦	瓦	22.5 α	13.6	径3.0mm以下の砂粒多 量に含む	外:ナデ 内:ヘラケズリ	青褐色ないし灰褐色	ふつう	はげて完剥	
第27回 58 SD20 南側	土耕器	小型瓦底盤	瓦	12.7 α	13.3	径0.5mm以下の砂粒多 量に含む	外:砂質多 内:弱泥	外:灰褐色 内:弱泥	ふつう	はげて完剥	
第27回 59 SD20	土耕器	灰皿	瓦	12.6+ α	17	径2.0mm以下の砂粒多 量に含む	外:ナデ 内:ヘラケズリ	灰褐色	ふつう	口神原欠損 黒斑あり	

試験番号	通称	土器の種類	型 標	口径(cm)	底高(cm)	底 土	調 整	焼成	現状状況			
									色 調	斑 痕		
第27回 60	SD20	土師器	小型丸底壺	9.6	10	11.4	外：ハケ多 内：ハケ少 質褐色	ややふくらつた 質褐色	良	口は支承 せず	下付資	
第27回 61	SD20 紗附	土師器	小型丸底壺	7.5	8	9.6	外：ハケ多 内：ナテ 質褐色	白っぽい質褐色	良好	完形	丹振り	
第27回 62	SD20 青緑色	土師器	土師器	10.8	7.8 + α	10	外：ハケ多 内：ナテ 質褐色	外：白っぽい 内：青緑色	良好	1/2欠損	黒斑?	
第27回 63	SD20 調査名例	土師器	小型丸底壺	7	8.8	7.4	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む カセツン合 せ	外：ハケ多 内：ナテ 質褐色	赤褐色	良好	口缺5/6欠損 舟型	
第27回 64	SD20 RP11	土師器	小型丸底壺	8.2	9.6	9.6	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む ハクミン石含む	外：ハケ多 内：ナテ 質褐色	赤褐色	良	ほぼ丸形	
第27回 65	SD20 黑山上	土師器	広口壺 精製	14	15.8	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む	外：ミカゲ 内：口缺部ハケ多 ナテ 質褐色	赤白色	良好	1/2残存	黒斑あり	
第27回 66	SD20	土師器	小型丸底壺 精製	11.6	8.5	9.6	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む 質褐色 粘土質良好 有光澤	外：ハケ多 内：ナテ 質褐色	赤褐色	良好	口缺部始1/3と 部部 質褐色	
第27回 67	SD20 RP04	土師器	小型丸底壺 精製	5.6 + α	9.6	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む カセツン石、 粘土質良好 合せ	外：質褐色 内：ナテ 質褐色	赤褐色	良好	質褐色 口 缺部大掛		
第27回 68	SD20 RP10	土師器	高坏	23.6 (平均)	7.6	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む ハクミン石 内：ナテ 質褐色	外：質褐色 内：ナテ 質褐色	赤褐色	良好	不規のみ1/2残 存		
第27回 69	SD20	土師器	高坏	17	5.8 (平均)	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む	外：質褐色 内：ナテ 質褐色	赤褐色	良好	ややみを帯びた 質褐色		
第27回 70	SD20	土師器	高坏	17.5	6 (平均)	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む	外：質褐色 内：ナテ 質褐色	赤褐色	良好	ややみを帯びた 質褐色		
第27回 71	SD20 RP07	土師器	高坏	18	7 (平均)	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む	外：ナテ	赤褐色	良好	杯部のみ残存		
第27回 72	SD20	土師器	高坏			往1.0mm以下の砂粒少 多く含む	外：ナテ 内：ハケ多 ナテ 質褐色	黄褐色	良	杯部のみ残存 1/2欠損、脚部1/2		
第27回 73	SD20 発生後期-終 末	發育壺	高坏	12	13.2 + α	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む	外：ナテ 内：ナテ-板指押さ え	黄褐色	良	1/3欠損		
第27回 74	SD20 硝灰	硝灰	高坏		11.9	4	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む	外：固体ヘラケスリ ナテ 質褐色	青灰色	良好	3/4残存	
第27回 75	SD20 硝灰	硝灰	高坏	12	4.6	往1.0mm以下の砂粒少 多く含む	外：固体ヘラケスリ ナテ 質褐色	白っぽい灰褐色	良好	1/2残存		

船名	通称	1 船の概要		基準	11 桟(=cm) 基準(=cm)	船底(=cm)	1.		調査		航行状況	備考
		排水量	積載量				12	4.8	内: 同様 外: 同様	灰褐色		
第27回	76 SLD20 地域	標準	1t荷									
第28回	77 SLD20 RP08 土砂器	上砂器	一蓋1t荷		22.7	41	33.4	2.0mm以下の砂粒少 量含む	外: 同様ミガキ 中筋ハケ 後筋分離へテラメガキ 間 ヘラケズリ 後ヘラメガキ 内: 海底面へミガキ	灰褐色	良好	1/5残存
第28回	78 SLD20 RP08 土砂器	深			14	25	22		外: 同様少 内: 海底面へミガキ	灰褐色	良好	1/4完形
第28回	79 SLD20 RP11B 七輪器	深			15	21.8	19.7	1.0mm以下の砂粒少 量含む 余漏出含む	外: ハケメ 内: ヘラケズリ 外: ハケメ 内: ヘラケズリ 内: ヘラケズリ	灰褐色	良好	1/4完形
第28回	80 SLD20 RP11C 十輪器	長脚器			13.5	20.5	16	0.5mm以下の砂粒少 量含む カソセンゴ 内: 海底面へミガキ ハケメ	外: 貝殻等分離 内: 貝殻等分離 ハケメ	灰褐色	良好	1/3完形
第28回	81 SLD20 RP14 土砂器	深			10	4.6		0.2mm以下の砂粒多 く含む 余漏出含む	外: ハケズリ 内: ナナ 内: 海底面へミガキ	灰褐色	良好	1/3完形
第28回	82 SLD20 RP13 上砂器	深			10.8	5.4		0.5mm以下の砂粒少 量含む 余漏出含む	内: ハケメ 海底面へミガ キ ハケズリ	灰褐色	良好	1/4完形
第29回	83 SK31 十輪器	半			13.5	12.5	14.3	1.0mm以下の砂粒多 く含む 余漏出含む	外: ハケメ 海底面へミガキ 内: ハケズリ	灰褐色	良好	1/3欠損
第29回	84 SK32 土砂器	半			12	9.2 + α		0.5mm以下の砂粒少 量含む カソセンゴ 石漏出含む	内: ハケメ	灰褐色	良好	1/3欠損
第29回	85 SK33 土砂器	深			15.2	17	16.4	0.2mm以下の砂粒多 く含む 余漏出含む	外: ハケメ 内: ヘラケズリ 内: ハケズリ	灰褐色	良好	1/3欠損
第29回	86 SK33 RP33 土砂器	深			21.8 + α	28		0.5mm以下の砂粒少 量含む	外: ハケメ ハケメ 内: ハケズリ	灰褐色	良好	1/3欠損
第29回	87 SK33 RP32 土砂器	長脚器			12.6 + α	15		0.1mm以下の砂粒多 く含む 余漏出含む	外: ハケメ 内: ナナ ヘ ラケズリ	灰褐色	良好	1/3欠損
第29回	88 SK33 RP33 土砂器	高4t			13.7	6		0.2mm以下の砂粒多 く含む	内: ハケズリ	灰褐色	良好	1/3欠損
第29回	89 SK33 土砂器	土砂器	小型丸底型		7	10.6	12.4	0.2mm以下の砂粒多 く含む	外: ハケズリ後ハケ 内: ハケズリ一筋ハケ 織筋	灰褐色	良好	1/2残存
第29回	90 SK33 RP33 土砂器	深			11	6.2		0.2mm以下の砂粒多 く含む	外: ハケズリ後ナダ キ 内: ナナタタ	灰褐色	良好	1/2残存
第29回	91 SK33 土砂器	深			9.2	8.8	11.7	0.1mm以下の砂粒多 く含む 余漏出含む	外: 海底面 内: ハケズリ	灰褐色	ふつう	1/3完形

標高(青森県標準)	通稱	上部の種類	番号	口径(cm) 端面(φmm)	所	上	西	東	色	調	焼成	現存状況	備考
第20回 92 SX34下	土師器	土	15.7	23	1.4 10mm以下砂粒や砂 多く含む	外: タタキ 内: ナデ、 ヘタツ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良	はは形			すす付、穿孔あり	
第20回 93 SX34下	土師器	小型丸底亞	9.2	9.6	10.4 10mm以下砂粒や砂 多く含む	外: 日輪模ハケメ、 内: 日輪模ハケメ、 輪模ヘラケ メ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良	11.5x形				
第20回 94 東下層	土師器	甕	14.1	18	17 10mm以下砂粒多 く含む	外: 10mm以下砂粒多 内: 10mm以下砂粒多 ヘタツ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	461/2焼存			黒漆付蓋	
第20回 95 SD22 上輪器	土	甕	12.4	16.4	17 10mm以下砂粒多 く含む	外: ナデ、底面付近ヘラケ 内: ナデ、底面付近ヘラケ ナデ	外: 口付を帯びた赤褐色 内: 黄褐色	ふつう	口付部一部欠け				
第20回 96 SD22 RT02 1.輪器	土	小形丸底亞	8.3	8.5	10 10mm以下砂粒や砂 多く含む	外: ヘタツナデ 内: ヘタツナデ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	口輪部2/3、輪 部一部分破損				
第20回 97 SD22 土師器	山形器	山形器	12.5 (底付)	6.6	10 10mm以下砂粒少 く含む	外: ナデ、内: ヘタツナデ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	底部1/6残存				
第20回 98 SD22 葉巻器	甕	甕	14.2	3.8	10 10mm以下砂粒多 く含む	外: 轮模ヘタツナデ、 内: 回転ナデ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	461/2焼存				
第20回 99 SD22 釉器	甕	甕	10	3.6	10 10mm以下砂粒少 く含む	外: 轮模ヘタツナデ、 内: 回転ナデ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	461/2焼存				
第20回 100 SD22 釉器	甕	甕	11.7	4.6	10 10mm以下砂粒多 く含む	外: 轮模ヘタツナデ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	461/2焼存				
第20回 101 SD22 亂器	乱器	乱器	11	4	10 10mm以下砂粒少 く含む	外: 轮模ヘタツナデ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	461/2焼存				
第20回 102 SD22 亂器	亂器	亂器	12.6	4.2	10 10mm以下砂粒少 く含む	外: 轮模ヘタツナデ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	461/2焼存				
第20回 103 ST22 亂器	亂器	亂器	14	4	10 10mm以下砂粒少 く含む	外: 轮模ヘタツナデ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	約4/5焼存				
第20回 104 SX31 石器	石器	石器	13	5	8.5 (厚さ)(46)	砂岩	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	約4/5焼存				
第20回 105 SX33 石器	石器	石器	ナイフ形切器	4 (全長)	—	黒雲母	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	約4/5焼存				
第20回 106 SD20 1.輪器	土	1.輪器	6.1 (外径)	4.4 (内径)	—	安山岩	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	完形				
第20回 107 土器水田	土器	1.輪器	2.3 (全長)	0.7 (内径)	—	金剛寺少塙合む ナデ	外: 茶褐色 内: 黄褐色	良好	完形				

(5) S D 20出土木器 (第31図～第41図、図版23～30)

S D 20埋土中及び井堰からは多くの木器が出土している。順を追って説明する。

S D 20埋土中及び河川底出土木器 (108～123、137～140)

108～116は二又鋏である。いずれも方形柄孔を持つが刃部の形態・大きさは様々である。108は比較的残りがよい。頭部を丁寧に面取り加工している。刃部の切り込みはV字状をなし刃端部を特に鋭利に削り出している。109は108に比べて大きめであるが刃部のカーブは緩やかで切り込みも内湾気味である。115、116はさらに刃端部の形態が丸みを帯び切り込みはU字状に近い。110～114は刃部・柄・着装具がそろった例である。110は二又鋏の刃で残存状況はよくない。刃部はV字状の切り込みを持つ。111の柄の切り込みのある先端部を刃部の方形柄孔に差し込み112の楔を打ち込んで柄と刃を装着したと思われる。113、114も着装具として使用されていたと考える。117は三叉鋏であるが刃部の大半が欠損している。118はスコップ柄状の御柄の握部である。119は欠損が激しいため明確ではないが、平鋏もしくは大足の一部と考える。

120は単独出土した停泥である。第3次調査地点で出土したものと類似する。片側にふくらみ丁寧に削り出して整形している。鋏の刃とともに柄に装着して使用したものである。

121、122はともに井堰より離れた河川底付近で近接して出土した。長さ30cm幅3～4cmの角材の両端を削り端部をふくらませて整形している。紐かがりのための切り込みであろう。機織機の部材に類似する。123は木鎌である。刃部を丁寧に削りだして整形している。儀器として用いられたか。

137、138は容器である。137は欠損しているが方形になると思われる。側壁の両端上部に孔が穿たれている。138は側壁が外湾し舟形になると思われる。把手に孔が穿たれている。実用性のあるものではなく祭祀に関連した儀器である可能性も高い。

139、140は梯子である。一本の丸太を半截し、さらに段部を残し削り出して整形している。

S X 31～S X 35出土木器 (124～132、135、136、141～145)

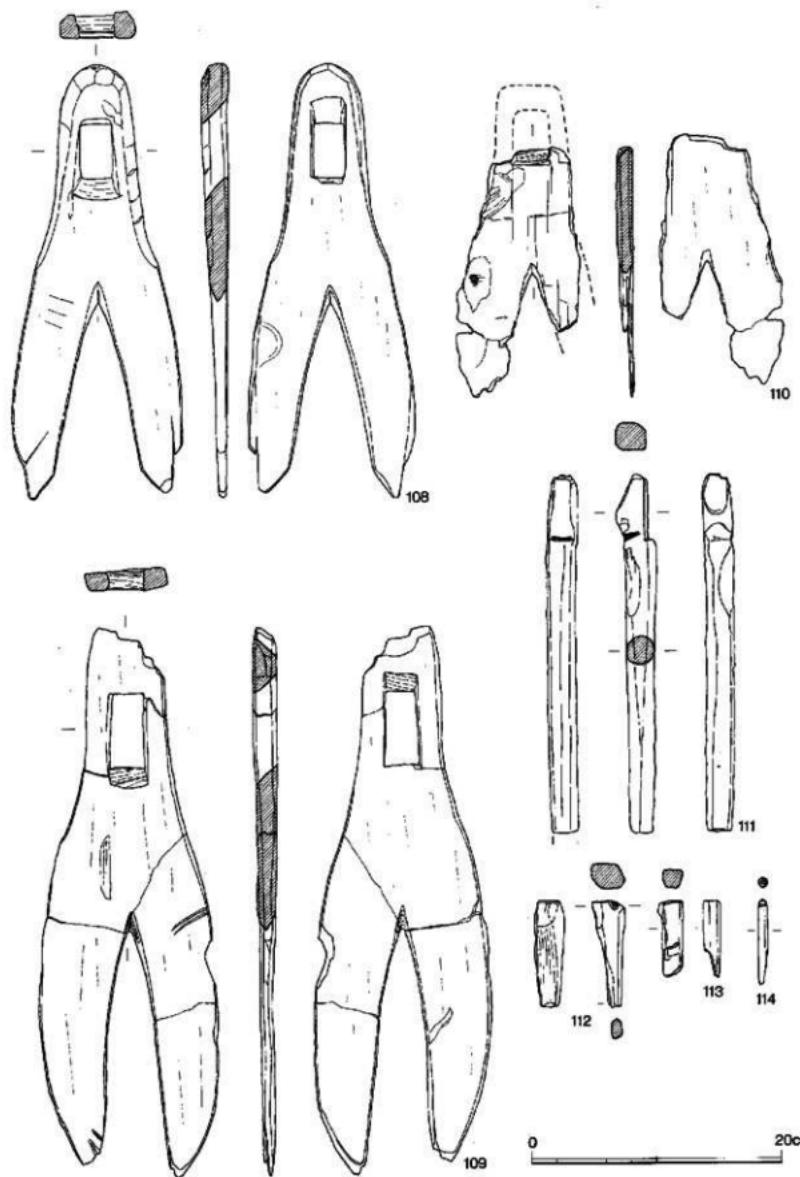
124～132がS X 31出土の木器である。124は履である。板材をくりぬいて右足の形に合うように整形してある。裏面にはスパイク状の突起が5個並び両側面には孔が穿たれヒレ状の突起がつく。紐を通して結ぶためであろう。内法の長さは約25cmで男性用であると思われる。材はクリである。

125～132は農耕具である。125、128・129は二又鋏である。125はかなり大型である。方形柄孔を持ち刃部は直線的に切り込みが入る。128・129は残存状況は悪いがこれもかなり大型の二又鋏になると思われる。129は柄の握り部と先端の着装具組み合わせ部になるが、取り上げの際に壊れて粉尖てしまい、この部分のみの残存である。126は三叉鋏である。方形柄孔を持ち、しっかりしたつくりである。127は一本作りの鋤である。刃部は長方形で刃先が二又にわかれる。130は鋏の一種であろうか。刃部に半円形のくり込みが入る。

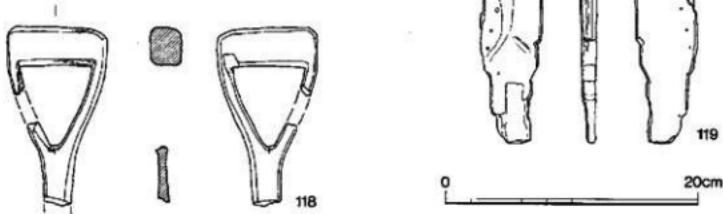
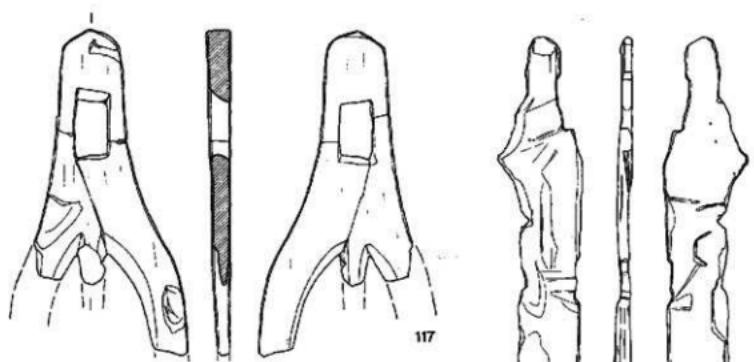
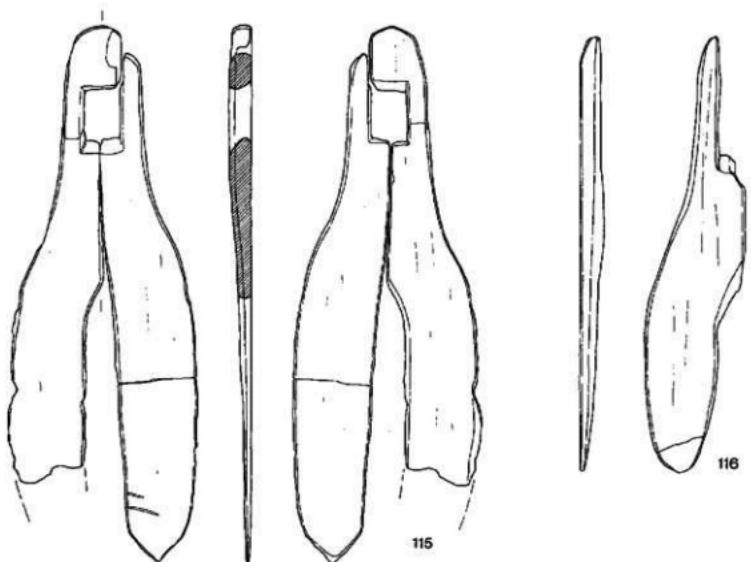
131、132はS X 32より出土した。131は二又鋏で方形柄孔を持ち刃部がやや短く寸胴の形態である。132は欠損しており明確でないが広鋏の一部であろうか。

135、136はS X 33より出土した。盾である。135と136は同一個体の可能性もある。135は残長が72cmでありかなり大型である。小孔が細かに配置され、糸を通した跡が残っている。縁に平行するように常状の黒い顔料が塗布してあり、この正面側がへこむ形態をとる。136の小片も同様である。材はモミである。祭祀に用いられた儀器であろう。

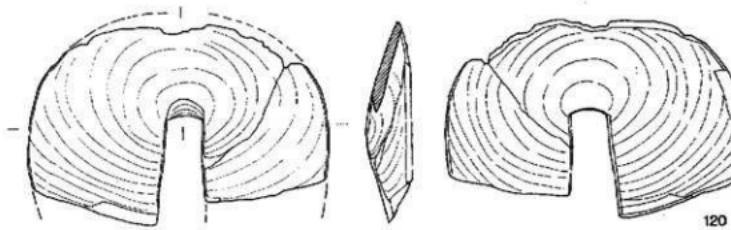
141～145はS X 31～S X 33、S X 35に用いられた立杭及び横木である。141、144は丸杭で先端を削り出して尖らせている。141はS X 31、144はS X 32の立杭として用いられていた。142は角杭で角材を用い先端を尖らせている。S X 33の立杭である。143はS X 33の横木として立杭を組み合わせた上に渡



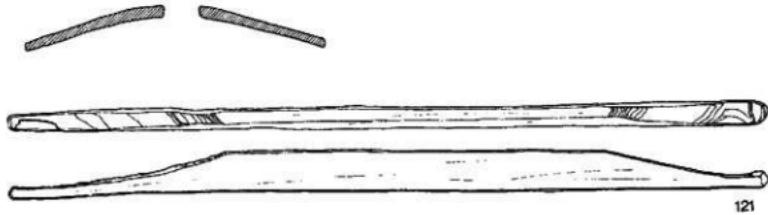
第31図 SD 20出土木器実測図(1)



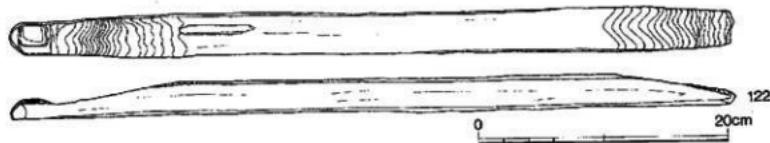
第32図 SD20出土木器実測図(2)



120



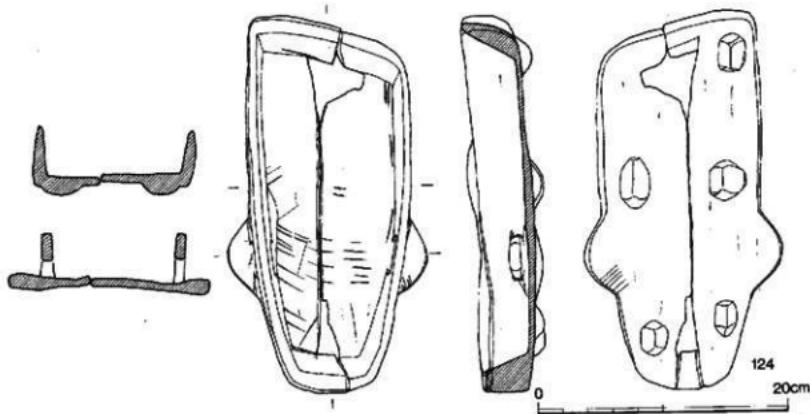
121



20cm

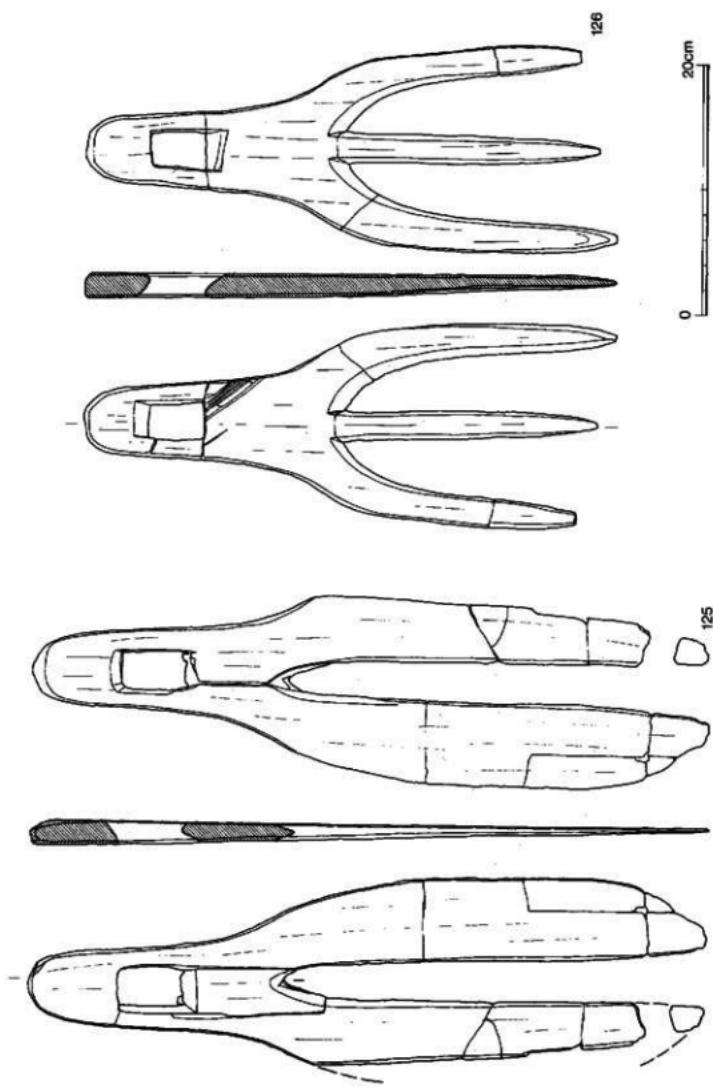


10cm

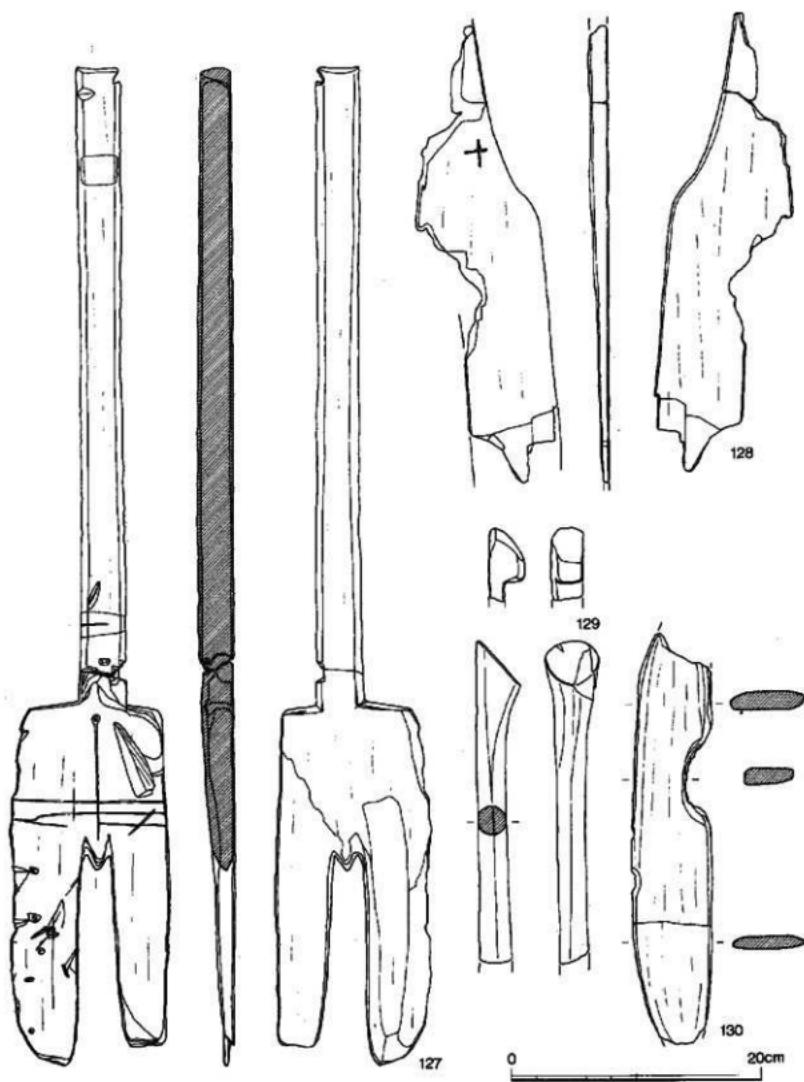


20cm

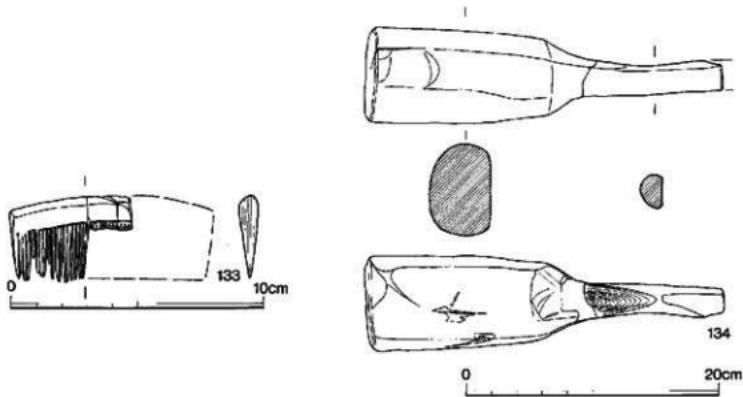
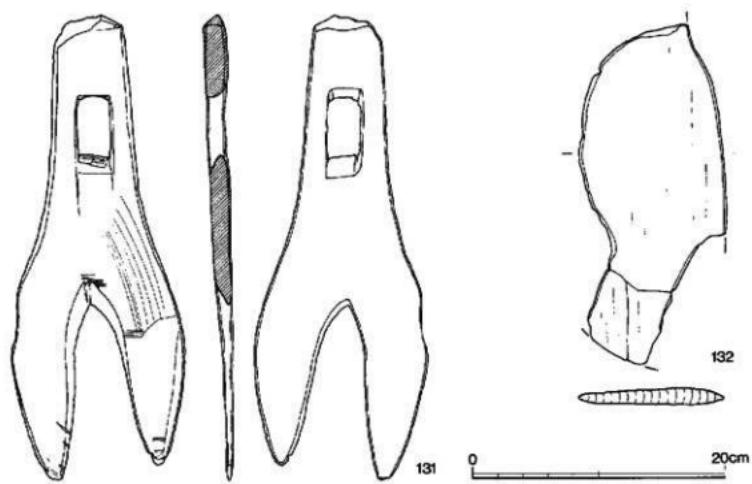
第33図 SD20、SX31出土木器実測図



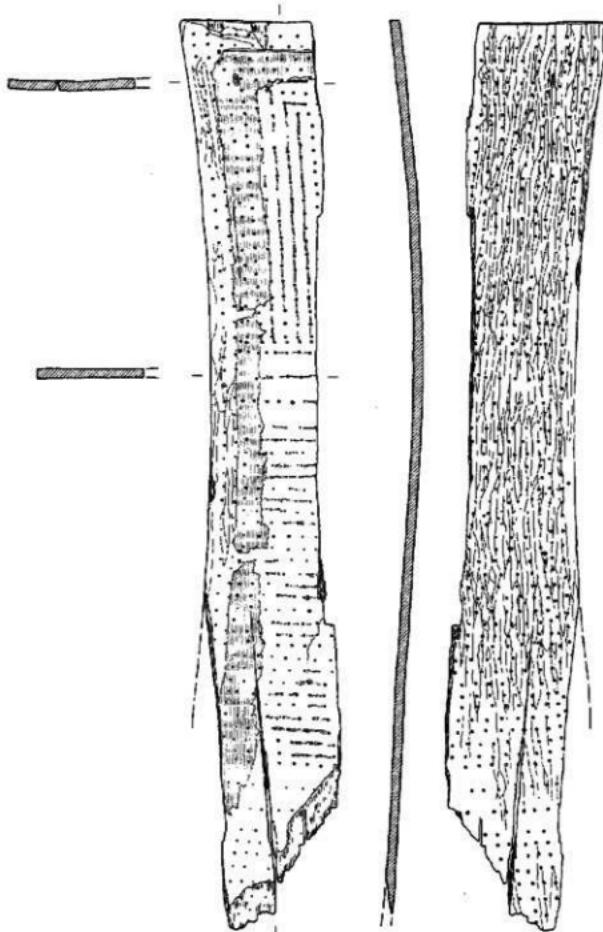
第34図 S X31出土木器実測図



第35図 SX31出土木器実測図



第36図 S X32、S D22、S K21出土木器実測図



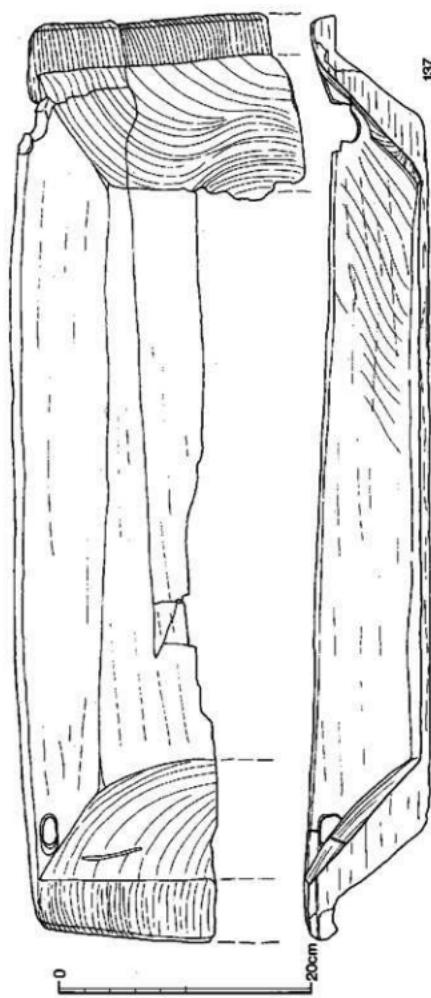
135

0

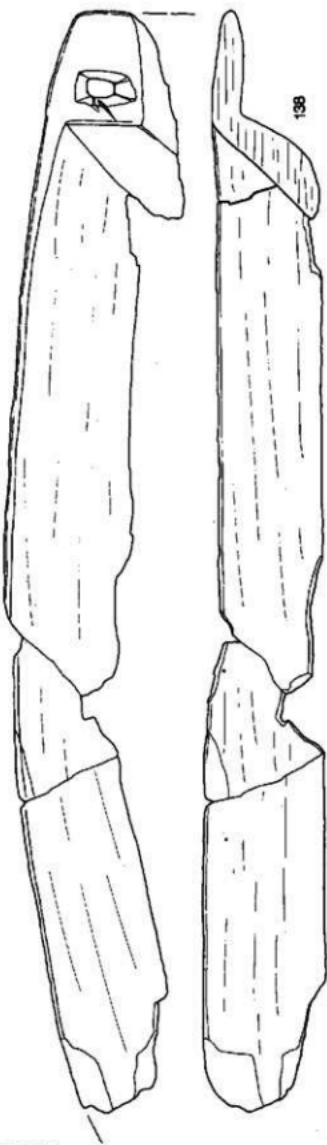
20cm

136

第37図 S X33出土物実測図

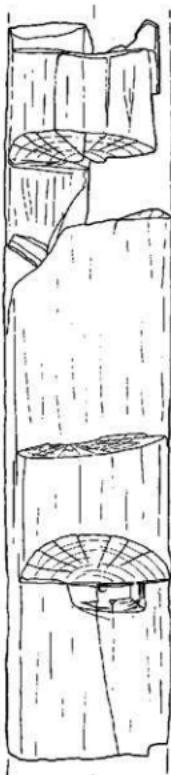
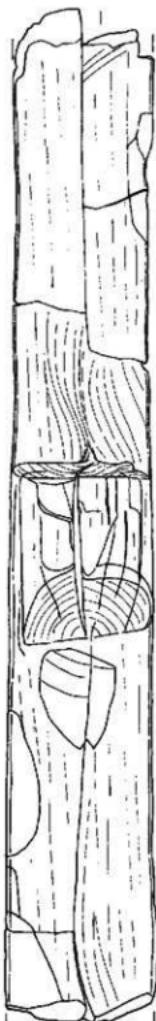


137



138

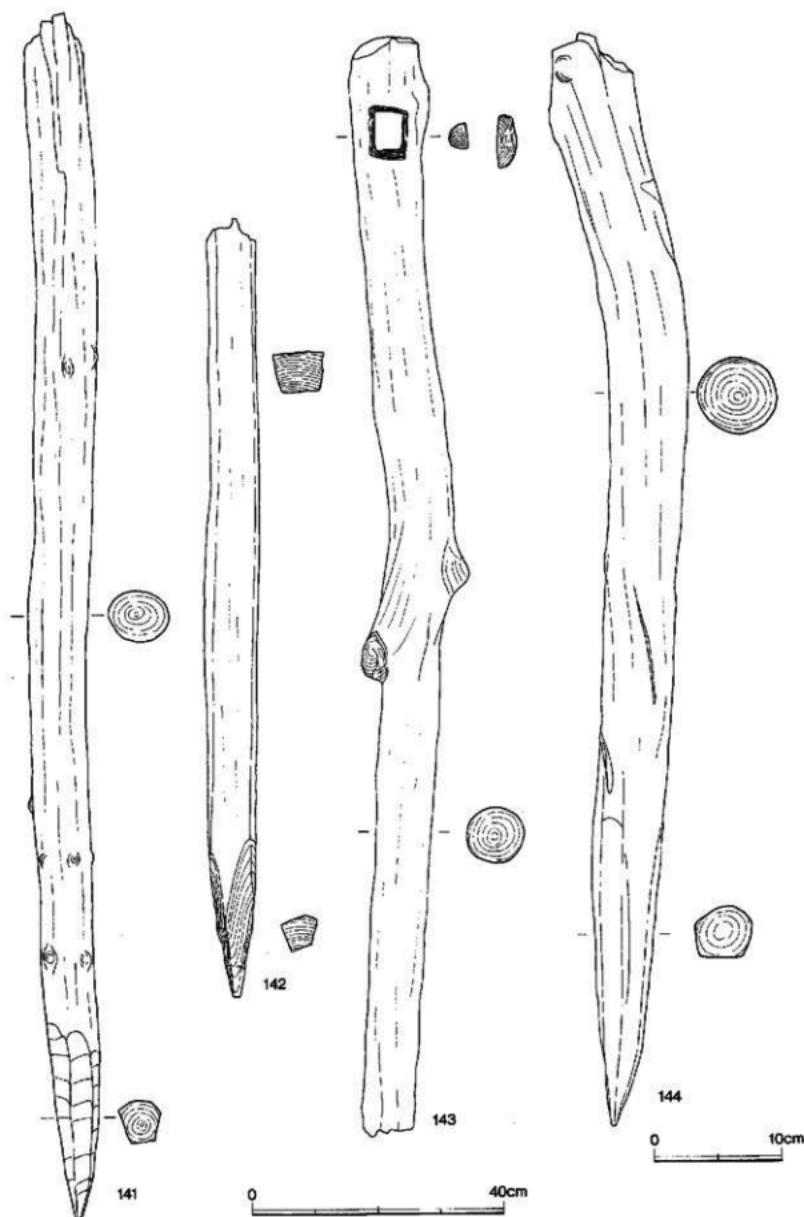
第38図 SD20出土木器実測図(3)



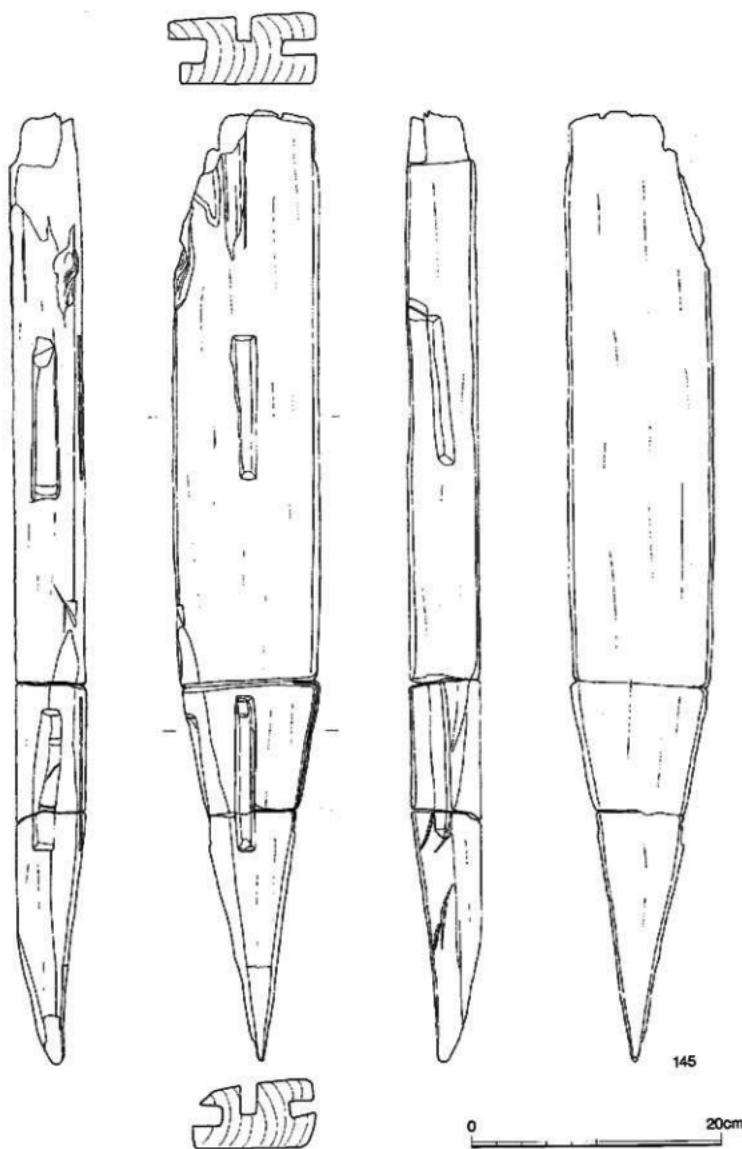
140

0 20cm

第38図 SD20出土木器実測図(4)



第40図 S X31~33出土杭及び建築材実測図



第41図 SX35出土杭実測図

しかけて設置されていた。建築材の再利用で先端に方形のはぞ穴がある。145はS X35の立杭として用いられていた。断面長方形の角材を用い先端を尖らせ三面に各面二本ずつ溝状の切り込みを入れている。この杭はS X35のT字状に交差する箇所に倒れた状態で検出され、この溝に板を差し込んで橋を構築していたと考える。

(6) S D22・S K21出土木器 (第36図133・134)

133はS D22表上出土の櫛である。時期は古墳時代以降であろう。半分欠損しているが丁寧なつくりである。

134はS K21出土の櫛である。櫛部と柄部の断面は蒲鉾形であり、櫛部端を平らに整形している。丁寧なつくりである。

(7) 小結

以上河川及び下層水田出土の遺物を見てきたが簡単にまとめてみたい。

土器

S D20からは甕、壺、鉢、小型丸底壺、高環、須恵器等様々な器種が出上したが、須恵器以外に限ってみると、3世紀中頃から5世紀前後までの範囲に広がる。筆者の力量不足で細かな時期設定はできないが、ここで仮に基準として大まかに時期を区切ってみる。いわゆる庄内式に平行する時期を1期、布留式古相平行期を2期、それ以降を3期とする。甕は在地系、畿内系(庄内式、布留式)が各々検出されている。在地系は1期、畿内系は各々1期、2期・3期に比定される。壺は弥生時代の混入品(47)を除いて、甕と同じく1、2期に収まるが、細かな時期比定は難しい。広口壺・小型丸底壺はいずれともつかぬものがあり便宜的に区分したが、65~67以外では、広口壺は1期から2期、小型丸底壺は2期に入るものもあるがその多くは3期まで下りそうである。65~67は精製土器で時期的にも占くなるであろうが1期から2期に比定されようか。高環も1~3期にまたがる。また、器台(73)、脚付鉢(48)は2期に比定されそうである。須恵器は6世紀後半である。

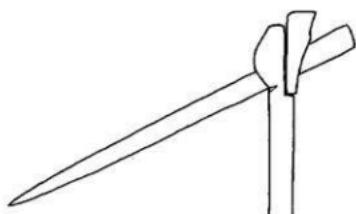
このように見てみると井堰を伴う流路としてS D20が機能していたのは弥生時代終末から古墳時代中期にかけての時期であるといえよう。主体となるのは弥生時代終末から古墳時代初頭の時期である。また、須恵器が出土しているが、古墳時代の流路が埋没した後この時期(6世紀後半)に新たに流路が掘削されたとも考えられる。

S D22出土の上飾器はいずれも5世紀まで下り、3期に位置づけられる。遺構の切り合ひ関係から見ても明らかであるが、S D20よりも後の時期に掘削された構である。また、S D20に比較して多くの須恵器も検出されているが、新しい時期の流路が掘削されたと推定される。

木器

S D20からの出土量がそのほとんどを占める。農耕具には歛(二又歛・三叉歛・広歛)、停泥、轡、容器、履、工具には櫛、儀器には盾、木鎌、その他建築材として梯子、その他の部材、井堰に用いられた杭が出土している。

農耕具のうち歛類がもっとも多く出土している。特に二又歛がその大半を占める。刃先が長く大型のものや刃先がやや開き気味の中型のものなど形態・法量に差異が見られる。また、一例(110~114)のみ着装された状態で検出されている。この例は着装具が短めであるが、組み合わせ式であり組で緊縛した痕跡がある(第42図)。また、129は128の柄であるが、取り上げの段階で壊れてしまい図化することはできなかった。写真を元にして復元すると第43図のようになる。これは四箇遺跡J-10A地点出土の柄や第3次調査地点出土の停泥付きの広歛の柄に類似しており、検出されていないが、着装具を組み合わせて二又歛を固定し、停泥を着装していたと推定される。



第42図 二又鋏復元図



第43図 柄復元図

近接の第3次調査地点（那珂久平遺跡）では三又鋏が多く出土しているのに対して異なる傾向を示す。三又鋏が多く出土していることについて第3次調査の報告では、井堰や灌漑施設の構築に土木工具として三又鋏が使用され、可耕地の拡大、乾田化による生産性の向上につながったとしている。また山口謙治氏は標高が高い地帯では三又鋏が多く、低湿地遺跡では新しくなるほど二又鋏が多く出土する傾向から、三又鋏が開墾起耕具、二又鋏が水田管理起耕具であろうとしている。このように鋏の出土状態の差異が、水田の性質や水田管理に起因するという指摘があるものの、最近の調査成果からは弥生時代後期には三又鋏が、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては二又鋏の出土が多いという傾向がみられる。第3次調査地点の井堰は、出土土器から弥生時代後期に営まれ弥生時代終末期まで下らないとされている。これに対して本調査地点の井堰は、弥生時代後期の土器が一部混入しているものの中心となる時期は弥生時代終末期から古墳時代初頭であり、5世紀まで下る。つまりこの両地点は時間的に前後に継続する。鋏の出土状態の差異が時期差によるものか、他の要因を考えられるものか今後の調査の結果を待って検討していく必要があろう。

停泥は、第3次調査地点出土のものと類似しているが、本遺跡出土のものは丸みを帯びた形態をとり、若干厚めである。鋏に装着して使用するものであるが本例は単独出土であるため装着状況は不明である。容器は2個体出土しているが、139はその形態から模造船である可能性もある。

履と盾が注目される。それぞれ井堰より出土している。履はSX31の杭列の間より二つに割れた状態で検出された。盾はSX33の下層より出土しているが、意図的に井堰に入れられたものかどうかは不明である。

履については比佐陽一郎氏が集成・考察を行っている。それによると、本例に類似した、一本作りでつま先を覆う部分のない容器の形状をし、かつ側面に縫を通すための孔を穿った形態の履物はこれまでのところ12遺跡15点の出土例がある。氏はそれらの例を詳細に検討した後、民俗学的な例から、祭祀具としての可能性も捨てきれないものの「ナンバ」と呼ばれる升下駄の一連の系列であり、芦などを刈る際に切り株から足を保護する目的で使われたのであろうと結論づけている。これは第3次調査地点の報告でも述べられているところであるが、今後のさらなる資料の増加を待って検討していくべきであろう。

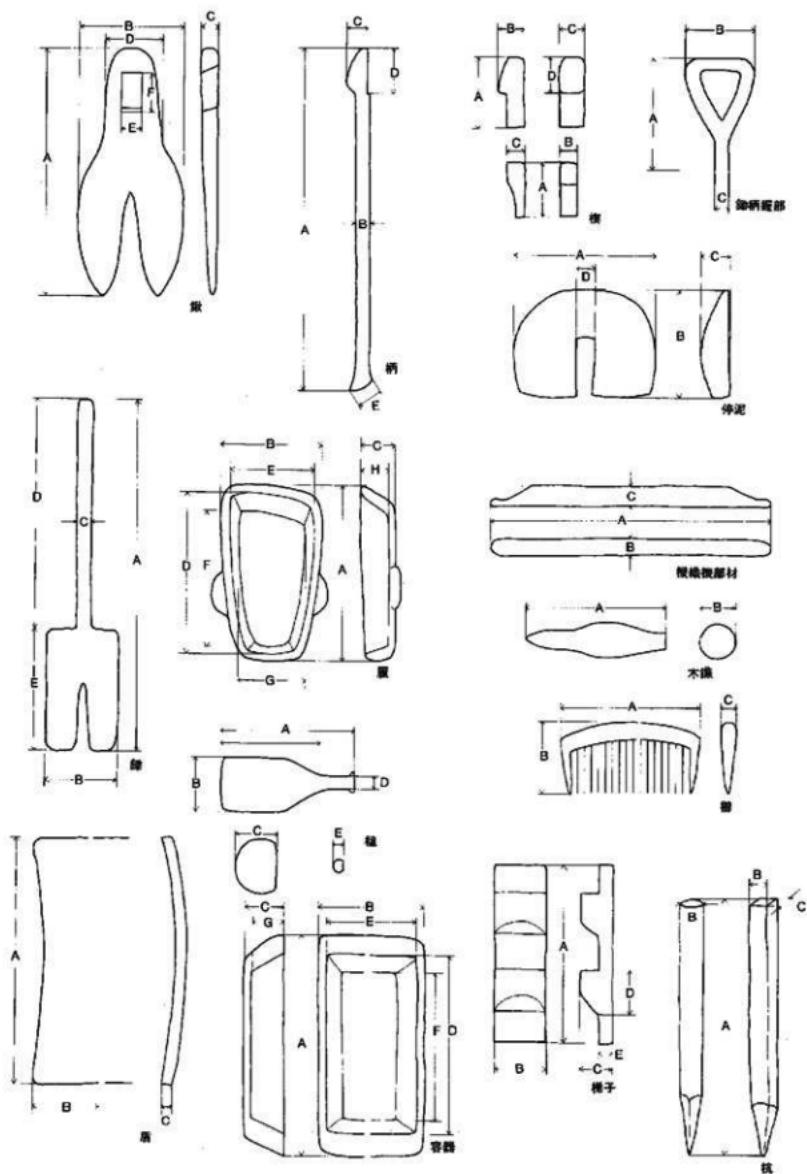
木製盾については、中川正人氏の研究によると全国で33遺跡より約90点が出土している。弥生時代から古墳時代にかけての時期で、そのほとんどが材質がモミであり、穿孔・糸綴じ・朱や墨漆による彩色を施しているという。さらに古墳時代にはいるとこの諸要素を精緻に高め、より象徴的な文様を施していくことである。本例も材質はモミであり無数に配列された穿孔や墨漆と思われる彩色、糸綴じの痕跡などから精巧に作られた儀器であるといえよう。

木器の時期は、伴出した上器からその主体となる弥生時代終末から古墳時代初頭が比定されよう。

本調査地点より検出された遺物は多くはなかったが質的に充実したものであった。今回残念ながら報告できなかった分については改めて次の機会に譲りたい。

・参考文献

- 柳田康男「三、四世紀の土器と鏡ー「伊都」の土器からみた北部九州ー」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』1982
田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』120 1983
中川正人「盾の造形技法とその系譜ー朱塗り木製盾を中心にー」『日本文化財科学会第15回研究発表要旨集』1998
福岡市教育委員会「那珂久平遺跡II」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第163集」1987
福岡市教育委員会「那珂君体遺跡IV」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第208集」1989
福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書－高畠遺跡第12次調査地点ー」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第210集」1989
比佐陽一郎「木製履物雑考－福岡市雀居遺跡・那珂君体遺跡出土資料の紹介を中心としてー」『九州考古学』72 1997



第44図 木器計測部位

表4 出土木器計測表

報告書記載番号	遺構	種類	計量A	B	C	D	E	F	G	H
第31回 108	SD20	二又軸	34	13.4	2.2	5.6	2.4	6.4		
第31回 109	SD20	二又軸	44+ α	14	2	6.2	2.8	7.6		
第31回 110	SD20	二又軸	19.8+ α	9.4+ α	1.2	6.2	3.2			
第31回 111		柄	28.6+ α	2.4	2.4	5.2				
第31回 112		着装具	8.4	2.4	2.6					
第31回 113		着装具	6.2	2	1.4					
第31回 114	SD20	二又軸	6.8	0.8						
第32回 115	SD20	二又軸	42.8	14.6	1.7	7.0	3.4	5.4		
第32回 116	SD20	二又軸	34.6	7.6+ α	1.8	3.4				
第32回 117	SD20	二又軸	26+ α	12+ α		5.2	2.8	5.6		
第32回 118	SD20南西	三又軸	14+ α	8	2.4					
第32回 119	SD20	輪または大足	4.6	6.2+ α	1.2					
第33回 120	SD20	停泥	23.8	15.9+ α	3.7	4				
第33回 121	SD20	機械部材	60.6	1.8	3.1					
第33回 122	SD20	機械部材	57.8	3.2	2.6					
第33回 123	SD20調査区南端	木軸	7.3	3.8						
第33回 124	SD20	履	30.2	13.1	4.4	27.4	11.6	24.2	10.6	4
第34回 125	SD20	SX31中央部杭上部の間	53.6	14.4+ α	2	6.4	3.6	6.4		
第34回 126	SD20	SX31北東	42.2	16.2	2	6	3	5.8		
第35回 127	SD20	SX31	79.4	12	3.6	50.2	29.2			
第35回 128	SD20	SX31北東	二又軸	36.4+ α	9.6+ α	1.4+ α				
第35回 129		柄	25.6+ α	2.2	2.8		5			
第35回 130	SD20	SX31	二又軸	32.6	6.4	1.4				
第36回 131	SD20	SX32東端部	二又軸	36.8	13.8	1.8	6.2	2.6	6.2	
第36回 132	SD20	SX32	広鍬	26.8+ α	11.8+ α	1.2				
第36回 133	SD22表土出土		4.7+ α	3.2	0.8					
第36回 134	SX21		28.2	7.6	4.8	2.2	1.7	16.4		
第36回 135	SD20	SX33	質	72.6+ α	10.6+ α	0.8				
第37回 136	SD20	SX33下	二又軸	14.4+ α	6+ α	0.8				
第38回 137	SD20	RW03	容器	74	23+ α	10	65.6	19+ α	45.6	8.4
第38回 138	SD20			88.4	14.2+ α	9.6	79+ α	9.4+ α	71.6+ α	
第39回 139	SD20		梯子	81+ α	11.4	8	12.2	3.4		
第39回 140	SD20		立杭(丸柱)	58.8+ α	13	9	12.8	6		
第40回 141	SD20	SX31	立杭(角柱)	193.6+ α	9.6					
第40回 142	SD20	SX33	立杭(角柱)	124+ α	8					
第40回 143	SD20	SX33	構木(建築材)	174.8+ α	8.8					
第40回 144	SD20	SX32	立杭(丸柱)	87.4	6.2					
第41回 145	SD20	SX35	立杭(建築材)	76	12	5.8				

単位: cm

付編

那珂君休遺跡第7次調査出土木製遺物の樹種について

1. 試料

試料は、那珂君体遺跡出土の木材110点である。試料の一覧を表1に示す。

2. 方法

カミソリを用いて、試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面（木口）、放射断面（柾口）、接線断面（板目））を作成し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種の同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

樹種同定の結果、26の分類群が同定された。結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

a. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K.Koch イヌガヤ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。樹脂細胞が早材、晩材を通じて平等に分布する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で1分野に1～2個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が見られる。

以上の形質より、イヌガヤに同定される。イヌガヤは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、通常高さ10～15m、径20～30cmである。材は建築、器具、薪炭などに用いられる。

b. マキ属 *Podocarpus* マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、年輪界がやや不明瞭である。樹脂細胞が早材、晩材を通じて平等に分布する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に1～2個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ20m、径50cm～80cmである。材は、耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

c. モミ属 *Abies* マツ科

図版1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。

放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

d. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には著しい鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりアカマツに同定される。アカマツは、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は重硬な良材で水湿によく耐え、広く用いられる。

e. マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、放射仮道管内壁の鋸歯状肥厚の程度で同定できるが、両方の中間的な性質を示す試料は、マツ属複維管束亜属とした。マツ属複維管束亜属は北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

f. スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

図版2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑の高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

g. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑の高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

b. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

横断面：小型で放射方向にややのびた丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

i. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

図版3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸など広く用いられる。

なお、13の試料は小片であり、年輪界部分などの広範間にわたる観察が困難な為、クリ以外のブナ科の材の可能性もあるが、観察出来る範囲では一番よくクリの特徴を示すので、クリとした。

j. ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

図版4

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

k. シイ属 *Castanopsis* ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片の為、広範囲の観察が困難であったので、シイ属の同定にとどまる。

1. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

図版5

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

m. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

n. ブナ科 *Fagaceae*

横断面：部分的ではあるが大型の道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりブナ科の、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ節、コナラ属クヌギ節のいずれかである。なお本試料は、保存状態が悪く、変形が著しい為広範囲の観察は困難であったので、ブナ科の同定にとどまる。

o. クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科

図版6

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったるものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平

伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐久性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

P. クスノキ科 Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外の点が不明瞭なため、クスノキ科の同定にとどまる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

q. イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科

図版7

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐久性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

r. センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. センダン科

図版8

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、數列配列する環孔材である。道管内部に茶褐色のゴム状物質が存在する。孔間部外の道管は単独または2～3個複合して散在する。年輪界付近の小道管は群状に複合し、柔細胞が小道管を包み帯状に配列する。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、小道管および中型の道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、まれに上下の縁辺部に方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はほぼ同性放射組織型で、1～5細胞幅である。小道管および中型の道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりセンダンに同定される。センダンは、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ30m、径1mに達する。材は強さ中庸で、建築、家具、器具などに用いられる。

s. カエデ属 *Acer* カエデ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は單孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、ツツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

t. アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科

図版9

横断面：小型の道管が、単独ないしその複合部に1～2個の柔細胞をはさんで、放射方向にむかって2～4個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の小高木から高木である。

u. ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、ダルマ状に膨れているもののが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているもののが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靭で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

v. ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

横断面：小型の道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く80を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて單列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

w. ガマズミ属 *Viburnum* スイカズラ科

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は30～50本ぐらいである。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～10数個の直立細胞からなる單列のものと、1～4細胞幅で、細長い紡錘形の多列のものからなる。

以上の形質よりガマズミ属に同定される。ガマズミ属にはゴマギ、サンゴジュ、オオカメノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉の低木から高木である。

x. 環孔材 ring-porous wood

横断面：部分的ではあるが、年輪のはじめに大型の道管が配列する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在する。

以上の形質より環孔材に同定される。なお本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が出来なかつた為、環孔材以下の同定は困難であった。

y. 散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在することがかろうとして確認できた。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が出来なかつた為、散孔材の同定にとどまる。

z. 広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が出来なかつた為、広葉樹の同定にとどまる。

4. 所見

同定された主要な樹種は、コナラ属アカガシ亜属24、ツブラジイ17、スギ17、ヒサカキ属5、クスノキ4である。これらの中で、コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイ、ヒサカキ属、クスノキは照葉樹林の主要構成要素である。また、スギは針葉樹であるが照葉樹林内に生育し、照葉樹林の上部に多い樹木である。以上から、本遺跡において利用された木材は、主に照葉樹林の構成要素の樹木である。

参考文献

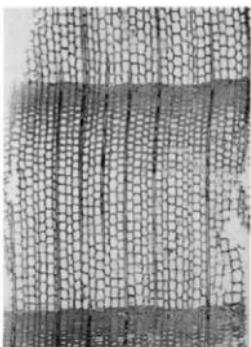
- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、P.20-48。
佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、P.49-100。
島地謙・伊東隆大(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

表1 那珂君休遺跡出土木材の樹種同定結果

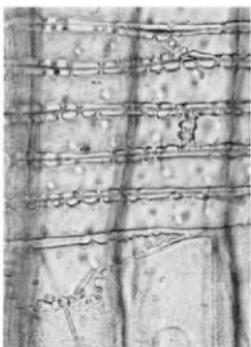
試料番号	報告書接続番号	地区・層位・造構	器種	樹種	和名/学名
1	第31回	108 SD20	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
2	第31回	109 SD20	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
3	第31回	110 SD20	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
	第31回	111 SD20	柄	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
	第31回	112 SD20	香波具	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
	第31回	113 SD20	香波具	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
	第31回	114 SD20	香波具	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
4	第32回	115 SD20	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
5	第32回	116 SD20 RW02	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
6	第32回	117 SD20 RW01	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
7	第32回	118 SD20南西	軸脚部	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
8	第32回	119 SD20	軸または大足	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
9	第33回	120 SD20	停泥	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
10	第33回	121 SD20	棗脚部材	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
11	第33回	122 SD20	機械脚部材	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
12	第33回	123 SD20南端	木錐	イスノキ	<i>Diospyros racemosum</i> Sieb. et Zucc.
13		124 SX31	履	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
14	第34回	125 SX31中央杭上部間	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
15	第34回	126 SX31北東	三又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
16	第35回	127 SX31	鉤	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
17	第35回	128 SX31北東	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
18	第35回	129 SX31北東	鉤	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
19	第36回	130 SX31-725	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
20	第36回	131 SX32東端部	二又歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
21	第36回	132 SX32	広歯	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
22	第36回	133 SD22表上	櫛	イスノキ	<i>Diospyros racemosum</i> Sieb. et Zucc.
23	第37回	134 SK21	櫛	ヤツツバキ	<i>Camellia japonica</i> Linn.
24	第37回	135 SX33F	盾	モミ属	<i>Abies</i>
25	第38回	136 SX33	盾	モミ属	<i>Abies</i>
26	第38回	137 SD20	容器	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
27	第38回	138 SD20	容器	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl
28	第39回	139 SD20	梯子	ガマズミ属	<i>Viburnum</i>
29	第39回	140 SD20	梯子	ガマズミ属	<i>Viburnum</i>
30	第40回	141 SX31	立杭	マキ属	<i>Podocarpus</i>
31	第40回	142 SX33	立杭	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
32	第40回	143 SX33	横木建築材	環孔材	ring-porous wood
33	第41回	144 SX32	立杭	アワブキ属	<i>Meliosma</i>
34		SD20	梯子	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
35		SD20	建築材	ツブライ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
36		SD20	横木建築材	ツブライ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
37		SD20	立杭	広葉樹	broad-leaved tree
38		SD20	立杭	アワブキ属	<i>Meliosma</i>
39		SD20	立杭	ヒサカキ属	<i>Eurya</i>
40		SD20	立杭	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
41		SD20	立杭	ヒサカキ属	<i>Eurya</i>
42		SD20	立杭	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
43		SD20	杭	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
44		SD20	板	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
45		SD20	板	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
46		SD20	板	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
47		SD20	板	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl
48		SD20	板	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
49		SD20	木片	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
50		SD20	木片	ヤナギ属	<i>Salix</i>
51		SD20	木片	ヤナギ属	<i>Salix</i>
52		SD20	木片	イヌノキ	<i>Diospyros racemosum</i> Sieb. et Zucc.
53		SD20	木片	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
54		SD20	木片	散孔材	diffuse-porous wood
55		SD20	木片	センダン	<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.
56		SD20	木片	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don
57		SX31	横木建築材	ツブライ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
58		SX31	立杭建築材	マキ属	<i>Podocarpus</i>
59		SX31	立杭建築材	ブナ科	<i>Fagaceae</i>
60		SX31	立杭	ヒサカキ属	<i>Eurya</i>

試料番号	報告書摘要番号	地区・位置・遺構	名 標	樹 種	和 名 / 学 名
61	SX31	立杭	コナラ属コナラ類	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	
62	SX31	立杭	アワガ属	<i>Meliosma</i>	
63	SX31	立杭	イヌガヤ	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch	
64	SX31	立杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
65	SX31	立杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
66	SX31	立杭	ヤツババキ	<i>Camellia japonica</i> Linn.	
67	SX31	立杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
68	SX31	立杭	ヒサカ属	<i>Eurya</i>	
69	SX31	立杭	アカマツ	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.	
70	SX31	立杭	シイ属	<i>Castanopsis</i>	
71	SX31	立杭	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don	
72	SX31	立杭	シイ属	<i>Castanopsis</i>	
73	SX31	立杭	イヌガヤ	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch	
74	SX31	立杭	散孔材	diffuse-porous wood	
75	SX31	立杭	コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	
76	SX31	立杭	シイ属	<i>Castanopsis</i>	
77	SX31	立杭	ヒサカキ属	<i>Eurya</i>	
78	SX31-675	板	マツ属複雜管束型属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	
79	SX31	板	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don	
80	SX31 437	板	マンネンタケ属	<i>Ganoderma</i>	
81	SX31	木片	コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	
82	SX31北東	木片	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	
83	SX32	横木建築材	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don	
84	SX32	立杭	アワガ属	<i>Meliosma</i>	
85	SX32-62	杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
86	SX32-62	杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
87	SX32-473	杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
88	SX32-478	杭	コナラ属コナラ類	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	
89	SX32-62	杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
90	SX32-496	杭	広葉樹	broad-leaved tree	
91	SX32 496	木片	カエデ属	<i>Acer</i>	
92	SX33	立杭建築材	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don	
93	SX33	立杭建築材	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don	
94	SX33	立杭建築材	スギ	<i>Criptomeria japonica</i> D. Don	
95	SX33	立杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
96	SX33-794	杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
97	SX33-721	杭	コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	
98	SX34北	板	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	
99	SX35	立杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
100	SX35	立杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
101	SX35	立杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
102	SX35	立杭	コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	
103	SX35	立杭	シイ属	<i>Castanopsis</i>	
104	SX35	立杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
105	SX35	立杭	コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	
106	SX35	立杭	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	
107	SD22	立杭	クスノキ科	Lauraceae	
108	SD22	木片	環孔材	ring-porous wood	
109	SD22	木片	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	
110	SD22	木片	コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	

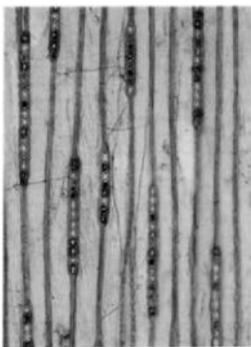
那珂君休遺跡出土木材の顕微鏡写真 I



横断面 : 0.5mm

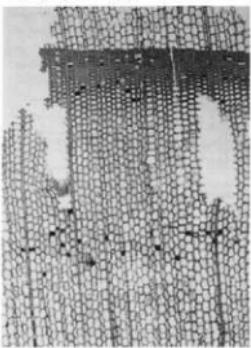


放射断面 : 0.05mm

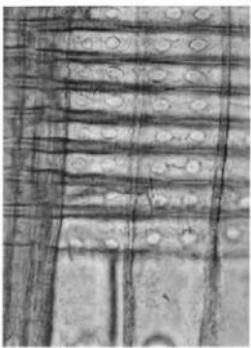


接線断面 : 0.2mm

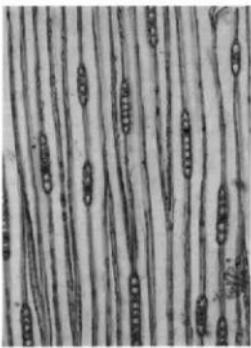
1. (23) モミ属



横断面 : 0.5mm

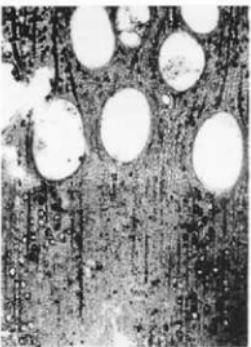


放射断面 : 0.05mm



接線断面 : 0.2mm

2. (45) スギ



横断面 : 0.5mm



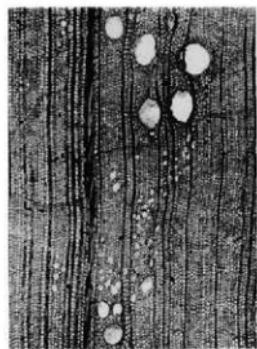
放射断面 : 0.5mm



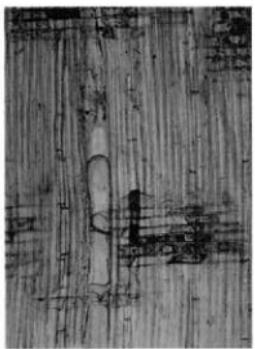
接線断面 : 0.2mm

3. (25) クリ

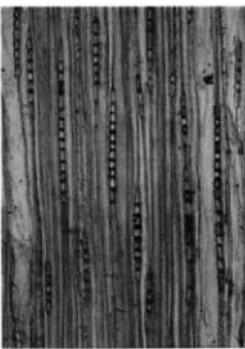
那珂君休遺跡出土木材の顕微鏡写真II



横断面 : 0.5mm

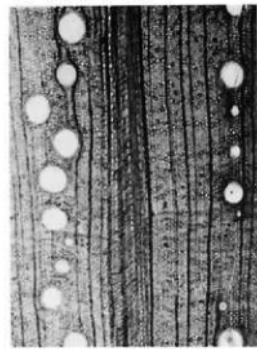


放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

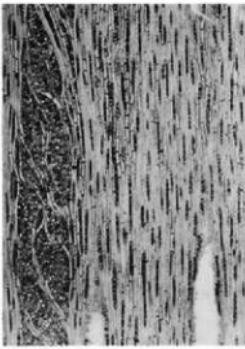
4. (65) ツブラジイ



横断面 : 0.5mm

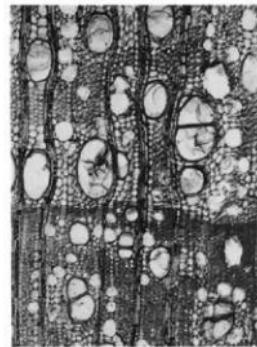


放射断面 : 0.2mm

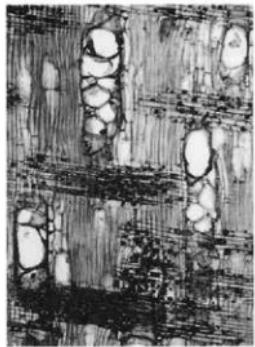


接線断面 : 0.5mm

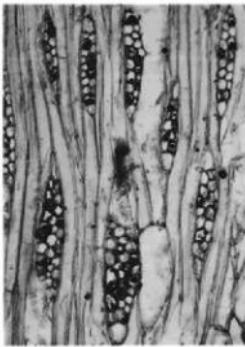
5. (53) コナラ属アカガシ亜属



横断面 : 0.5mm



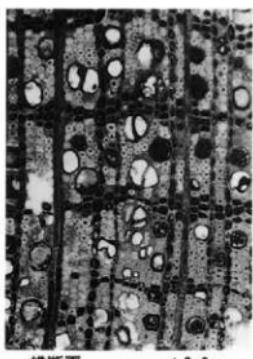
放射断面 : 0.5mm



接線断面 : 0.2mm

6. (47) クスノキ

那珂君休遺跡出土木材の顕微鏡写真III



横断面 : 0.2mm

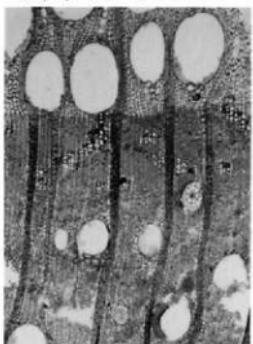


放射断面 : 0.1mm

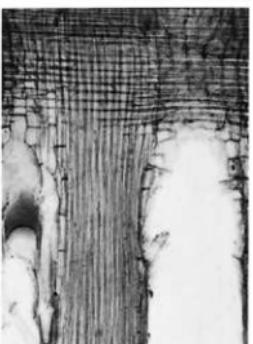


接線断面 : 0.2mm

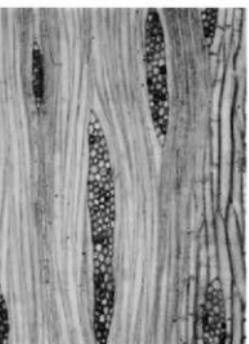
7. (12) イスノキ



横断面 : 0.5mm

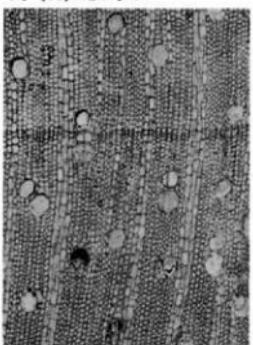


放射断面 : 0.2mm

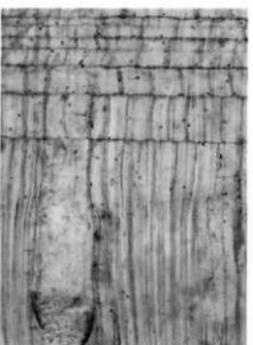


接線断面 : 0.2mm

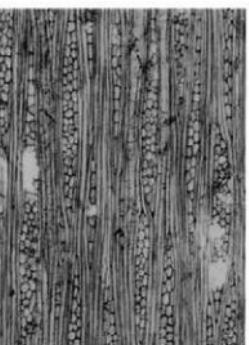
8. (55) センダン



横断面 : 0.5mm



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.5mm

9. (32) アワブキ属

図 版



1. I区下層全景（南から）



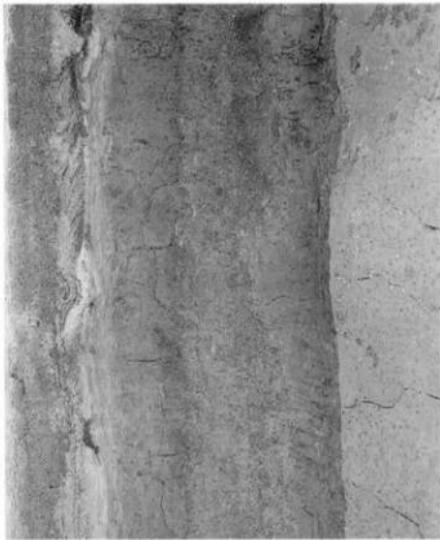
2. II区下層全景（東から）



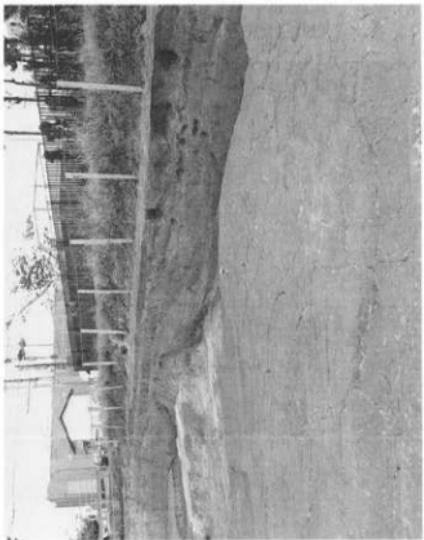
1. I 区下層水田址（南東から）



2. I 区南西壁面珪畔土層（北東から）



4. Ichi-ku Nankai Erosion Face Soil Layer (North East side)



3. Ichi-ku Nankai Erosion Face Soil Layer (North West side)



1. I区下層水田（航空写真）



2. SD20(新)(空中写真)



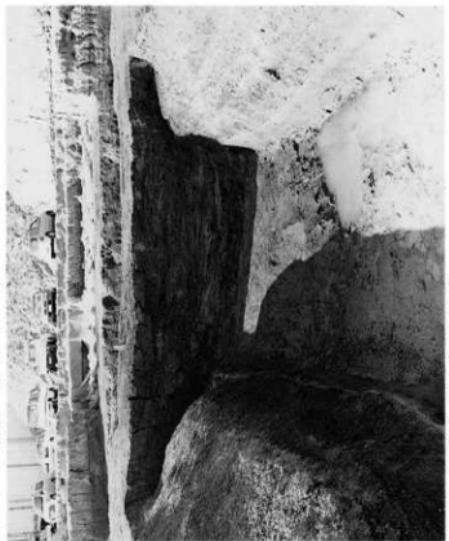
3. SD20・22(南東から)



4. SD20・22(空中写真)



2. SD20(新) 土層(南東から)



3. SD20(新) 土層(南東から)



1. SD20土層(東から)



3. SD20(新) 土層(南東から)



1. SD22土層（東から）



3. SD22土層（南から）



2. SK21土層（南東から）

4. SN (南から)



2. S X31~33・35 (南東から)



4. S X31・32井壁 (北東から)



1. SD21・S X31~33・35 (南東から)



3. S X31~33・35 (北西から)



3. SX33井壁 (北西から)



1. SX31-32井壁 (南から)



2. SX32間イネ科植物



3. SX33南東部分（北東から）



1. SX33井堰（南から）



2. SX33井堰（南西から）



1. S X 35橋状道構（前から）



2. S X 35橋状道構（南東から）



3. S X 33橋東部分（南西から）

4. S X 35橋状道構（南東から）



1. SX31土層（南西から）



2. SX32土層（北東から）



1. SX31土層（南西から）



3. SX33土層（北から）

4. SX34井堀（東から）



1. SD20停泥出土状况



2. SD20出土状况



3. SD20三叉锹出土状况



4. SD20二叉锹出土状况



5. SD20二叉锹出土状况



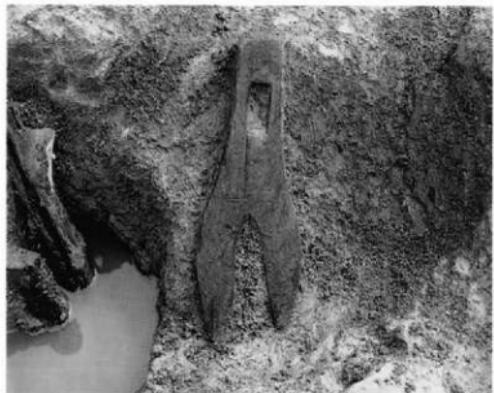
6. SD20二叉锹出土状况



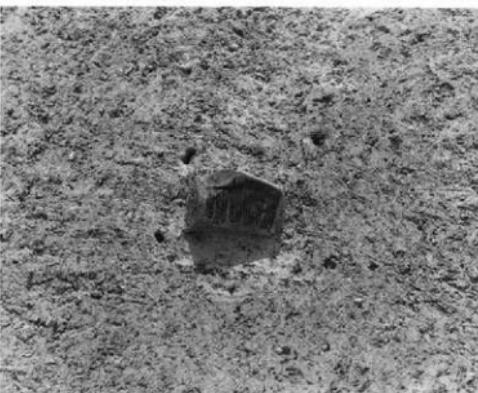
1. SX31二叉鉛出土状況



2. SX31鉛出土状況



3. SD20二叉鉛出土状況



4. SD22鉛出土状況



5. SX33盾出土状況



6. SD20容器出土状況



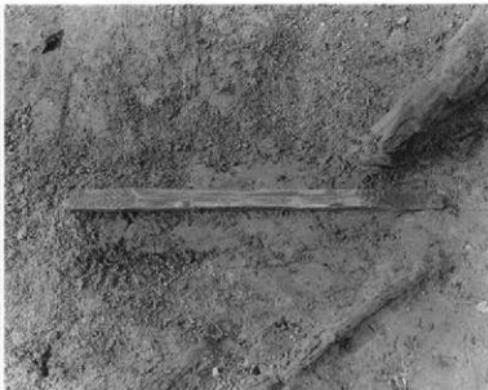
1. SX31鋤柄 出土状況



2. SX31三叉鋤出土状況



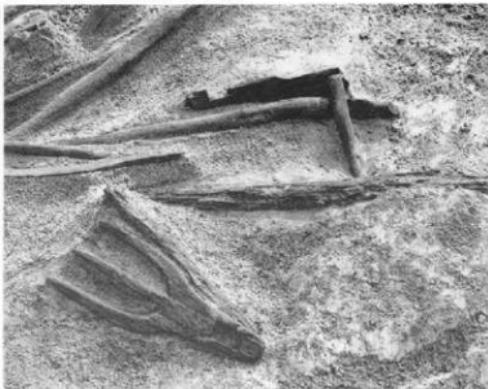
3. SD20機織機部材出土状況



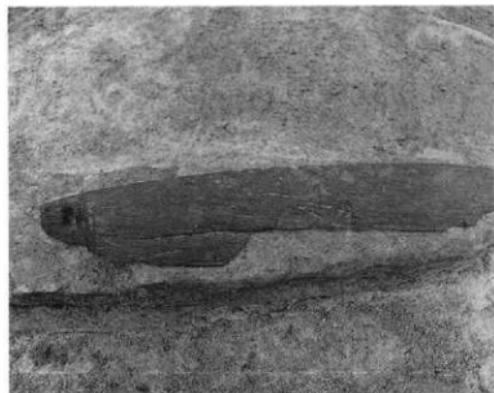
4. SD20機織機部材出土状況



5. SX31履出土状況



6. SX31鋤出土状況



1. S D20容器出土状況



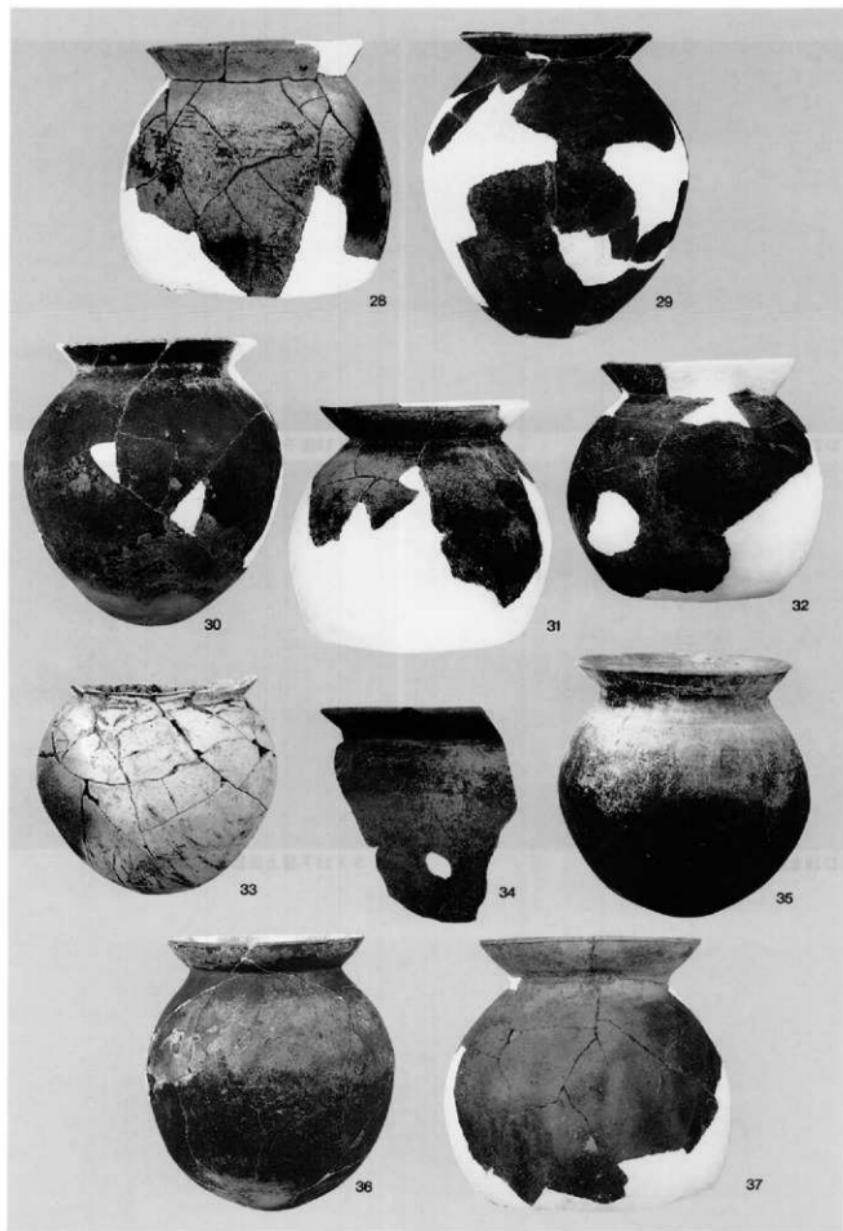
2. S X33梯子出土状況

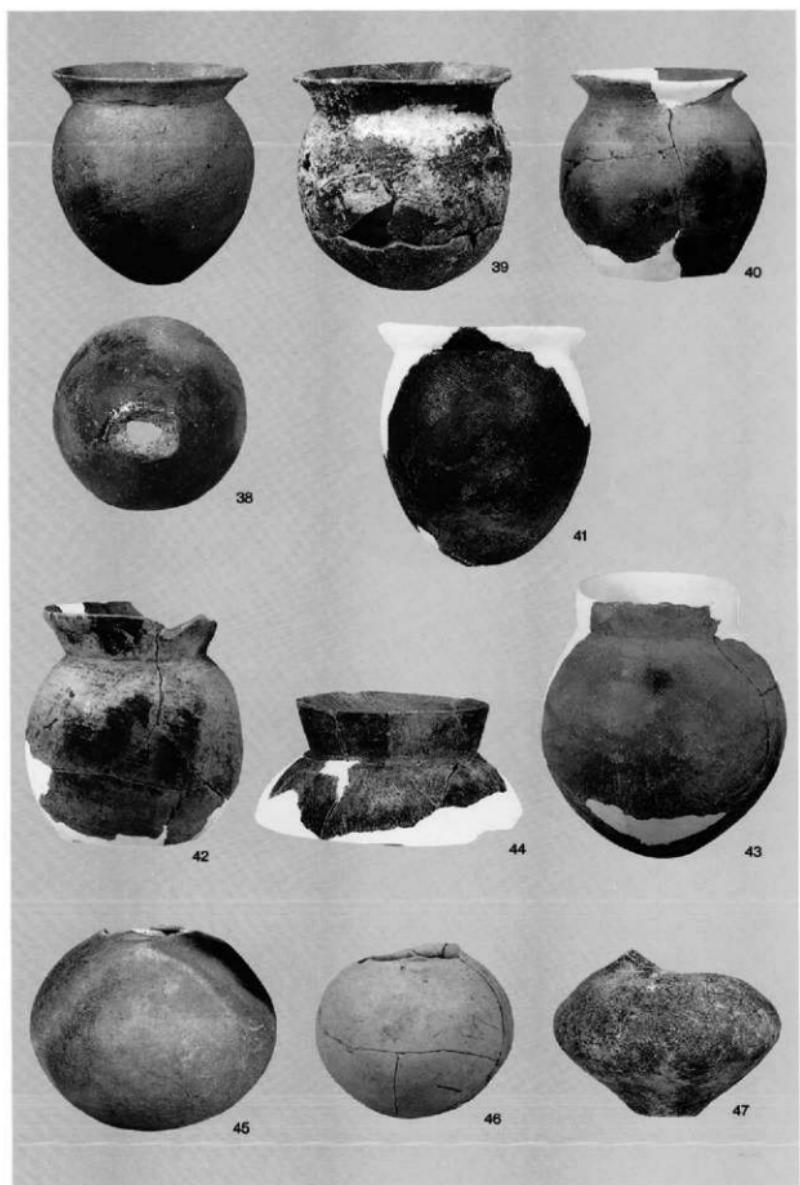


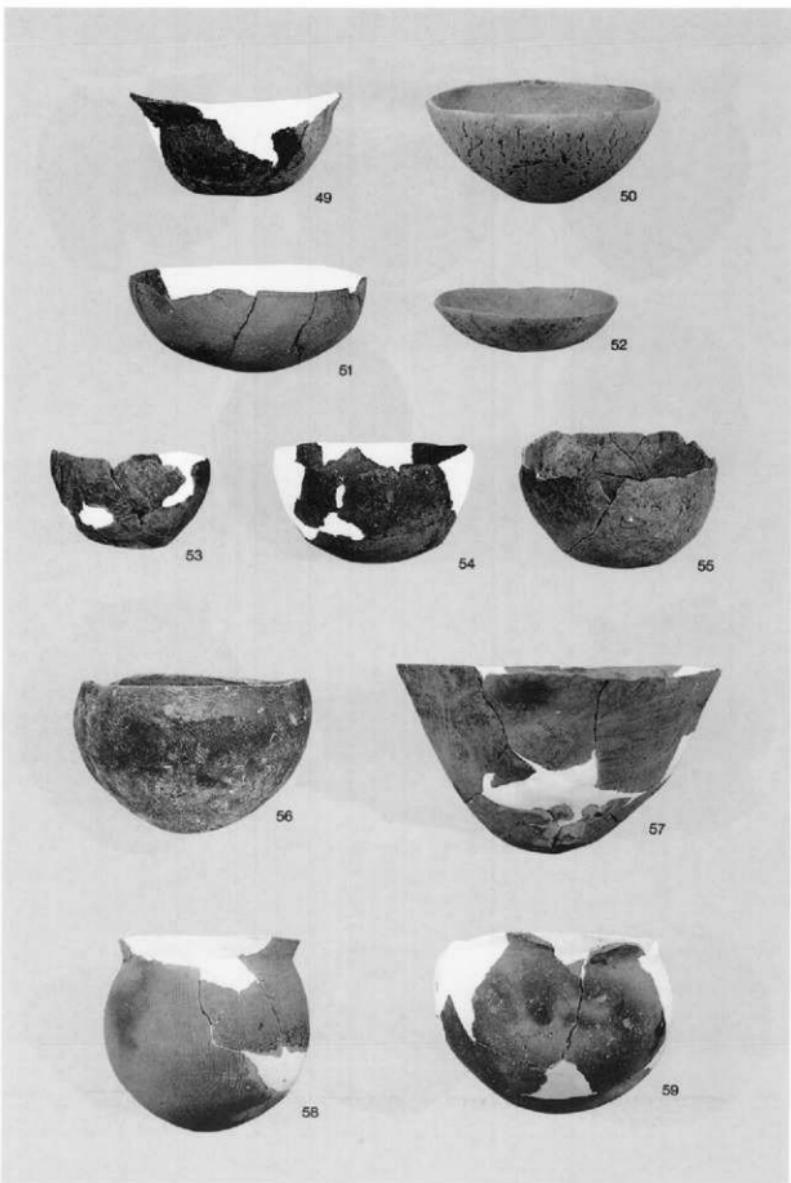
3. S D20土師器出土状況

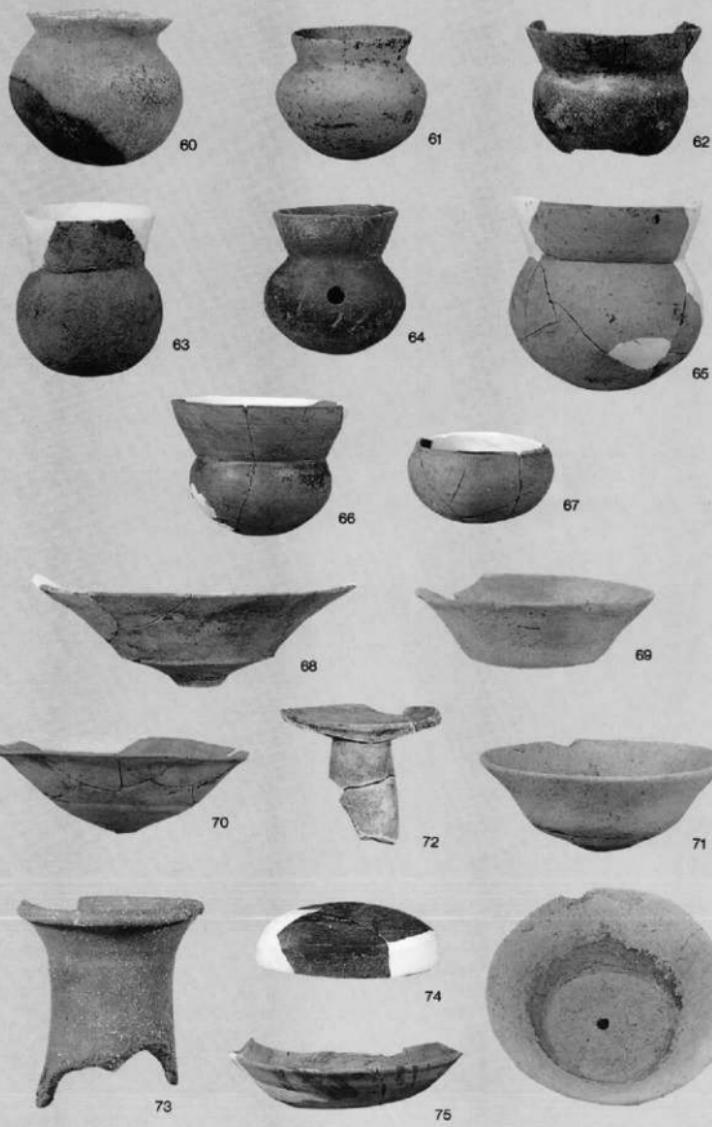


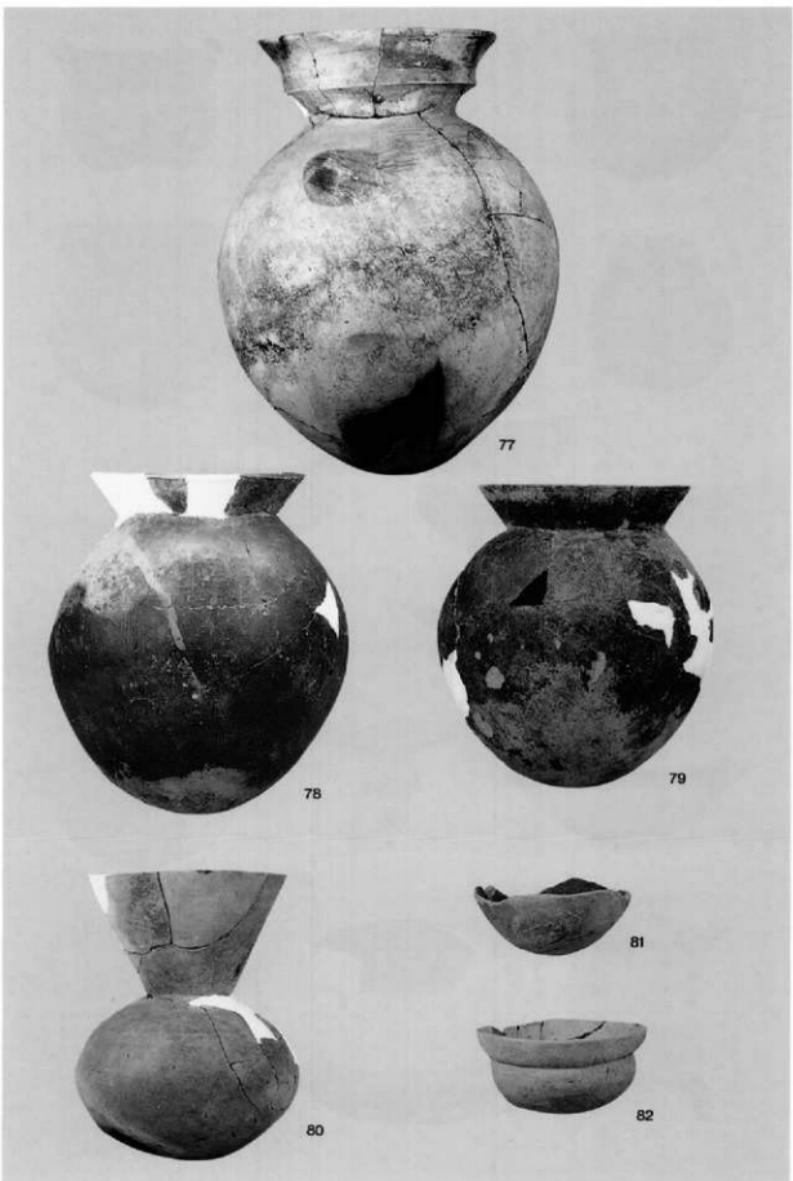
4. S X33下層土師器出土状況

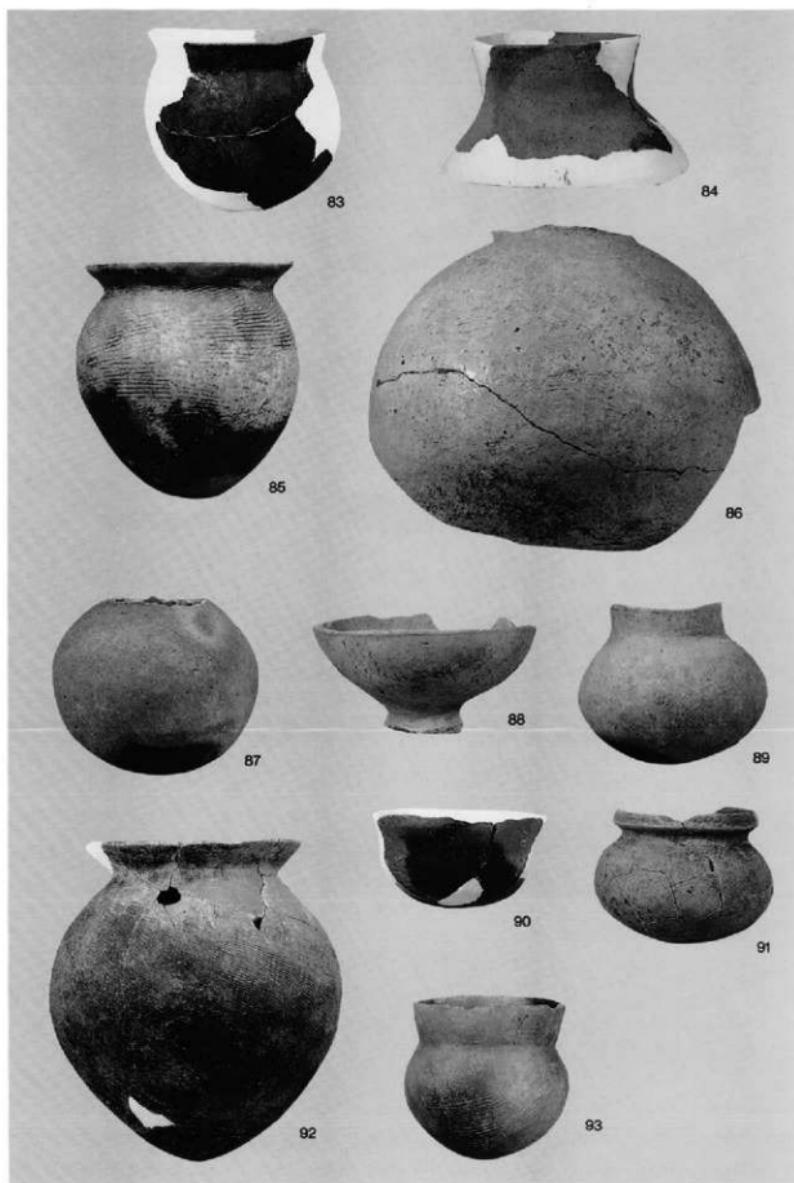


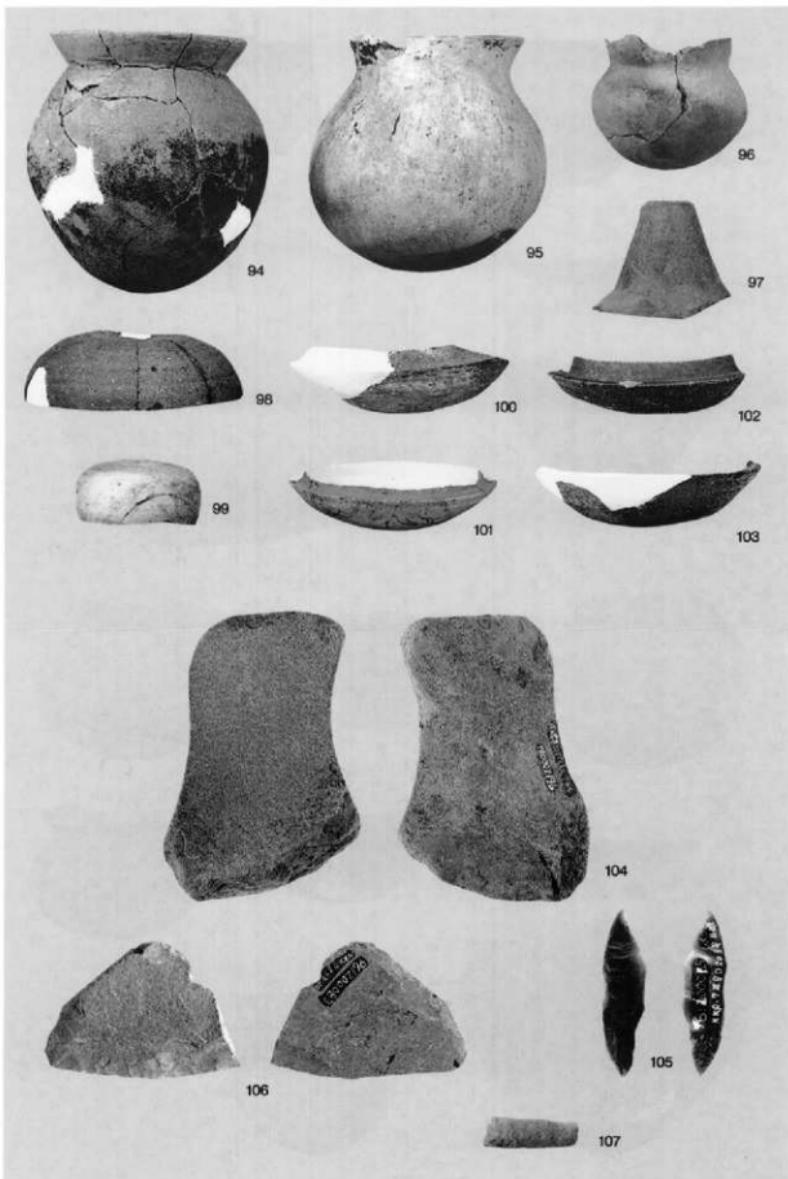














108



110



111



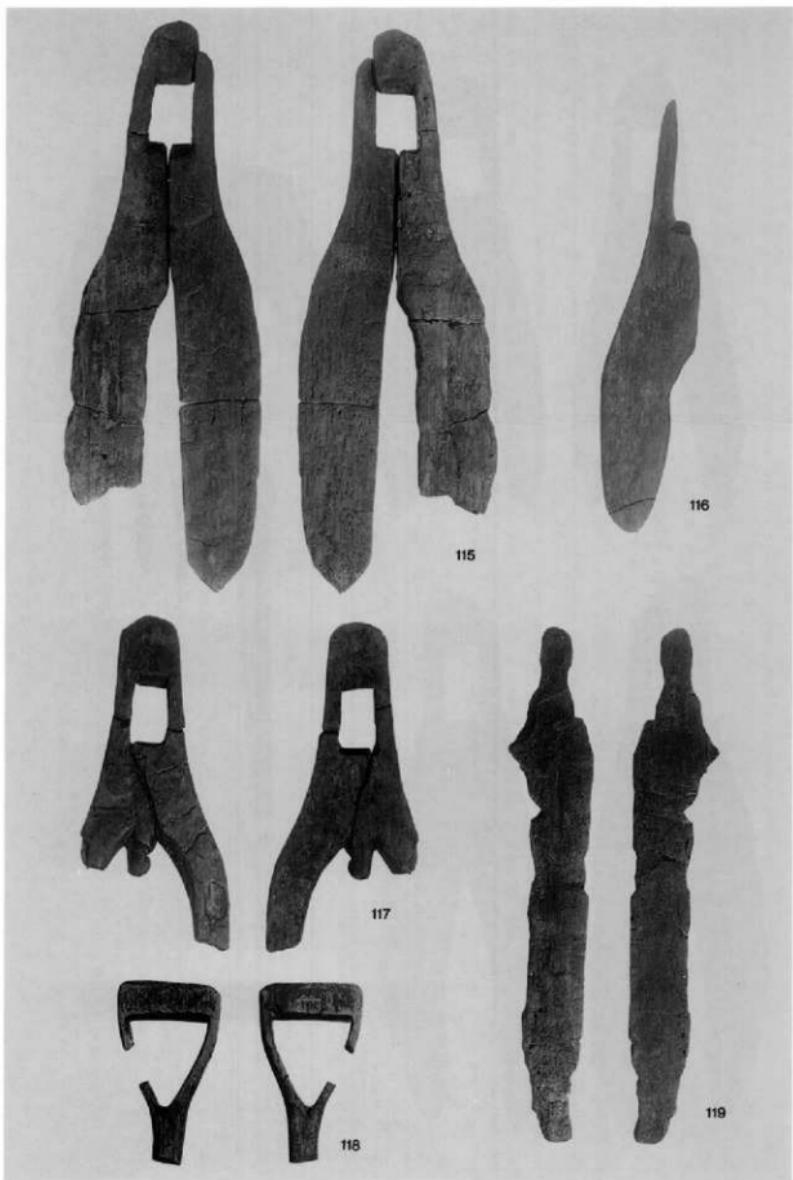
112

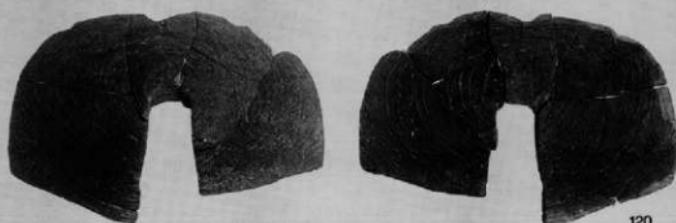
113

114

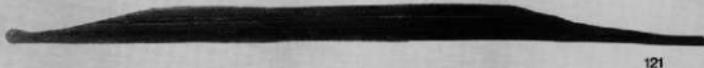


109





120



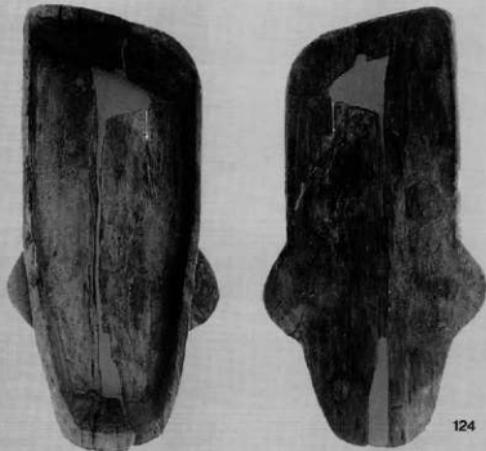
121



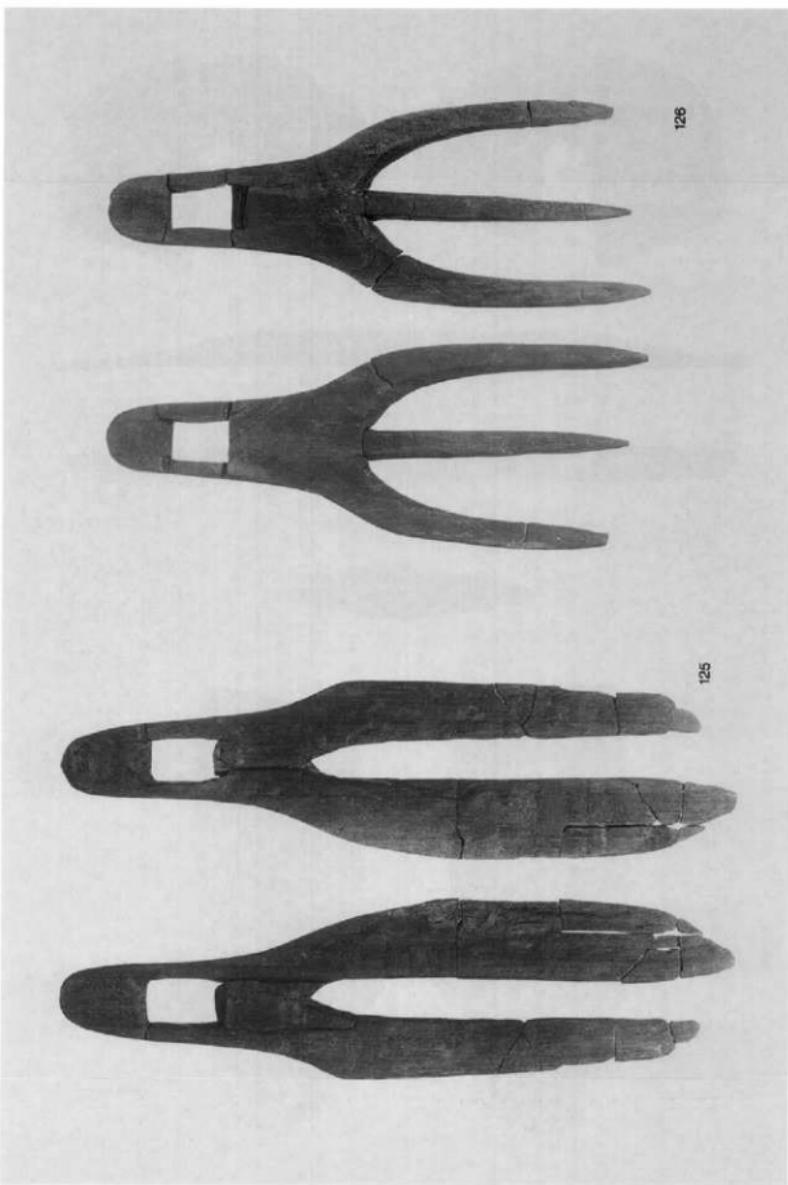
122

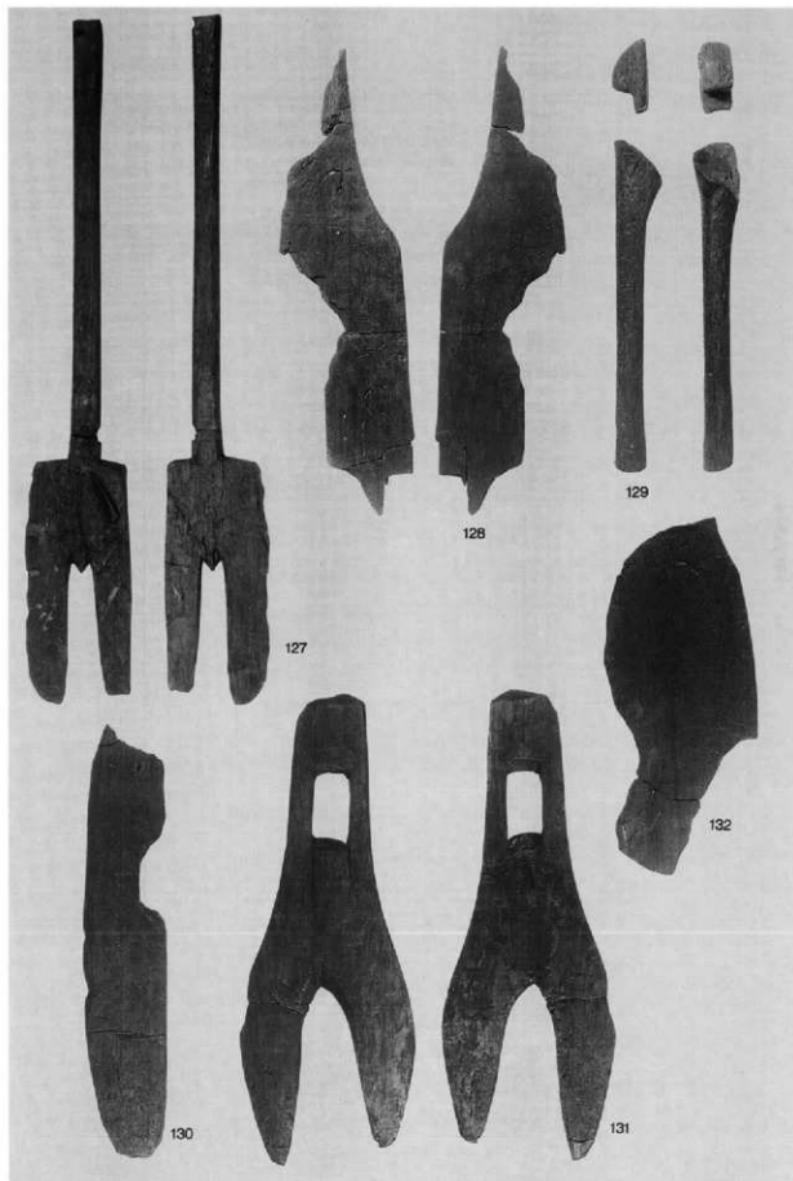


123



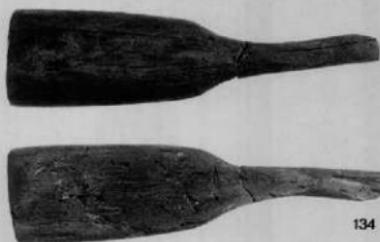
124







133



134



135



136



137



138



139

140



那珂君休遺跡

—第8次調査—



遺跡略号 NKR-8

遺跡調査番号 9713

例　　言

1. 本章は、博多区那珂四丁目312における共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が平成9年度（1997年度）に実施した那珂君休遺跡群第8次調査の発掘調査報告書である。
2. 本章の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3. 本章に使用した造構実測図は本田・井上謙子が作成した。また、製図には本田・春田城二があたった。
4. 本章の造構実測図中に用いていてる方位は、すべて磁北である。
5. 本章に使用した造物実測図の作成・製図は本田が行った。
6. 検出した造構については、調査時に検出順に通し番号を付した。本京では、造構の種類別に抽出し番号を付け、造構の性格を略号で頭に付して呼称している。造構略号は井戸（S E）・土坑（S K）・溝（S D）・ピット（S P）である。
7. 遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
8. 本章で使用した写真は本田が撮影した。
9. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

遺跡調査番号	9713	遺跡略号	NKR-8
調査地地番	博多区那珂四丁目312	分布地図番号	024-0086
開発面積	1,006m ²	調査面積	259m ²
調査期間	1997年5月6日～6月18日		

本文目次

1. 調査に至る経緯	81
2. 調査体制	81
3. 調査の記録	82
(一) 調査概要	82
(二) 水田跡	83
(三) 土層	85
(四) 出土遺物	86
(五) 小結	86

挿図目次

第1図 調査地点位置図 (1/4,000)	82
第2図 調査区位置図 (1/400)	83
第3図 造構配置図 (1/200)	84
第4図 土層断面図 (1/40)	85
第5図 遺物実測図 (1/1)	86
第6図 遺物実測図 (1/2)	86

写真目次

写真1 調査区全景1 (北東から)	84
写真2 調査区全景2 (東から)	84
写真3 調査区全景3 (北東から)	84
写真4 土層写真1 (南西から)	85
写真5 土層写真2 (西から)	85
写真6 土層写真3 (北から)	85
写真7 出土遺物	86
写真8 出土遺物	86

1. 調査に至る経緯

平成9年(1997年)2月17日、山浦泰蔵氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区那珂四丁目312番の共同住宅建設予定地内における埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は周知の那珂君体遺跡群の範囲内に含まれている地点であること、5次・6次調査地点に隣接していることなどから、埋蔵文化財課では審査願を受けて97年2月17日に試掘調査を行った。現状は畑で、試掘の結果、申請地内において現地表面より1.5~2.0m下の暗褐色粘質土層に水田造構が良好な状態で残っていることを確認した。この成果をもとに協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることになった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1997年5月6日に着手し、同年6月18日に終了した。調査対象地は申請地内のマンションの建設される524m²とした。また実際の調査面積は排土置場、作業安全面の関係から259m²である。

調査に当たっては地元弥生公民館・弥生小学校にもご理解を得、ご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

調査委託	山浦 泰蔵					
調査主体	福岡市教育委員会 教育長	町田英俊				
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長	荒巻 雄勝			
			柳田 純孝 (現任)			
		第2係長	山口 雄治			
調査専務	同	埋蔵文化財課 第1係	浅原 千晶			
		文化財整備課	河野 淳美			
			谷口 真由美 (現任)			
調査担当	同	埋蔵文化財課 第2係	松村 道博 池田 祐司 (試掘調査)			
			本田 浩二郎 (本調査)			
調査作業	岩永 嘉雄 小林 茂夫 羽岡 正春 早川 章 幸井 武夫					
	有田 恵子 泉本 タミ子 岩本 美重子 渋川 アキヨ 田中 トミ子					
	中川原 美智子 中村 フミ子 西山 徳子 林田 和子 北条 こず江					

調査期間中には福岡市教育委員会埋蔵文化財課の山口雄治氏、松村道博氏をはじめとする先輩、同僚諸氏から多くの助言をいただいた。記して感謝申し上げると共に、本報告書に十分に活かしきれなかったことをお詫びしたい。

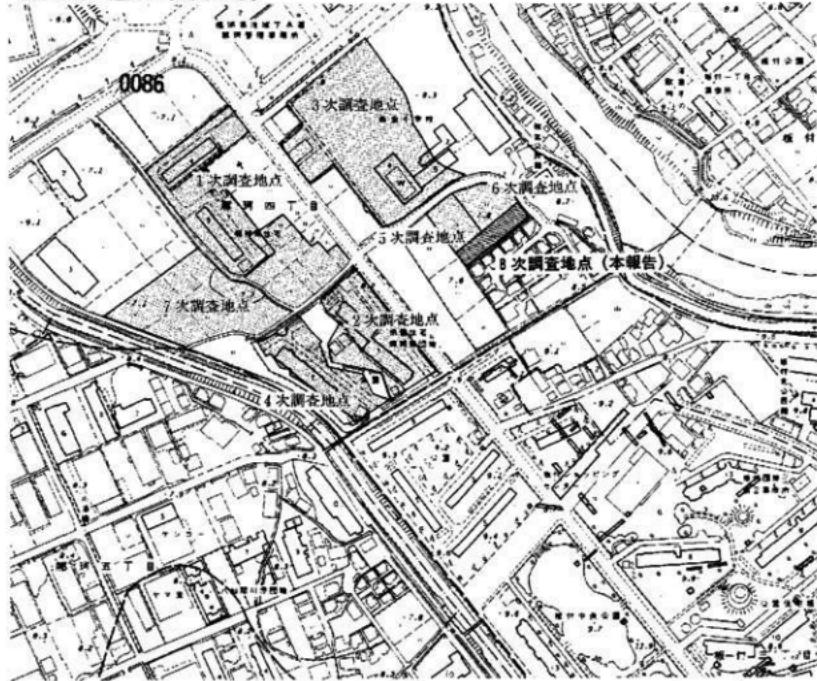
3. 調査の記録

(一) 調査概要

那珂君体遺跡群は、諸岡川と御笠川に挟まれた沖積地の低位面に占地し、標高は7m前後を測る。諸岡川は牛頭山地の北方に連なる山峻台地を解析しつつ北流し、その流域には谷底平野が形成されている。一方、御笠川は二日市地溝帯に沿って北北西方向にのびる地溝低地としての様相を呈する。両河川ともに広い扇状地平野を形成するが、旧河道が多くその影響を受け散在する加湿地を生み出している。8次調査地点は御笠川の左岸に隣接し、その影響を少なからず受ける地点である。

8次調査地点は5次・6次調査地点に隣接していたことから、その調査成果を参考にして重機による掘削を行った。調査は現地表面から1.5~2.0m程掘り下げた暗褐色粘質土層面を水田面として行った。3次・5次調査で上層水田と報告されていた近世の水田は明確には検出されなかったが、下層水田にあたる計8枚の水田遺構を確認した。しかし、調査区が50m×10mと狭長なレンチ状であったため、1枚の水田全体の面積を求ることはできなかった。調査区南側では多角形または長方形の平面形をもつ小区画水田が検出されたが、北側では旧地形が比較的安定していたためか、地形の制約を受けない規模の大きい長方形の水田が検出された。その他の遺構としては、6次調査において報告されていた時期不明の溝状遺構(SD-01)が検出された。

遺物は水田を覆っていた褐色粗砂層と水田の暗褐色粘質上層中から数点が出土した。水田という生産遺構の性格上、時期を決定できる遺物は出土していないが、周辺の調査事例から古墳時代前半頃に属する水田遺跡と考えられる。



- 82 - 第1図 調査地点位置図 (1/4,000)

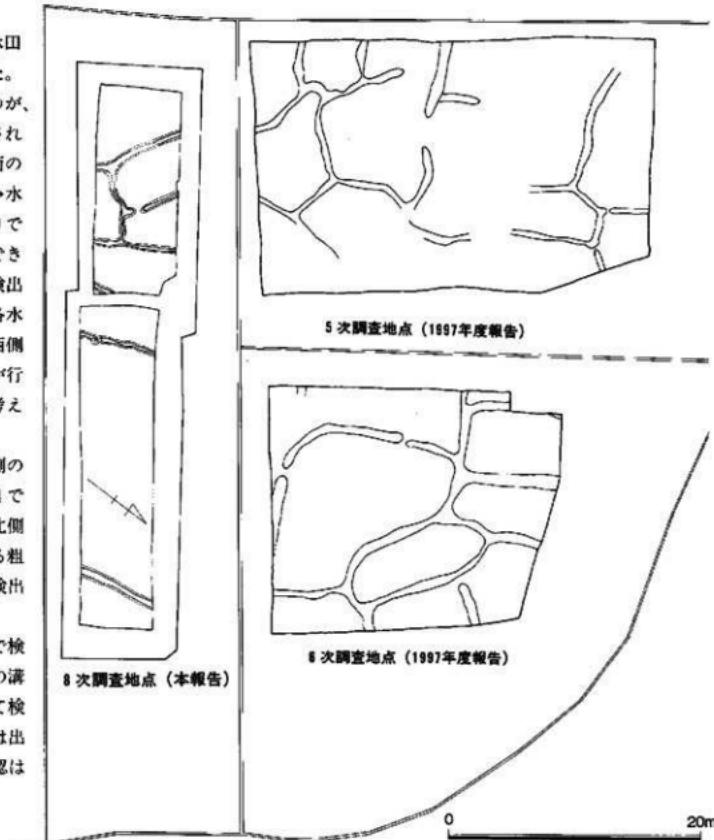
(二) 水田跡

今回調査を行った8次調査地点では計8枚の水田を検出した。調査区がトレンチ状に狭く水田1枚全体の面積・平面形を確認できるものはない。各水田面は標高6.60m~6.95mを測り、5次調査地点水田面より15cm~30cm程(水田面が高く、6次調査地点水田面より5cm~10cm程(水田面が)低くなっている。水田の区画は調査区南側では小規模な多角形または長方形を呈し、北側では規模の大きい長方形の平面形を呈する。これを隣接する5次・6次調査地点と比較してみると、5次調査区南東側では面積50~60m²の多角形を呈する水田区画がひろがり、6次調査地点南東側では大規模な水田区画がみられ8次調査の成果と符号している。これらの成果を参考に8次調査で検出した水田1枚の面積を想定してみると南側で50~60m²、北側では80m²程度と考えられる。北側水田7は現状で100m²以上の面積を有するが、これは畔が洪水等によって流失しているためであり、本来は6.95mの等高線付近に畔が存在していたものと思われる。畔は断面が錐錐状を呈し、幅50cm~60cm、高さ5cm~15cmを測る。いずれも地山削りだしであるが、一部洪水等の原因で流失した箇所は暗褐色砂質土で補修が行われている。

水口は水田2と水田4の間に検出された。浅い落ち込みをもつが、杭等の施設は確認されなかった。両水田面の高低差から水田4→水田2という水掛かりであったことが想定できる。他の箇所では検出されなかつたが、各水田面の高低差から西側方向へと水掛けが行われていたことが考えられる。

足跡は調査区南側の水田1・2・3・4では確認されたが、北側の水田では堆積する粗砂層が薄いためか検出できなかつた。

また、6次調査で検出された時期不明の溝も8次調査地点にて検出されたが、遺物は出土せず、時期の確認はできなかつた。



第2図 調査区位置図 (1/400)

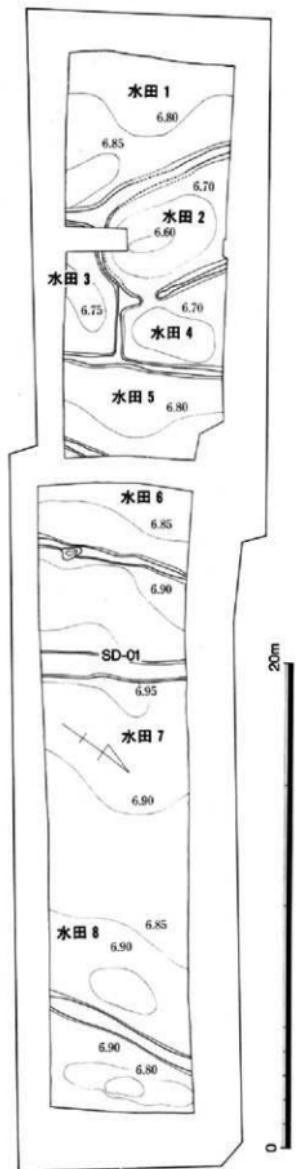


写真1 調査区全景1（北東から）



写真2 調査区全景2（東から）



写真3 調査区全景3（北東から）

第3図 造構配図 (1/200)

(三) 土層 (図3)

基本的に水平堆積している状況であり、堆積の方向は御笠川の最も近接する北東方向からである。土層は旧耕作土と堆積砂と水田床土に大別される。1層の灰褐色土層面上には厚さ1mほどの整地層があったが、これは調査地を駐車場にするときの土砂であり省略した。6次調査区では土層観察から3面の水田が確認されており、本調査区の土層では9層上面が対応する面と考えたが、平面的には捉えることはできなかった。

下層水田面である11層上には、粗砂の単純層ではなく粘質土との混合層(10層)が堆積し、また細砂と粗砂が交互に堆積している状況からも数回にわたる洪水が周辺を埋没させたことが伺える。12層は過去の調査において弥生時代の水田の可能性が考えられていたが小枝等の有機物を多く含むのみで遺物や畦畔の施設は検出されなかった。この層は厚さ20cm~30cm程度で、この下には灰褐色シルト層(厚さ10cm程)・明青灰色シルト層(厚さ20~30cm)・黄白色砂層(厚さ20~30cm)・黄褐色砂層と続き、造構は存在しない。

土層観察表

1. 灰褐色土(旧耕作土)
2. 黄褐色土(床土)
3. 灰褐色土
4. 暗褐色土(暗黄褐色の模様)
5. 暗褐色土
6. 黄白色粗砂(粒子大きい)
7. 黄白色粗砂(粒子細かい)
8. 灰褐色細砂(一部青灰色シルト)
9. 暗褐色粘質土(粗砂を多く含む)
10. 褐色粗砂(ブロック状の暗褐色粘質土を含む)
11. 暗褐色粘質土(下層水田面)
12. 黒褐色粘質土(自然の小枝等の有機物を多く含む)

含む)

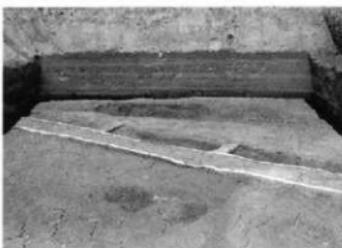


写真4 土層写真1 (南西から)



写真5 土層写真2 (西から)

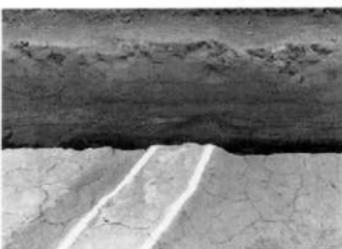
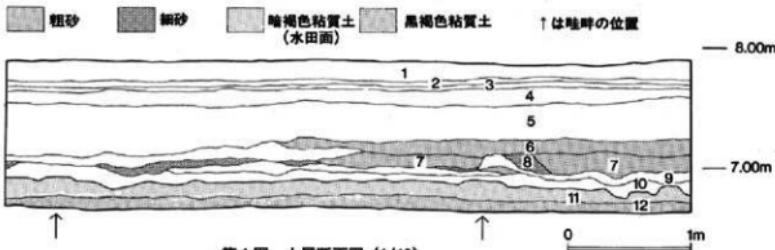


写真6 土層写真3 (北から)



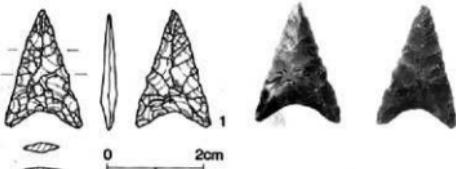
第4図 土層断面図 (1/40)

(四) 出土遺物 (図 5)

遺物は水田を覆っていた褐色粗砂層と水田の暗褐色粘質土層上面から数点のみが出土した。いずれも水田の埋土からの出土で、水田それ自体の時期を指し示すものではない。今回は図化できるものについて報告を行う。1は黒曜石製の石鎚である。長さ23mm、幅16mm厚さ3mmを測り、重量0.71gである。水田1の埋土から出土した。形態から弥生時代早期に属するものと考えられる。洪水時に土砂とともに流れこんだものと考えられる。

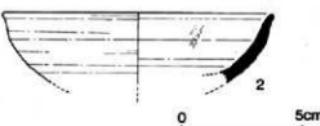
2は須恵器の高环の环身片である。復元径11.2cmを測り、全周の約1/4程度が残存する。水田7の埋土から出土した。器形の特徴から古墳時代後期のものと考えられる。

他の遺物は細片化、摩滅が著しく図化できなかつたが、水田の時期を確定できるようなものはなかつた。



第5図 遺物実測図 (1/1)

写真7 出土遺物



第5図 遺物実測図 (1/2)



写真8 出土遺物

(五) 小結

8次調査地点は、調査区の都合から発掘面積が狭く、個々の水田1枚の面積を求めるることもできなかつたが、これまでの調査事例から古墳時代前半に属する水田跡の広がりが確認できたことが成果として挙げられる。水田は計8枚検出され、南側で小区画の長方形または多角形の平面形を呈し、北側ではやや大区画の長方形の平面形を呈する。基盤層は暗褐色粘質土で畦畔は地山削りだしで、畦畔の方向は南北軸よりやや西側方向にふれている。水田の埋没は東側方向からの洪水によるもので、土層断面の観察からは黒褐色粘質土層面に弥生時代に属する水田造構は検出されなかつた。水田という生産造構の性格上、井堰や水路等の施設がなければ時期決定を行うための遺物の出土は他の造跡に比べ極端に少量であり、限られた調査区から得られる情報では造跡の全容は解明しがたく、不明な部分が多くなかつたが、隣接する5次・6次調査の結果からも5世紀に属する水田造構とすることができよう。同じ造跡群内においても、埋没過程の差異によって造跡の保存状況は大きく異なる。特に水田造構の場合、洪水の流路上に位置する調査区では部分的にしか造構は残存しておらず、全体の面的な把握、水田造構の復元は難しいものとなる。今後の水田造構の調査方法の発展と周辺の調査の増加に期待したい。

那珂君体遺跡VII

福岡市埋蔵文化財調査報告書第587集

1998年(平成10年)10月15日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大野一丁目8番1号

印 刷 今井印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1丁目2番18号

